

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書11

— 大網白里町上七反目遺跡・神房館跡・茂原市小高前遺跡・長柄町柿谷遺跡(1)・(2) —

平成23年2月

東日本高速道路株式会社

財団法人 千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書11

— おおみしらさと 大網白里町 かみななたんめ 上七反目遺跡・かんぼうやかた 神房館跡・もぼら 茂原市 おだかまえ 小高前遺跡・ながら 長柄町 かきやつ 柿谷遺跡 (1)・(2) —



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第654集として、東日本高速道路株式会社の首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した大網白里町上七反目遺跡ほか3遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、今まで調査例が少なかった九十九里地域の低地遺跡の調査による木製品等の貴重な資料や新たな遺跡の調査資料を提供できたものと思われます。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成23年2月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 赤 羽 良 明

凡 例

- 1 本書は、東日本高速道路株式会社による首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡と所在地、遺跡コードは以下のとおりである。

上七反目遺跡	山武郡大網白里町小中字七反目450-1ほか	(402-012)
神房館跡	山武郡大網白里町大字神房字打越521-2ほか	(402-007)
小高前遺跡	茂原市桂字小高前542-1ほか	(210-010)
柿谷遺跡(1)	長生郡長柄町榎本字イハギシ964-1ほか	(426-004)
柿谷遺跡(2)	長生郡長柄町榎本字イハギシ978-2ほか	(426-004)
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、東日本高速道路株式会社関東支社の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の経緯と組織・担当者は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、主席研究員兼副所長 相京邦彦が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、大網白里町教育委員会、茂原市教育委員会、長柄町教育委員会のご指導・ご協力を得た。
- 7 本編で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図	国土地理院発行	1/50,000	地形図「東金」	(NI-54-19-11)
第1図	国土地理院発行	1/50,000	地形図「茂原」	(NI-54-19-12)
第1図	国土地理院発行	1/50,000	地形図「姉崎」	(NI-54-19-16)
第2図	国土地理院発行	1/25,000	地形図「東金」	(NI-54-19-11-4)
第2図	国土地理院発行	1/25,000	地形図「茂原」	(NI-54-19-12-3)
第3図	国土基本図	大網白里町	一部改変	1/2,500
第8図	国土基本図	大網白里町	一部改変	1/2,500
第13図	茂原都市計画平面図	No.E 1	1/2,500	一部改変
	国土基本図	大網白里町	一部改変	1/2,500
第18図	東日本高速道路株式会社作成	一部改変	1/1,500	
- 8 周辺航空写真(図版1)は、京葉測量株式会社による平成15年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。測量値は柿谷遺跡は日本測地系を、他の3遺跡は世界測地系を使用した。
- 10 遺物の色調については、農林水産省・(財)日本色彩研究所監修、日本色研事業株式会社発行「新版標準土色帖」1988年掲載の用語を使用した。
- 11 本書で使用した遺構番号は、調査時の番号を踏襲した。図面等における記号等の用例は本文中に掲載した。赤彩はNo111、黒色処理はNo61を使用した。須恵器は断面に墨入れをし、カマドの火焼部はNo320を使用した。



炭化物



焼土



カマド, 山砂



赤彩



黒色処理

12 本編で使用した遺構の略称は以下のとおりである。

SI：住居 SD：溝 SK：土坑 SH：ピット群

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査及び整理の組織と担当	1
第3節	遺跡の位置と周辺の環境	5
第4節	調査の方法	6
第2章	上七反目遺跡	7
第1節	概要	7
第2節	検出した遺構と遺物	7
第3章	神房館跡	13
第1節	概要	13
第2節	調査の成果と遺物	15
第4章	小高前遺跡	20
第1節	概要	20
第2節	検出した遺構と遺物	20
第5章	柿谷遺跡	26
1	柿谷遺跡(1)	28
第1節	概要	28
第2節	検出した遺構と遺物	29
2	柿谷遺跡(2)	39
第1節	概要	39
第2節	検出した遺構と遺物	40
第6章	まとめ	50
	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	周辺地形と調査遺跡	2	第5図	出土遺物(1)土器(1)	10
第2図	周辺のおもな遺跡	4	第6図	出土遺物(2)土器(2)	11
			第7図	出土遺物(3)木製品	12
	上七反目遺跡				
第3図	トレンチ配置図とグリッドの名称	8		神房館跡	
第4図	SD-001・拡張区遺物出土状況図	9	第8図	地形図及び調査地点	14

第9図	A～D地点 トレンチ配置図……………	16	第21図	SI-003・SI-004・SI-005・SI-006 平面図・土層断面図……………	32
第10図	E～G地点 トレンチ配置図……………	17	第22図	SI-007・SI-008平面図・土層断面図…	34
第11図	B地点 トレンチ平面図・土層断面図…	18	第23図	SB-001 平面図・土層断面図……………	36
第12図	C・D・F地点 トレンチ配置図・土層 断面図・出土遺物……………	19	第24図	SK-001～SK-005平面図・土層断面図 ……………	37
小高前遺跡			第25図	SK-007・SK-008・SK-012 平面図・土層断面図……………	38
第13図	トレンチ配置図・グリッド名称……………	21	第26図	柿谷遺跡(2) 遺構配置図……………	39
第14図	トレンチ配置図……………	22	第27図	SK-001～004 平面図・土層断面図…	40
第15図	ピット群 平面図・土層断面図……………	23	第28図	SK-005～008・SK-011平面図・ 土層断面図……………	42
第16図	拡張区 土層断面図・ピット群……………	24	第29図	出土遺物(1) 土器(1)……………	44
第17図	出土遺物……………	25	第30図	出土遺物(2) 土器(2)……………	45
柿谷遺跡			第31図	出土遺物(3) 土器(3)……………	46
第18図	調査区・トレンチ配置図・グリッド名称 ……………	27	第32図	出土遺物(4) 土器(4)……………	47
第19図	柿谷遺跡(1) 遺構配置図……………	28	第33図	出土遺物(5) トレンチ出土土器…	48
第20図	SI-001・SI-002 平面図・土層断面図 ……………	30	第34図	出土遺物(6) 転用砥石……………	49
			第35図	出土遺物(7) 石製品……………	49

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧……………	5	小高前遺跡		
上七反目遺跡			第5表	小高前遺跡 検出遺構一覧……………	20
第2表	上七反目遺跡 遺物観察表(土器)……………	11	第6表	小高前遺跡 出土遺物観察表……………	24
第3表	上七反目遺跡 遺物観察表(木製品) ……………	11	柿谷遺跡		
神房館跡			第7表	柿谷遺跡(1) 検出遺構一覧……………	26
第4表	神房館跡 出土遺物観察表……………	15	第8表	柿谷遺跡(2) 検出遺構一覧……………	26
			第9表	柿谷遺跡(1) 出土遺物観察表(土器) ……………	43
			第10表	柿谷遺跡(2) 出土遺物観察表……………	48
			第11表	柿谷遺跡(1) 出土遺物観察表(石製品) ……………	48

図版目次

- 図版1 周辺航空写真
遺跡内の道標
- 上七反目遺跡
- 図版2 調査前遠景(1)
調査前遠景(2)
- 図版3 SD-001全景
1T 全景
4T 全景
拡張区土層断面
拡張区遺物出土状況(1)
拡張区遺物出土状況(2)
- 神房館跡
- 図版4 調査前遠景 A地点
調査前近景 F地点
- 図版5 A地点 1T
A地点 2T
A地点 3T
A地点 土層断面
A地点 3T 土層断面
B地点 1T
B地点 2T
C地点 トレンチ
- 図版6 D地点 1T
D地点 2T
D地点 3T
D地点 4T
D地点 1T内焼土遺構
E地点 トレンチ
F地点 2T
F地点 3T
- 図版7 G地点 1T
G地点 2T
G地点 3T
- 小高前遺跡
- 図版8 調査前遠景
拡張区検出ピット群
- 図版9 1T
2T
3T 遺物出土状況(13)
4T 遺物出土状況(12)
6T
8T
SH-001 (P1・P2)
SH-002 (P1・P2)
- 図版10 SH-003
SH-004
SH-005
SH-006
SH-007
SH-008
SH-009
SH-010
- 図版11 SH-011
SH-012
SH-013
SH-016
SH-017
SH-018
SH-019
SZ-001
- 柿谷遺跡(1)
- 図版12 調査前遠景
1T
3T

	4T		図版20	SK-001
	5T			SK-002
図版13	6T			SK-003
	7T			SK-004
	8T			SK-005
	9T			SB-001 P1
	10T			SK-007・008 全景
	11T		図版21	柿谷遺跡(1) 航空写真 遠景
	12T			柿谷遺跡(1) 航空写真 近景
	13T			柿谷遺跡(2)
図版14	14T			
	15T			柿谷遺跡(2)
	16T		図版22	2T
	SI-001 (西側から)			10T
図版15	SI-001 カマド1			SK-001・002
	SI-001 カマド2			SK-003・004
	SI-001・002 全景			SK-005・006・007・008
	SI-002 カマド			SK-009
図版16	SI-003 全景			SK-010
	SI-004 全景			SK-011
図版17	SI-005・SK-004 全景		図版23	出土遺物(1) 土器(1)
	SI-006 全景		図版24	出土遺物(2) 土器(2)
図版18	SI-007 (東側から)		図版25	出土遺物(3) 土器(3)
	SI-007 カマド		図版26	出土遺物(4) 土器(4)
	SI-007・SK-015 土層断面		図版27	出土遺物(5) 土器(5)・石製品
図版19	SI-008 全景		図版28	出土遺物(6) 木製品
	SB-001・SK-002 全景			

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯（第1図，図版1）

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は，都心から半径およそ40km～60kmの位置に計画された延長約300km（千葉県内95km）におよぶ環状の高規格幹線道路である。横浜，厚木，八王子，つくば，稲敷，成田，東金，木更津などの各都市を環状に連絡し，東京湾アクアライン，東京外かく環状道路などと一体となって，首都圏の広域的な幹線道路網を構成し，首都圏3環状道路のもっとも外側に位置する環状道路である。

千葉県内については，茨城県稲敷市から利根川を渡り千葉県に入り，神崎町神崎ICで国道356号線と連結し，その後南下し成田市大栄JCTで東関東自動車道と接続する。大栄JCTから松尾横芝ICへ続き，松尾横芝ICから東金IC/JCT間は銚子連絡道路を共用する。東金IC/JCTで東金有料道路と接続し，千葉市方面へのアクセスを確保している。さらに，大網白里町，茂原市，長柄町，長南町を經由し，市原市，木更津市，袖ヶ浦市からアクアラインにつながり，神奈川県に至るルートである。

本報告書で報告する各遺跡は，東金IC/JCTから茂原長南IC間に所在する遺跡である。

東金市から木更津市までの各ICは，東金IC/JCT（東金市小野，千葉東金道路）～茂原北IC（外房有料道路）～茂原長南IC（長南町法恩寺）～市原南IC（国道297号）～市原高滝湖SA～木更津東IC（木更津市下郡，国道410号）～かずさIC（県道33号君津平川線）～木更津JCT（館山自動車道）が設置され，首都圏及び千葉県の交通渋滞の分散に寄与するものと期待されている。

第2節 調査及び整理の組織と担当

今回報告する各遺跡の発掘作業，整理作業の実施年次等は以下のとおりである。

発掘調査

1. 上七反目遺跡

所在地：山武郡大網白里町小中字七反目450-1ほか

調査期間：平成21年10月19日～平成21年11月6日

調査対象面積：1,809㎡

確認調査面積：上層 454㎡

下層 立川ローム層が残存しないため調査なし

本調査面積：確認調査の範囲で終了

組織：調査研究部長 及川淳一，中央調査事務所長 折原 繁

担当：主席研究員兼副所長 池田大助

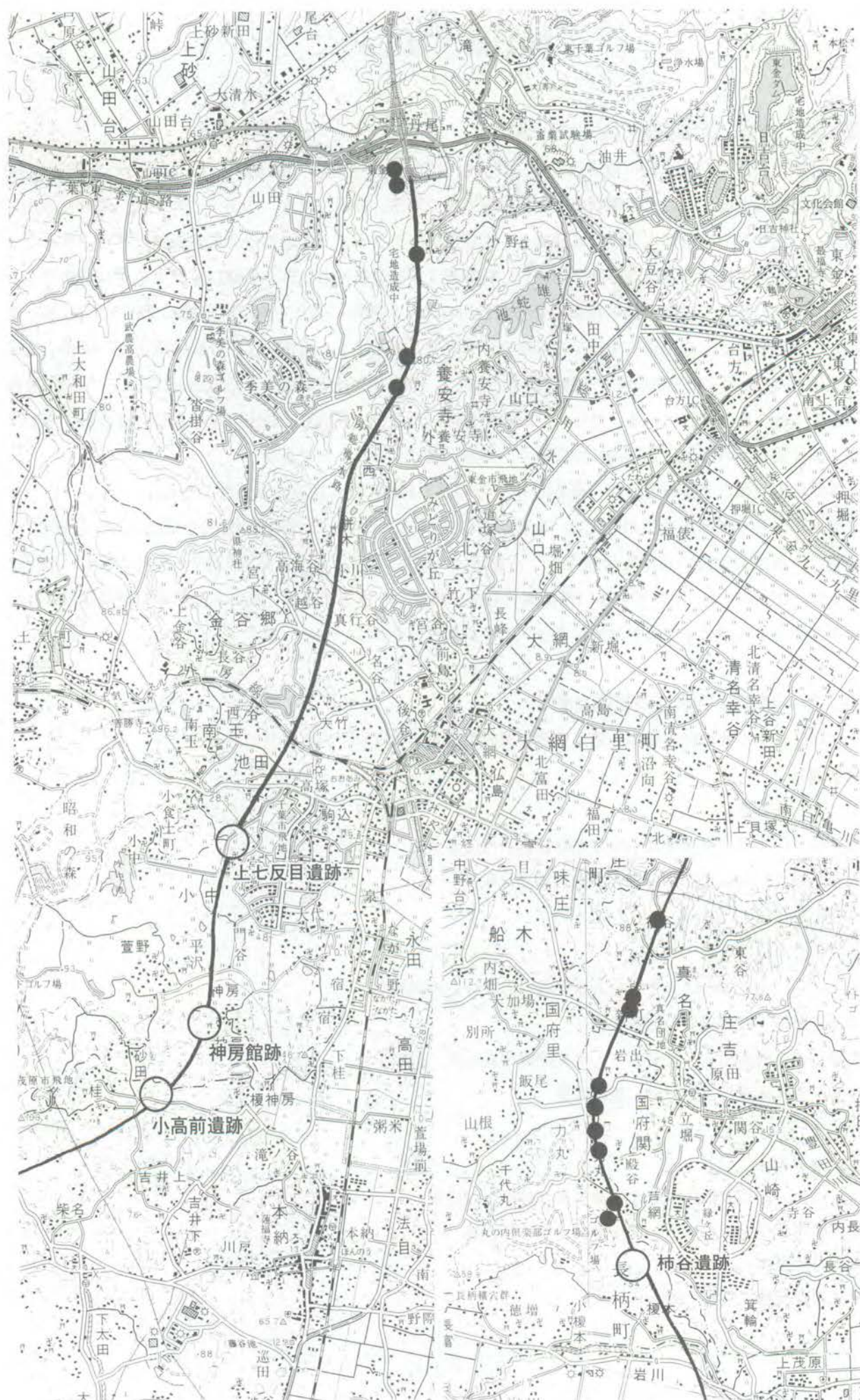
2. 神房館跡

所在地：山武郡大網白里町大字神房字打越521-2ほか

調査期間：平成18年12月1日～平成18年12月25日

調査対象面積：24,997㎡

確認調査面積：上層 340㎡



第1図 周辺地形と調査遺跡 (1:50,000)

下層 立川ローム層が残存しないため調査なし

本調査面積：確認調査の範囲で終了

組織：調査研究部長 矢戸三男，中央調査事務所長 西川博孝

担当：上席研究員 蜂屋孝之

3. 小高前遺跡

所在地：千葉県茂原市桂字小高前542-1ほか

調査期間：平成21年4月1日～平成21年4月20日

調査対象面積：5,676㎡

確認調査面積：上層 480㎡

下層 立川ローム層が残存しないため調査なし

本調査面積：確認調査の範囲で終了

組織：調査研究部長 及川淳一，中央調査事務所長 折原 繁

担当：上席研究員 鶴澤正則

4. 柿谷遺跡（1）

所在地：長生郡長柄町榎本字イハギシ964-1ほか

調査期間：平成18年8月16日～平成18年10月25日

調査対象面積：3,900㎡

確認調査面積：上層 448㎡

下層 立川ローム層が残存しないため調査なし

本調査面積：上層 500㎡

組織：調査研究部長 矢戸三男，中央調査事務所長 西川博孝

担当：上席研究員 山田貴久

5. 柿谷遺跡（2）

所在地：長生郡長柄町榎本字イハギシ978-2ほか

調査期間：平成21年4月3日～平成21年4月30日

調査対象面積：2,892㎡

確認調査面積：上層 289㎡

下層 立川ローム層が残存しないため調査なし

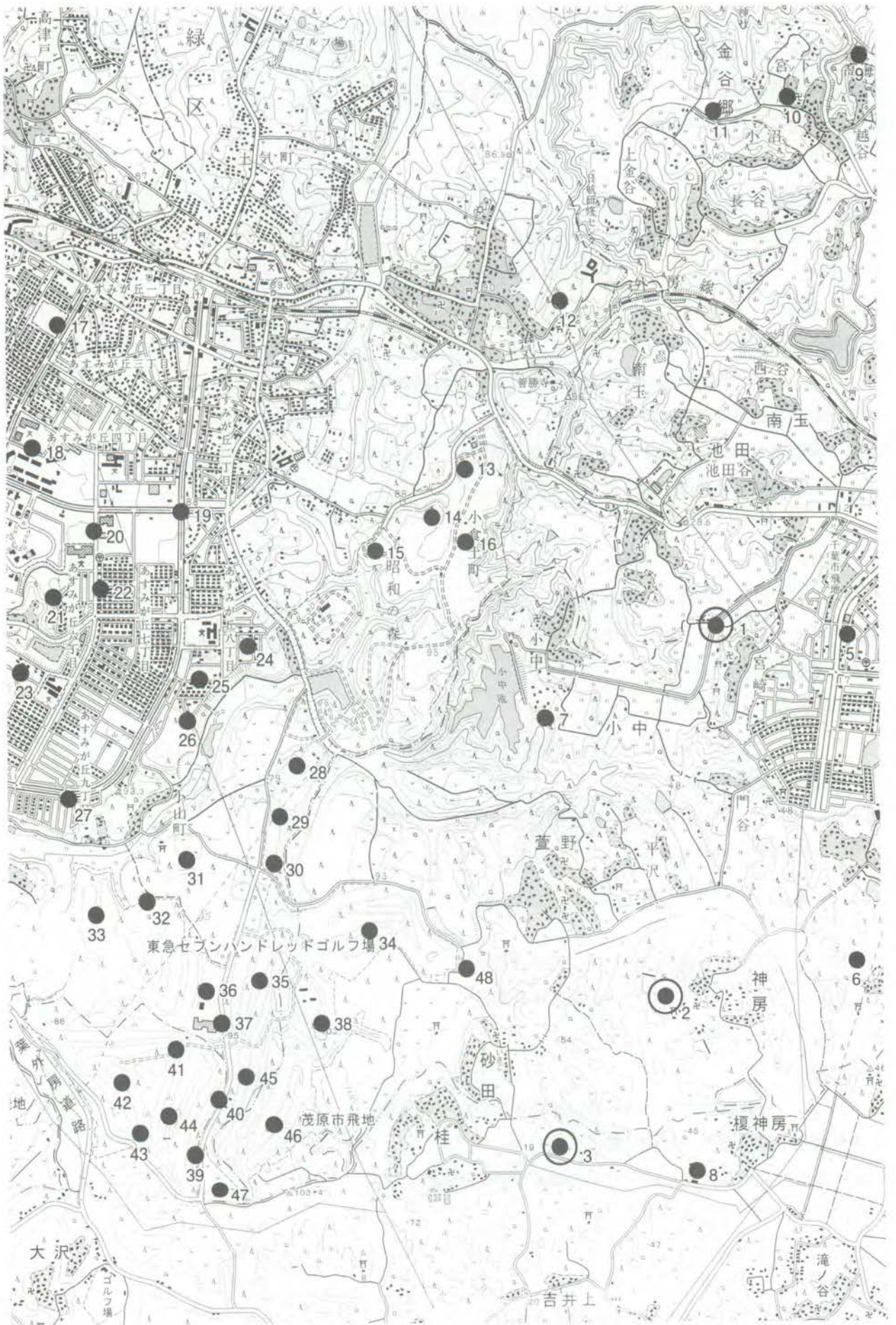
本調査面積：確認調査の範囲で終了

組織：調査研究部長 及川淳一，中央調査事務所長 折原 繁

担当：上席研究員 川勝里文

整理作業

調査期間：平成22年4月1日～平成22年9月31日



第2図 周辺のおもな遺跡 (1:25,000)

第1表 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	墨書等	No	遺跡名	墨書等
1	上七反目遺跡		25	文六第6遺跡	
2	神房館跡		26	内野台遺跡	
3	小高前遺跡		27	丸山遺跡	
4	柿谷遺跡(1)・(2)		28	住吉遺跡	
5	瑞穂横穴群		29	東住吉遺跡	雄鳥, 丈, 萬
6	永田城跡		30	東住吉南遺跡	
7	小中横穴		31	西鹿子遺跡	
8	池田丸山遺跡		32	観音地遺跡	
9	餅木横穴群		33	赤坂遺跡	
10	高海寺跡		34	南麦台遺跡	草野, 万所, 浦上, 葛
11	反町遺跡		35	中鹿子第I遺跡	廣?, 十
12	土気城跡		36	上鹿子遺跡	
13	東城楽台遺跡		37	中鹿子2遺跡	於夫井, 山田, 草, 國厨
14	小食土廃寺	富	38	中林遺跡	
15	荻生遺跡		39	内野第I遺跡	
16	辰ヶ台遺跡		40	内野第III遺跡	
17	南河原坂遺跡群		41	内野第II遺跡	
18	南河原坂窯跡群		42	神田山第I遺跡	
19	鐘つき堂遺跡		43	神田山第II遺跡	建物跡, 溝火葬墓ほか
20	坂ノ腰遺跡		44	神田山第III遺跡	土壘, 堀, 台形整形区画
21	大椎第一遺跡		45	大滝遺跡	
22	大椎第二遺跡	キ記号?, 七, 長, 寺	46	砂田中台遺跡	於夫井
23	弥三郎第三遺跡	大椎廃寺	47	中鹿子遺跡	
24	観音山遺跡		48	宮台遺跡	

※4 柿谷遺跡(1)・(2)は長柄町所在のため第2図に図示していない。

組織：調査研究部長 及川淳一，中央調査事務所長 白井久美子

担当：主席研究員兼副所長 相京邦彦

内容：水洗・注記～報告書刊行まで

第3節 遺跡の位置と周辺の環境(第1・2図, 第1表, 図版1)

今回報告する4遺跡は、大網白里町・茂原市周辺と、長柄町の2地点に所在する。大網白里町に所在する2遺跡は、すべてが台地下か台地下に展開している水田面あるいは低地に所在している。本地域の周知の遺跡が台地上に立地していることと比較して、今回の調査資料は低地の新資料を提供するものと考えられる。

これらのうち3遺跡(上七反目遺跡, 神房館跡, 小高前遺跡)が所在する地域は、何れも上総国山辺郡に所属すると推定されている。この山辺郡は南は長柄郡に、西は市原郡に、北は印旛郡に接する。郡の格としては下郡に相当し、郡には7つの郷が属している。

7つの郷とは禾生(粟生)(あお)郷, 岡山(おかやま)郷, 管谷(すがや)郷, 山口(やまぐち)郷, 高文(たかふみ)郷, 草野(かやの)郷, 武射(むさ)郷の7つで、これら7つの郷は多くの先学によって現在地の比定がされている。

今回報告する4遺跡のうち柿谷遺跡を除く3遺跡は、「和名類聚抄」に掲載されている上総国山辺郡草野郷内に所在していると推定される¹⁾。

「草野郷」は現在大網白里町に「萱野」の地名が現存しており、この地名と関連のある墨書土器が南麦台遺跡(34)²⁾から出土している。南麦台遺跡は、東京湾に流入する村田川水系と赤目川水系の分水嶺に位置し、掘立柱建物跡, 竪穴住居が発掘調査され、「草野」「草」「草新」「万所」「長本」「殿寺」「葛」「物

真」「百万」「西」「井」「酒」などの墨書土器が出土している。「草野」は「和名類聚抄」にみられる「草野（かやの）」と比定されており、また、「下総国千葉郡千葉郷」と刻書された石製紡錘車が出土し、地域間相互人的交流も推定され、注目されている。

この他にも、今回調査した3遺跡に密接に関係する遺跡群が千葉市土気地区から現在の大網白里町域に分布している。調査した遺跡はそれらの周辺部及びそれら遺跡の立地する台地下や台地から九十九里海岸に移行する傾斜部分に発達した小支谷に面しており、新しい発掘調査の知見が提供された。

山辺郡と長柄郡の境界は、赤目川と考えられ、神房館跡³⁾及び小高前遺跡はその郡界である赤目川上流の支谷に面した微高地に立地している。近くには神田山第Ⅱ遺跡や第Ⅲ遺跡⁴⁾等が所在している。神田山第Ⅲ遺跡からは、土壘状遺構、塚、台形成形区画、堀跡や陶磁器類の出土があり、14世紀を中心とした館跡と推定されている。

今回報告する遺跡の中でもっとも南に位置する柿谷遺跡周辺の遺跡群については、現在周辺で遺跡の調査が進められており、それらの遺跡の発掘調査報告書に掲載予定の周辺の遺跡の項で触れたいと思う。従って、今回は柿谷遺跡周辺の遺跡の概要については触れないこととしたい。

注1 「千葉県史 通史編 古代2」 財団法人千葉県史料研究財団 2001

2 南麦台遺跡 「草野」「万所」「浦上」「葛」の墨書が出土している 山武郡市文化財センター 1994

3 神房館跡

小高春男「大網白里町史」P234 大網白里町 1986

小高春男「山武の城」P44「字殿谷」私家本 2006

4 神田山第Ⅱ遺跡・神田第Ⅲ遺跡「千葉県茂原市桂遺跡群発掘報告書」(財)長生郡市文化財センター調査報告書第8集 1990

神田山第Ⅱ遺跡からは建物跡、塚、溝・火葬墓等が検出されている。

神田山第Ⅲ遺跡からは土壘状遺構、堀跡、台形整形区画等が検出されている。

第4節 調査の方法

調査にあたっては、調査区全域を覆うように国土方眼座標をもとに原則として一辺20mの大グリッドを設定した。名称は南北方向に南に向かって1, 2, 3, 東西方向に東に向かってA, B, Cとし、この数字とアルファベットを組み合わせて大グリッド名とし、大グリッドの中に一辺2mの小グリッドを設置する方法を基本とした。小グリッドは西北隅を00とし、東南隅を99として、全部で100個の小グリッドを設定した。遺跡によっては大グリッドの一辺を40mとした遺跡もある。この場合の小グリッドは一辺4mとした。

上層の確認調査は調査対象面積の10%を目安に、地形等を考慮に入れながらトレンチを設定し調査を行った。トレンチの位置は国土方眼座標に基づき東西方向あるいは南北方向に一致したトレンチと、地形等を優先して設定した任意方向のトレンチがあり、遺跡によって異なっている。確認トレンチによって遺構の所在が認められた場合は周囲を拡張して本調査を実施した。

下層の確認調査は、今回報告する4遺跡は立川ローム層が存在していないため、実施しなかった。

第2章 上七反目遺跡

第1節 概要

上七反目遺跡は山武郡大網白里町小中字七反目450-1を代表地番として所在する。小中川は南白亀川水系に属し、その上流に位置する。小中川の源流は千葉市との境界付近にその源を発し、東方に流れ下り九十九里浜に向かう。小中川はこのようにこの地域特有な小支谷を形成しながら東流し、JR大網駅付近で北方の金谷郷から東流して来た小川と合流しさらに東流する。いったん低地に出た後に南白亀川と合流し、さらに赤目川と合流し太平洋に注いでいる。このように上七反目遺跡は、東京湾と太平洋との土気地区の分水嶺から太平洋に注ぐ小中川により開析された谷津田に面した微高地上に立地しており、標高は約12mを測る。

上七反目遺跡は低地に所在しており、確認トレンチ内には多量の湧き水があり、ポンプによる排水を継続しながら進められたが、確認トレンチの壁は、湧き水によって軟弱な土質となり、土層断面の記録はとれなかった。

上七反目遺跡は、「和名類聚抄」に掲載されている「高文郷」と「草野郷」の中間に位置していると推定される。遺跡自体は低地部に立地しており、出土した木製品は本来使用されていた位置からの出土と考えると良いと思われる。一方、地山の青灰色粘土層面で土器集中地点および溝が確認された。台地から延びる微高地上に立地した小規模集落の残存部と推定される。調査地点は、数度にわたる耕地整理によって深い位置まで掘削されているが、調査地点のみが畑地となっていたため、攪乱を受けずに残存していた。

遺構としては、中世と推定される溝1条が検出された。

遺物は古墳時代の土師器、平安時代の土師器、須恵器及び中世の陶磁器片が出土し、また、木製品の出土も見られた。木製品は田下駄、杭、板状木製品が出土しているが、出土状況の詳細は不明である。

第2節 検出した遺構と遺物（第3～7図、第2・3表、図版3・23・24・28）

遺構（第3～4図、図版3）

事業地の路線に沿った形や直行する形で、幅2mのトレンチを8本設定し、遺構の確認調査及び遺物の出土状況を観察した。その結果、中央部に設置した5T、6T、8Tの各トレンチから溝状の遺構（SD-001）を検出し、その周囲から土器片の出土が見られたため、溝状遺構を中心として周囲を拡張した。

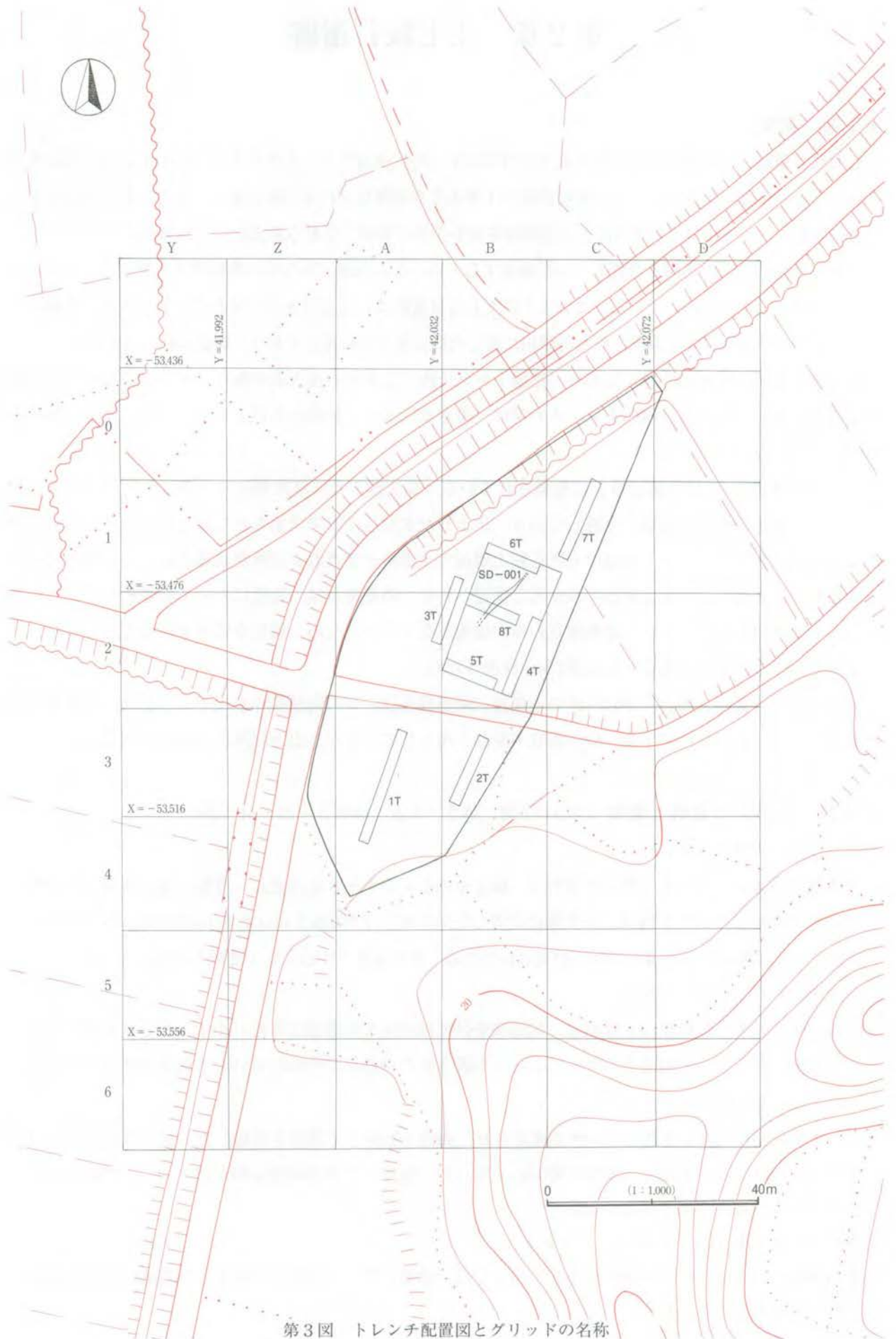
SD-001（第4～6図、図版3）

溝状遺構は拡張した範囲内で収束し、確認調査区ではほぼ全形が確認できた。小中川の分流と推定され、出土した田下駄などの木製品も小中川によって形成された沖積地で行われていた水稻耕作作業などで使用されたものと思われる。

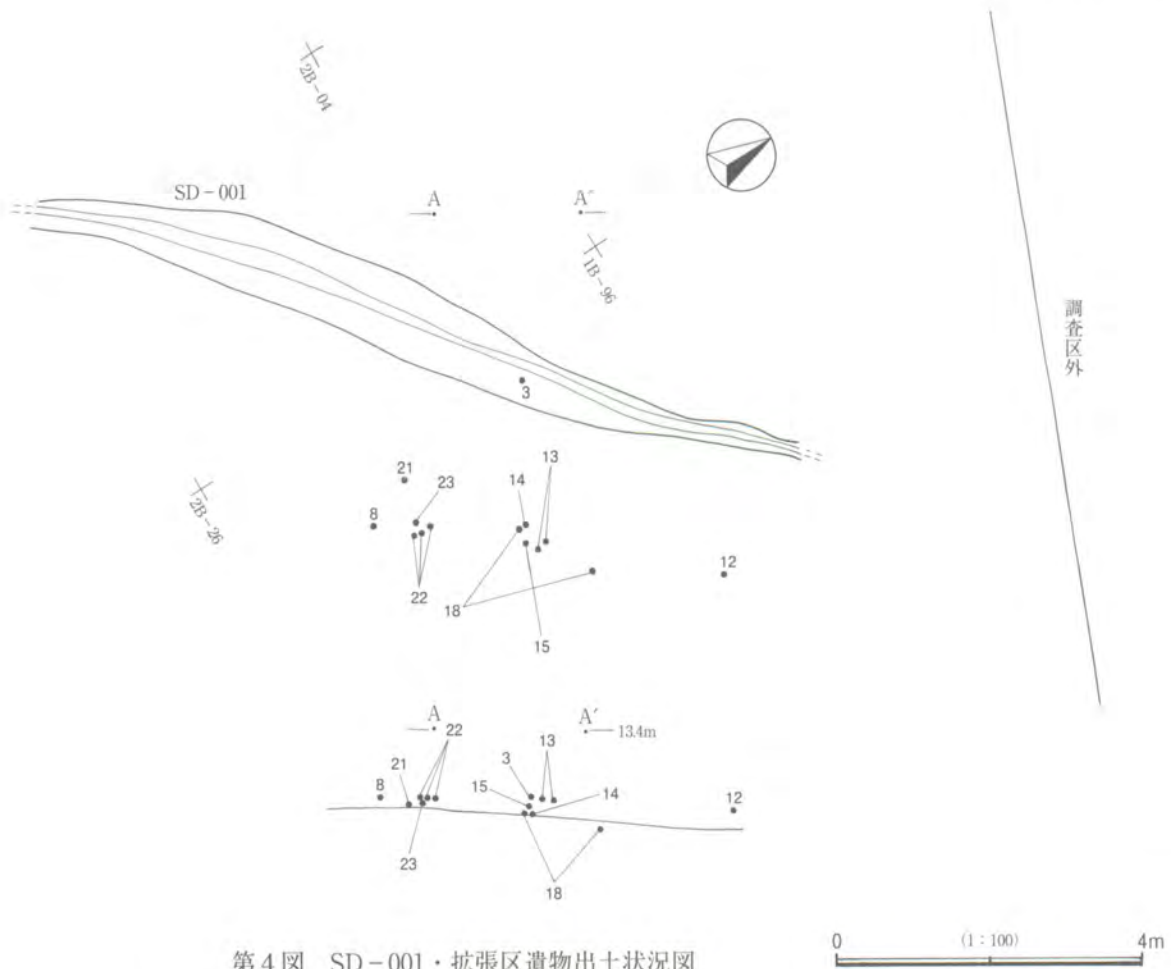
このようにSD-001は確認トレンチで確認され、周囲を拡張して調査を実施した。検出された長さは約11m、溝の幅は0.5m～1mで、深さは約0.3mであった。検出した溝の両端は幅が狭まり、自然消滅している。溝内からの遺物の出土はなかった。

遺物集中地点（第4図、図版3）

溝の東側から古墳時代の土器が集中して出土した。遺構に伴っての出土ではなく微高地にあった集落から流れ出た遺物と思われる。



第3図 トレンチ配置図とグリッドの名称



第4図 SD-001・拡張区遺物出土状況図

遺物（第4～7図，第2表，図版3・23・24）

遺物はSD-001（溝）の東側から出土したが，遺構の所在は確認できなかった。土器は坏，高坏が主で，手捏ね土器が1点みられ，甕は少なかった。

高坏は脚がほぼ直線的に開いた後に直線的に端部へ移行するタイプAと，脚部の中央がやや丸みを持つタイプBの二種がある。坏部から脚部までが見られるものはないが，タイプAの坏部も直線的に開くものと推定される。出土した土器片はすべて摩滅している。

1は手捏ね土器である。底部を欠損している。2は高台付坏で坏部を欠損している。3は坏の底部片で，上げ底を呈している。4は坏で底部を欠損する。5～8は埴形土器で，全体に摩滅している。9～19は高坏で，これらも全体に摩滅している。20～21は壺である。22～24は甕で，25は小型甕である。出土した土器群は古墳時代中期から奈良・平安時代までの時間的幅があり，混在して出土している。

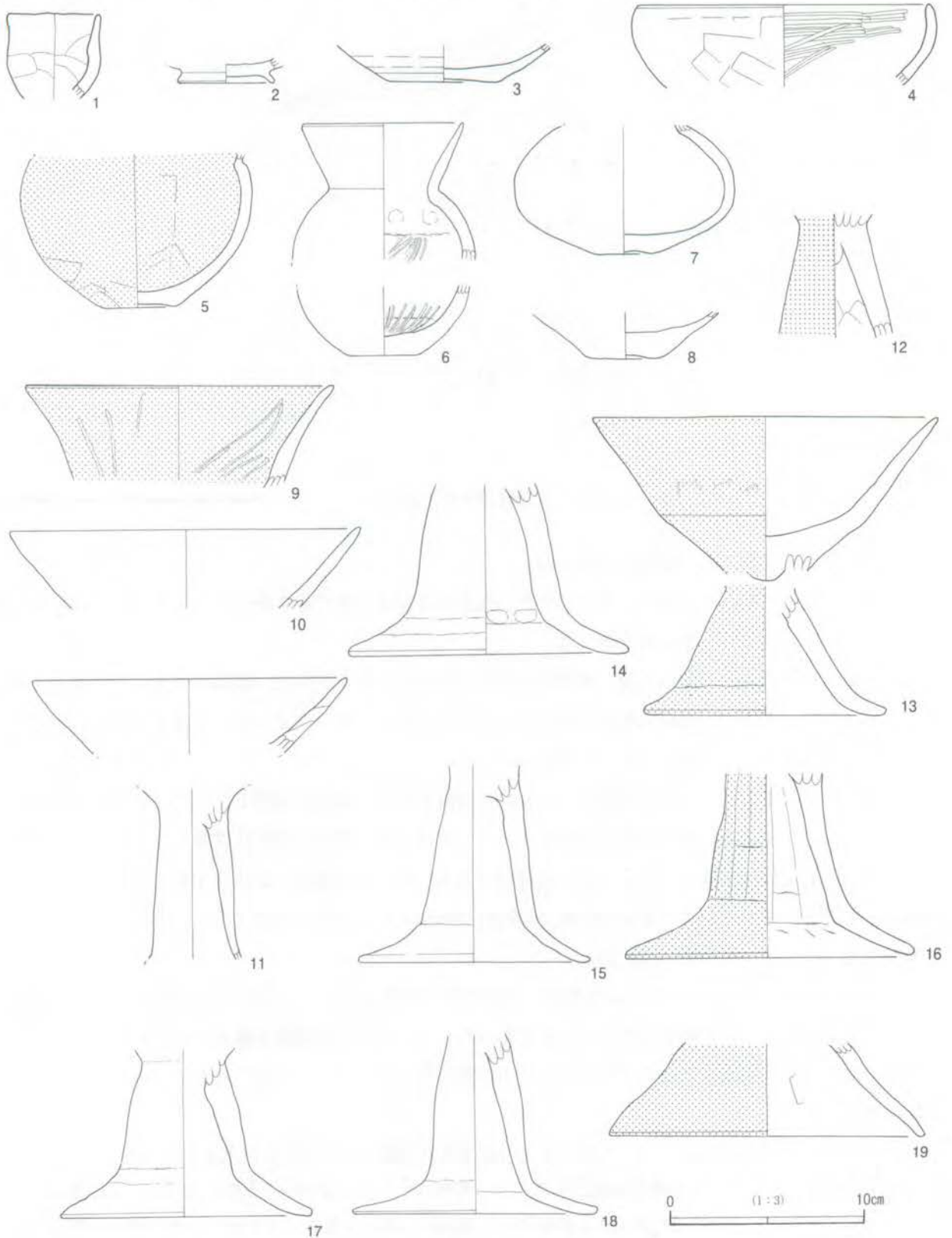
木製品（第3・7図，第3表，図版28）

4T（第4トレンチ）の中央部から木製品（木質遺物）が出土した。トレンチは前述したとおり土質が軟弱で，湧水のために排水路を設置する必要があった。その作業中に遺物を確認したため採取した。従って個々の遺物の出土状況のデータをとることは不可能であった。すべて一括で取り上げられており，出土層位は不明である。

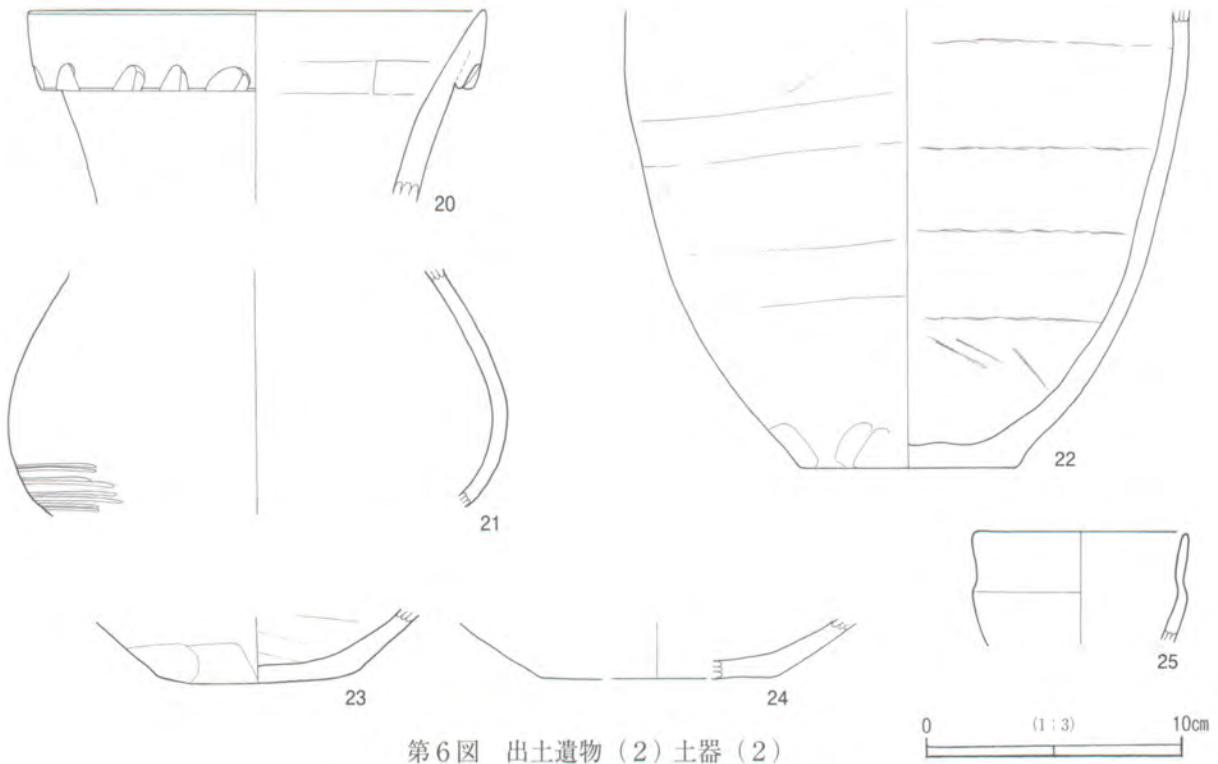
1は田下駄と思われる製品で，3つの孔と1つの約半分の孔跡が見られる。厚さは5mmほどと薄い。2は細長い板状の製品である。一方の端部は破損しており，本来はもう少し長いものと推定される。3は加工された板材と思われ，小破片で詳細は不明であるが抉り状と思われる部分がある。4も加工された板状の製品である。

5・6も板状に加工された小破片である。7はもっとも大きなもので、杭先の一部と推定される。

これらの木製品は、伴出した遺物がなく、また明確な遺構からの出土ではない、そのうえ、調査担当者によると周囲から土器片とともに新しい針金状の金属も出土していると記録されている。そのため、木製品の時期を同定することはできない。しかし、周辺から古墳時代前期から奈良・平安時代の土器群が出土しており、これらの木製品も古墳時代から中世の間に帰属するものと推定される。



第5図 出土遺物(1)土器(1)



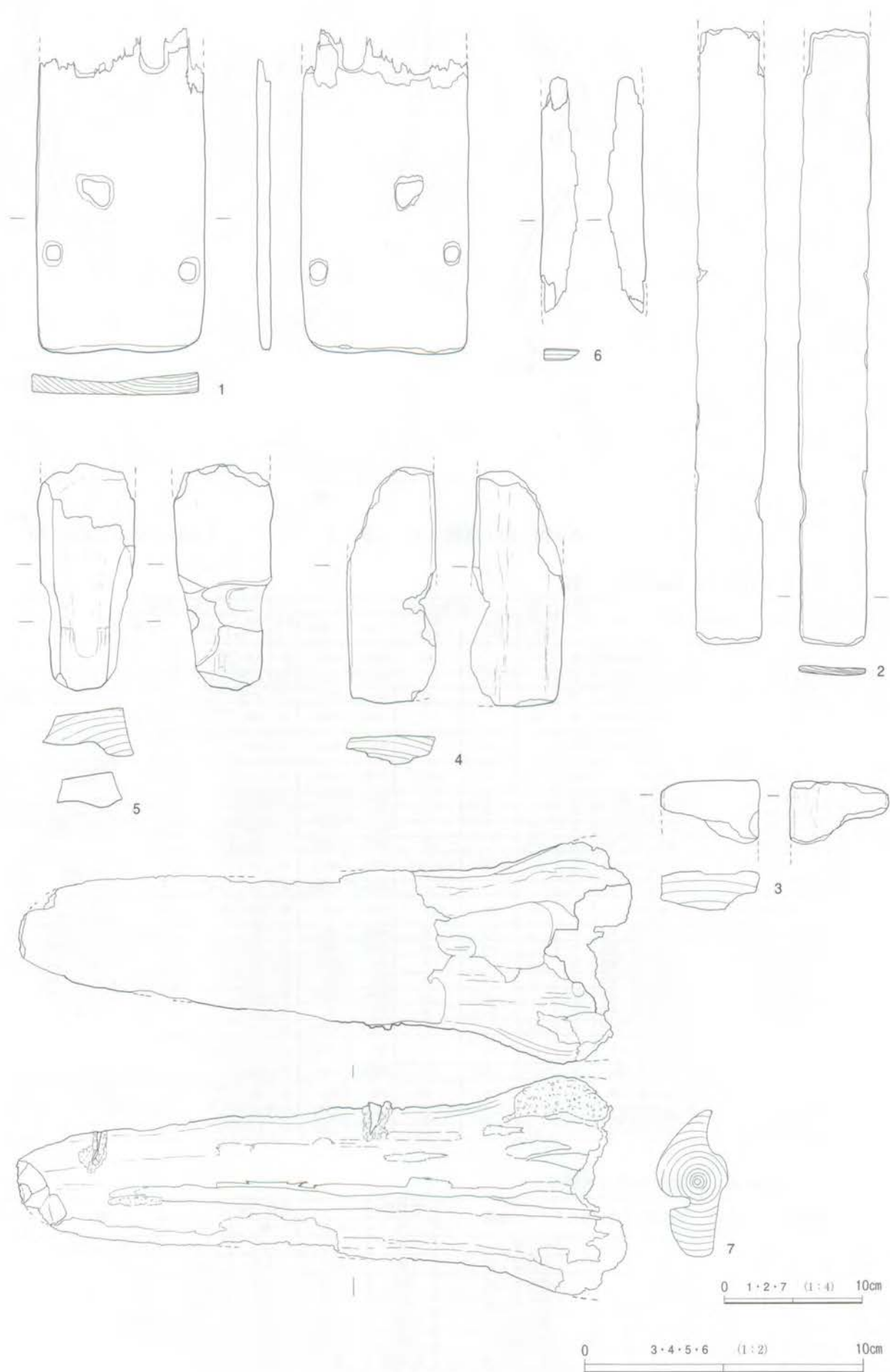
第6図 出土遺物(2)土器(2)

第2表 上七反目遺跡 遺物観察表(土器)

挿図番号	掲載番号	実測番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度 %	単位:cm.()は復元値,現存値			色調		胎土	焼成	整形・調整		備考
								口径・長さ	底径・幅	器高・残存高	外面	内面			外面	内面	
5	1	24	遺物集中地点	1	土師器	手捏ね土器	20	4.6		4.1	黄橙色	黄橙色	密	普通	ハラケズリ・ナデ	ナデ	
5	2	23	遺物集中地点	1	土師器	高台付坏	80		4.9	1.1	黄橙色	黄橙色	密	良好	ナデ	ナデ	ロクロ成形
5	3	19	遺物集中地点	18	土師器	坏, 底部	20		5.6	1.8	褐色	褐色	密	良好	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り, ロクロ成形
5	4	22	遺物集中地点	1	土師器	坏, 口縁部	25	14.9		4	赤褐色	赤褐色	密	良好	ハラケズリ・ナデ	ケズリ	ミガキ
5	5	12	遺物集中地点	1	土師器	埴, 胴部	70		3.5	7.3	橙色	橙色	密	良好	ハラケズリ・ナデ	ハラナデ・ケズリ	ミガキ
5	6	14	遺物集中地点	1	土師器	埴	90	8.2	3.5	6.6+3.5	黄橙色	黄橙色	密	良好	ナデ	ミガキ	体部・底部は接合しない, 外面摩滅
5	7	13	遺物集中地点	1	土師器	埴, 胴部	50		2.6	6.2	黄橙色	褐色	密	良好	ナデ	ナデ	摩滅
5	8	21	遺物集中地点	2	土師器	埴, 底部	80		3.6	2.3	黄橙色	褐色	粗	不良			器面剥落している
5	9	4	遺物集中地点	1	土師器	高坏, 坏部	20	15.7		5	褐色	褐色	密	普通	赤彩	赤彩	内外面共に摩滅
5	10	11	遺物集中地点	1	土師器	高坏, 坏部	15	17.9		3.9	黄褐色	黄褐色	密	良好	ナデ	ナデ	マメツ
5	11	8	遺物集中地点	1	土師器	高坏, 坏部	25	16	3.6(坏部)	6+8.3(脚部)	赤褐色	褐灰色	粗	良好	ナデ	ナデ	体部・底部は接合しない, 全体に摩滅
5	12	9	遺物集中地点	21	土師器	高坏, 脚部	25			6	灰黄褐色	灰黄褐色	粗	良好	ミガキ	ナデ	
5	13	6	遺物集中地点	1, 14, 22	土師器	高坏	20	17.6	12.4	14	褐色	褐色	密	良好	赤彩	ナデ	外面に赤彩あり, 体部・底部は接合しない
5	14	5	遺物集中地点	1, 16	土師器	高杯, 脚部	30		14.4	8.3	黄褐色	黄褐色	密	良好	ナデ	指頭痕あり	内外面共に摩滅
5	15	7	遺物集中地点	1, 15	土師器	高杯, 脚部	30		11.8	9.6	黄褐色	黄褐色	密	良好	赤彩	ナデ	内外面共に摩滅
5	16	1	遺物集中地点	1	土師器	高杯, 脚部	70		14.7	8.9	褐色	褐色	密	良好	ナデ	ナデ	内外面共に摩滅
5	17	2	遺物集中地点	1	土師器	高杯, 脚部	60		12.9	8.6	褐色	褐色	密	良好	ナデ	ナデ	内外面共に摩滅
5	18	3	遺物集中地点	1, 23, 24	土師器	高杯, 脚部	40		12.3	9.2	黄褐色	黄褐色	密	良好	ナデ	ナデ	内外面共に摩滅
5	19	10	遺物集中地点	1	土師器	高杯, 脚部	30		16	4.7	褐色	褐色	密	良好	ナデ	ハラナデ	外面摩滅
6	20	15	遺物集中地点	1	土師器	壺, 口縁部	15	17.8		7.2	黄褐色	黄褐色	粗	不良			
6	21	17	遺物集中地点	1, 28	土師器	壺, 胴部	20		20	9	褐色	灰褐色	密	良好	ミガキ	ハラナデ・ケズリ	
6	22	16	遺物集中地点	1, 4, 6, 7	土師器	壺, 胴部	20		8.4	17.2	赤褐色	赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ	
6	23	18	遺物集中地点	1, 5	土師器	壺, 底部	50		8	2.5	黒色	褐色	密	良好	ハラケズリ・ハラナデ	ハラナデ・ハラケズリ	底部外面(手持ちハラケズリ)
6	24	20	遺物集中地点	1	土師器	壺, 底部	25		9.1	2.2	黄褐色	黄褐色	密	良好	ナデ	ナデ	
6	25	25	遺物集中地点	1	土師器	小型壺, 口縁部	9	8.3		4.1	黄褐色	黄褐色	密	良好	ナデ	ナデ	

第3表 上七反目遺跡 遺物観察表(木製品)

挿図番号	掲載番号	実測番号	遺構番号	遺物番号	器種	遺存度 %	単位:cm			備考
							長さ	幅	厚さ	
7	1	1	4T	1	田下駄	50	22.6	12.2	1.0	田下駄, 3孔ある
7	2	2	4T	2	板状加工品	90	42.9	5.01	0.5	
7	3	6	4T	6	板状加工品	破片	2.2	3.6	1.3	
7	4	5	4T	5	板状加工品	破片	8.2	3.3	0.9	
7	5	3	4T	3	加工品	破片	7.8	3.5	1.3	挟りあり
7	6	4	4T	4	板状加工品	破片	8.3	1.4	0.5	
7	7	7	4T	7	杭・柱状加工品	先端部	44.7	15.5	5.1	



第7図 出土遺物(3) 木製品

第3章 神房館跡

第1節 概要

神房館跡は山武郡大網白里町大字神房字打越521-2を代表地番として所在している。赤目川の上流に位置する。赤目川はJR外房線を渡り、下総台地にぶつかる手前で北方向への流れと南方向への流れの2方向にわかれている。北側の流れは神房館跡の所在する台地を北側から回り込む形で西方向へのびる。一方南側の流れも、同じく神房館跡の所在する台地を南から回り込むように西流する。このような位置にある神房館跡は、九十九里浜の沖積低地からのびる支谷に面する標高42mの丘陵および斜面に立地している。神房館跡が所在する周辺は、「和名類聚抄」の「草野郷」に属している。遺跡の所在する台地の東側には大国神社が所在しており、また、東北側には妙照寺が所在している。

「神房館」に関しては次の2つの文献に記述がある。全文を引用する。

①「大網白里町史」の「神房殿谷館跡」¹⁾では

「神房小字殿谷に所在する。北に開口する馬蹄形を呈する丘陵の谷奥に位置する。東側丘陵上（大国神社社地）の一带は平地が認められ、あるいは館（城）址の一部とすべきかもしれない。」

②「山武の城」²⁾の説明では

「町内には字殿谷の地が5か所所在する。①養安寺殿谷、②大竹殿谷、③駒込殿谷、④平沢殿谷、⑤神房殿谷である。何れも裾が馬蹄型に開いた小さな谷奥に占地するいわゆる谷戸式館跡とよばれるタイプである。このなかでは、②がもっとも山間部に立地している。これらの性格であるが、背後の丘陵を曲輪取りしているわけでもないので（⑤は多少の平場があるが）、せいぜい15世紀代までの館跡の可能性が高いものの、なおその見極めには慎重さが求められよう。」

とされ、中世の館跡の可能性が指摘されている。

今回の発掘調査では、「神房館」に伴う遺構の検出を目的に、集落遺跡などの調査も視野に入れて、小平場にもトレンチを設定して調査を実施した。調査対象地内におけるこのような平場と観察されるか所はA～G地点まで7ヶ所確認された。それぞれの地点に確認トレンチを設定し遺構の有無、遺物の出土の有無を確認した。トレンチの位置などは平場の形状や地形に合わせて任意に設定した。

A地点

もっとも北側で、東側の水田に面する地点である。確認トレンチを3本設定し、調査を実施したが、遺構は検出されなかった。遺物は少量の土師器片が出土した。

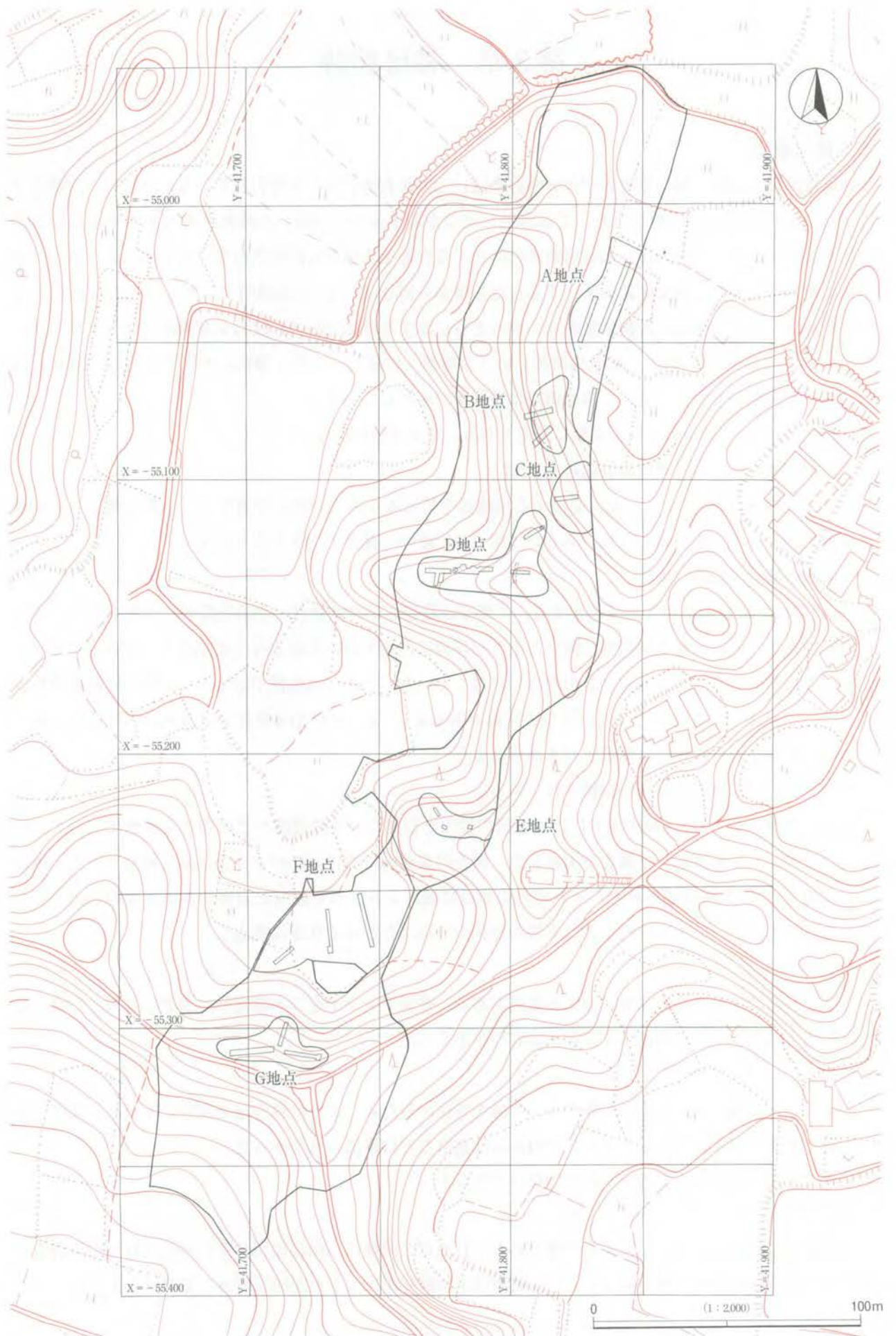
B地点

A地点から海拔はやや上位に位置する。平場を確保するため、または耕作地を確保するために山側に沿って根切り溝が掘られている。トレンチ内からは遺構などは検出されなかった。

遺物は少量の陶磁器片が出土したが図化はできなかった。

C地点

B地点とほぼ同じ標高に位置する平場である。B地点と同様に山側に根切り溝が検出されたが、調査対象に該当する様な遺構の検出はなかった。遺物は土師器片が出土したが図化できる遺物はなかった。



第8図 地形図及び調査地点

第4表 神房館跡 出土遺物観察表

挿図 番号	掲載 番号	実測 番号	遺構番号	遺物 番号	種別	器種	遺存度 %	単位：cm			色調		胎土	焼成	整形・調整		備 考
								口径・ 長さ	底径・ 幅	器高・ 残存高	外面	内面			外面	内面	
12	1	2	D地点IT	1	土師器	甕、口縁部	25	12.5		4.6	にぶい 赤褐色	にぶい 赤褐色	粗	普通	ナデ	ナデ	
12	2	1	D地点IT	3	土師器	甕、底部	40		8.1	8.1	にぶい 赤褐色	にぶい 赤褐色	粗	普通	ヘラケズ リ・ナデ	ヘラナデ	底外（手持ちヘラケズリ・全 面）
12	3	3	F地点IT	1	石製品	砥石	破片	4.8		4.2	黒褐色	黒褐色					裏面は凹凸あり

D地点

調査範囲のほぼ中間地点で、尾根の頂部を含む平場である。4本のトレンチを設定し調査を実施したが、根切り溝を検出したのみで館跡の遺構や遺物は検出されなかった。D地点からは2点の遺物が図化できた。

E地点

大国神社の西側、神社の立地する小谷の奥部に立地する。3か所のトレンチを設定し、調査を実施したが、遺構は検出されなかった。遺物の出土はなかった。

F地点

尾根の西側で、水田に面する地点である。畑地化するために削平したと推定される溝と削平痕が観察されたが、館跡にともなう遺構は検出されなかった。遺物は砥石が1点のみ出土し図化できた。

G地点

もっとも南側に位置する。尾根の基部にあたる。3本のトレンチを設定し調査を実施したが、遺構は検出されなかった。遺物は出土しなかった。

以上7か所の平場と思われる地点に確認トレンチを設定して調査を実施したが、「神房館跡」「館」に関する遺構は検出されなかった。各地点から検出された溝も、畑地化するための削平作業に伴う根切り溝と推定され、当該期の遺物も出土しなかった。

第2節 調査の成果と遺物（第9～12図、第4表、図版5～7・24）

遺構 各平場に設定したトレンチからは明確に「館」「居館跡」とおもわれる遺構は検出されなかった。トレンチから検出された遺構としては、多くの溝状遺構が検出された。しかし、これらの溝状遺構は出土した遺物などから開墾・畑地化のための溝と推定され、神房館跡に関する遺構は検出されなかった。

遺物 出土した遺物の総数量は少なかった。土師器、砥石の3点が図示できた。1・2はD地点ITから出土した甕で、口縁部と底部の破片であるが接合はしない。3は砥石である。両端を欠損する。使用面は使い込んでおり、使用に伴い破損し廃棄されたものと推定される。

注1 小高春男「大網白里町史」P234 大網白里町 1986

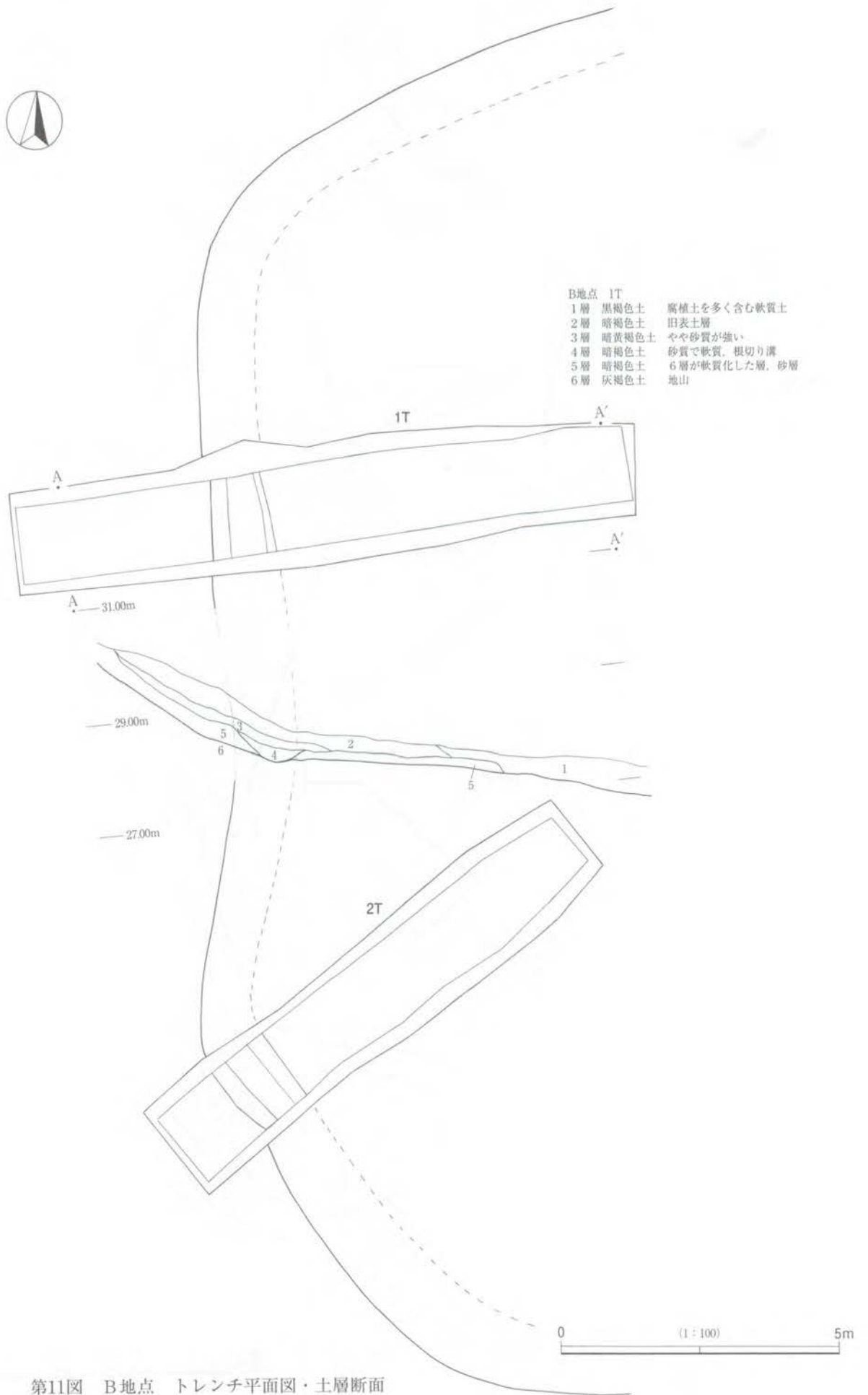
2 小高春男「山武の城」P44「字殿谷」私家版 2006



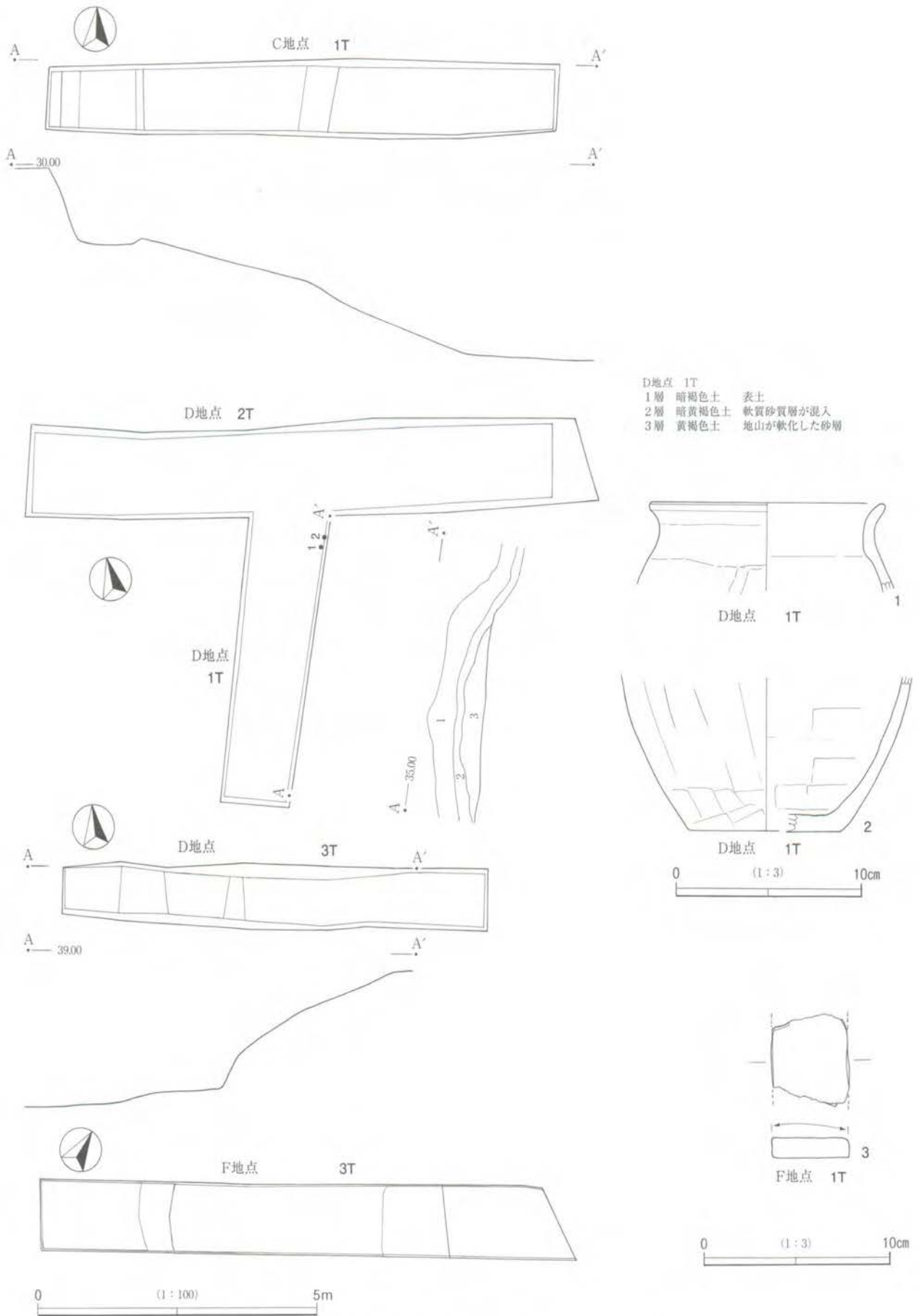
第9図 A~D地点 トレンチ配置図



第10図 E～G地点 トレンチ配置図



第11図 B地点 トレンチ平面図・土層断面



第12図 C・D・F地点 トレンチ配置図・土層断面図・出土遺物

第4章 小高前遺跡

第1節 概要

小高前遺跡は茂原市桂字小高前542-1ほかに所在している。赤目川の北岸に位置し、標高15mから20mの微高地に立地している。調査区の西側は、地山が岩盤である山地がせまり、立川ローム層は堆積していない。南側には表土下を1m位掘削すると湧水した。

1E・1F区に設定した3T（3トレンチ）で一覧に掲げたピット群が検出されたため、周囲を拡張して、遺構及び遺物の検出調査を実施した。その結果、地山である黒色土層から遺物が少量出土した。

下層の調査は立川ローム層が存在しないために調査対象外であった。

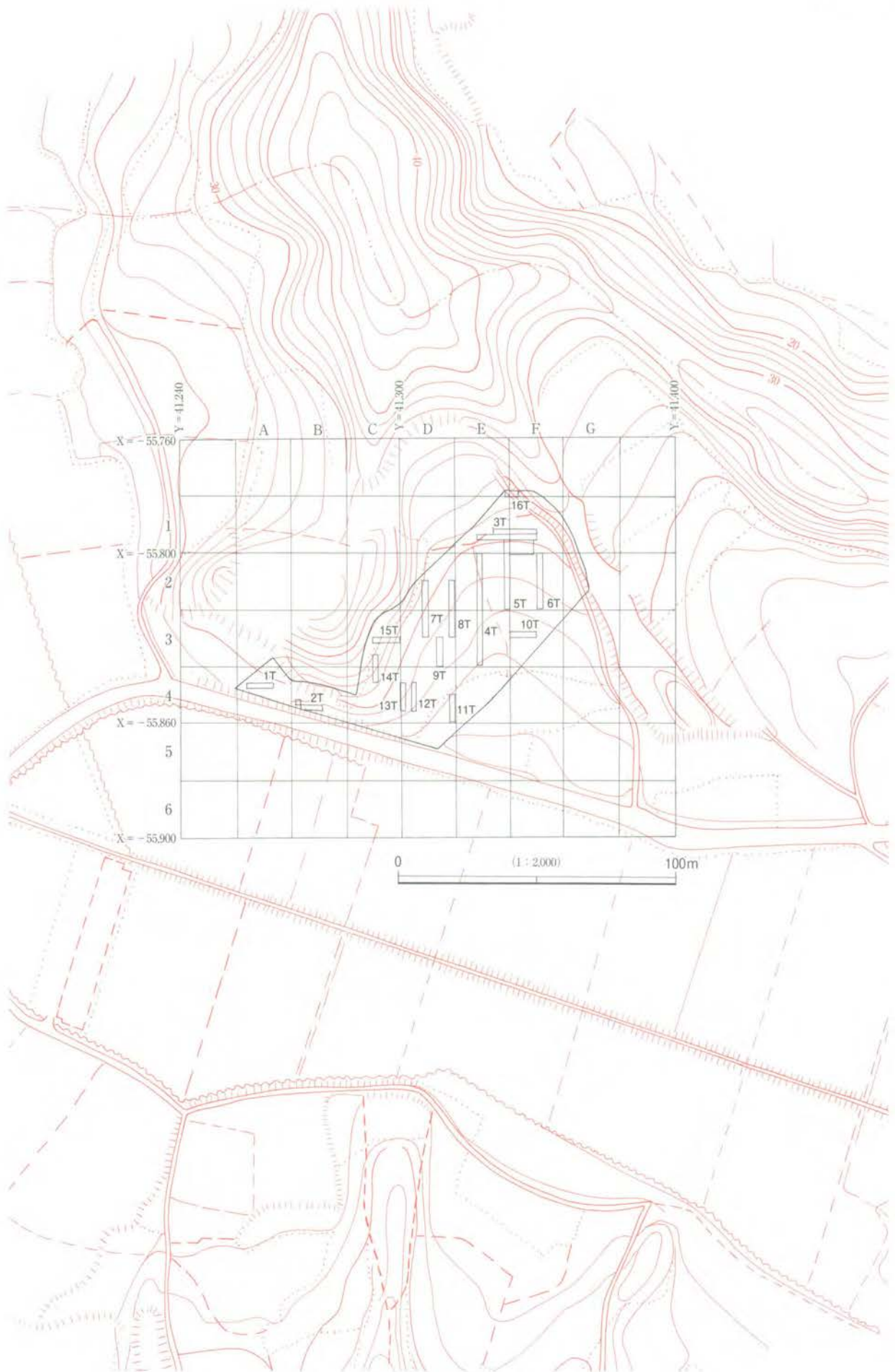
第2節 検出した遺構と遺物（第15・16図、第5・6表、図版8～11・24）

遺構 遺構としては、奈良・平安時代と推定されるピット群が検出された。ピットの底部に柱受けと思われる変色部分があったが、掘立柱建物跡としての配列ができなかった。

遺物 奈良・平安時代の土師器、須恵器と土製支脚が出土した。それらの内18点が図示できた。1～6は坏で、5・6は須恵器である。7・8は高台付坏で、9は高台付壺である。完形品はない。8の底部外面には線刻があり、内面は黒色処理されている。10は須恵器で外面に墨書が見られる。文字と思われるが読みは不明である。11～15は甕である。16・17は須恵器の転用砥石と思われる。16は底部のみで、底部周囲をきれいに打ち欠き、周囲も砥石として使用しているように思われる。17は胴部の破片で破片周囲を砥石として使用したものと思われるが丁寧に磨かれている。18は土製の支脚である。

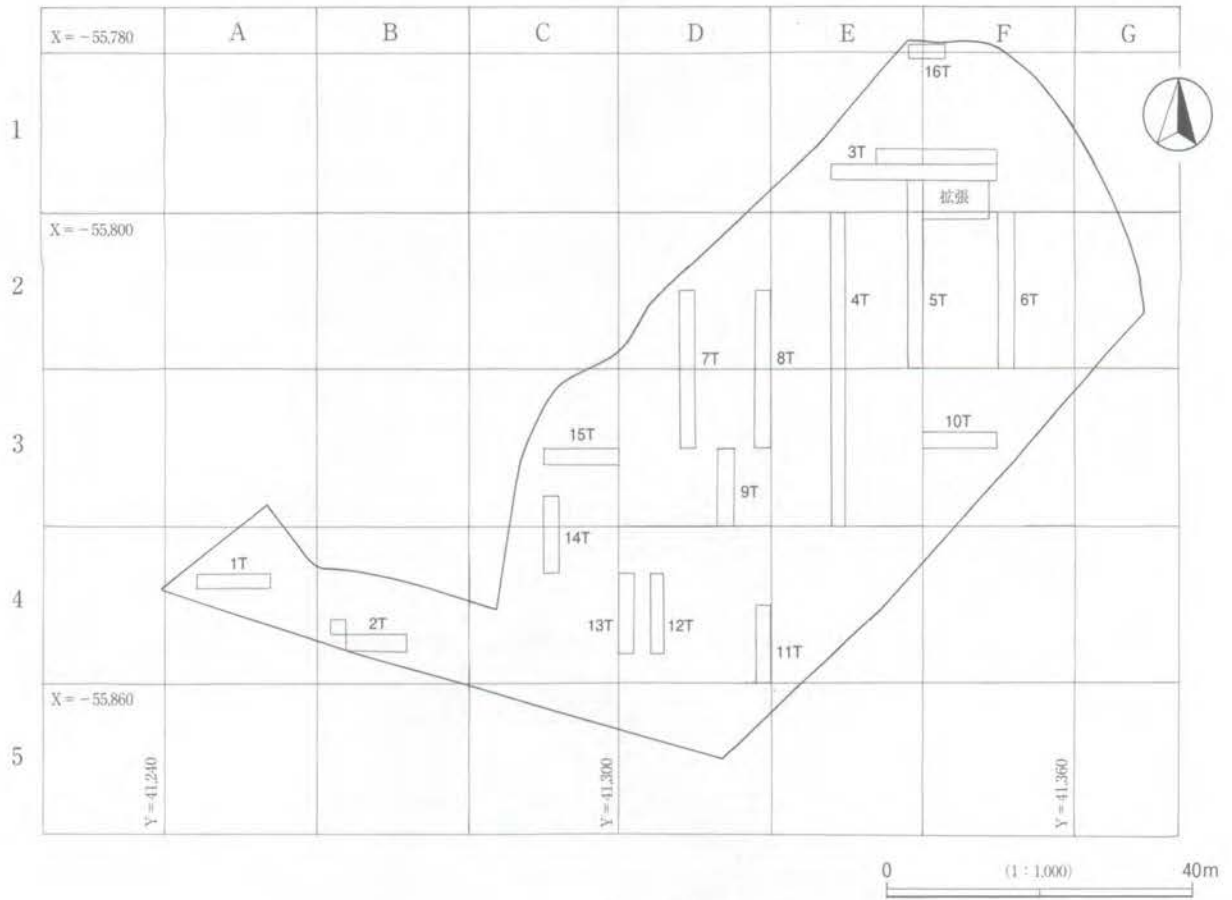
第5表 小高前遺跡 検出遺構一覧

	遺構No	規模 単位m					遺構No	規模 単位m					
		長軸	×	短軸	×			深さ	長軸	×	短軸	×	深さ
1	SZ-001	2.15	×	1.35	×	0.15	11	SH-010	0.45	×	0.35	×	0.35
2	SH-001	0.45	×	0.45	×	0.38	12	SH-011	0.89	×	0.55	×	0.22
3	SH-002	0.50	×	0.40	×	0.42	13	SH-012	0.50	×	0.43	×	0.30
4	SH-003	0.37	×	0.34	×	0.19	14	SH-013	0.51	×	0.40	×	0.27
5	SH-004	0.42	×	0.37	×	0.33	15	SH-014	0.45	×	0.40	×	0.28
6	SH-005	0.64	×	0.45	×	0.44	16	SH-015	0.55	×	0.43	×	0.12
7	SH-006	0.50	×	0.50	×	0.47	17	SH-016	0.54	×	0.45	×	0.22
8	SH-007	0.42	×	0.48	×	0.48	18	SH-017	0.55	×	0.55	×	0.37
9	SH-008	0.45	×	0.45	×	0.61	19	SH-018	0.45	×	0.36	×	0.44
10	SH-009	0.30	×	0.27	×	0.18							



第13図 トレンチ配置図・グリッド名称

第2節 検出した遺構と遺物



第14図 トレンチ配置図

SZ-001

- 1層 灰褐色土 黒色土に灰色土を含む
- 2層 黄橙色土 黄褐色土に灰色土を含む

SH-001・SH-002

- 1層 黄褐色土 黄色土に黒色土を含む
- 2層 黒色土 粘質土

SH-003

- 1層 黒褐色土 黒色土に白色土を含む
- 2層 黒褐色土 黒色土に黄色土を少量含む
- 3層 褐色土 黄色土に白色土を含む
- 4層 褐色土 黄色土に白色土・黒色土を含む

SH-004

- 1層 黒褐色土 黒色土に黄色土を少量含む
- 2層 褐色土 黄色土に黒色土を含む
- 3層 明褐色土 黒色土に黄色土を含む

SH-005

- 1層 褐色土 黄色土に黒色土を含む
- 2層 褐色土 黒色土に黄色土を含む
- 3層 褐色土 黒色土に黄褐色土を含む

SH-006

- 1層 黒色土 黒色土に黄色土を含む
- 2層 橙色土 黄色土に黒色土を含む
- 3層 橙色土 黄色土に黒色土を少量含む

SH-007

- 1層 黒色土
- 2層 黒褐色土 黒色土に白色土を含む
- 3層 橙色土 黄色土に黒褐色土を少量含む
- 4層 橙色土 黒色土に黄色土を含む
- 5層 黒褐色土 黒色土に灰褐色土を含む

SH-008

- 1層 褐色土 黒色土に黄色土を含む
- 2層 橙色土 黄色土に黒色土を少量含む

SH-009

- 1層 黒色土

SH-010

- 1層 黒色土
- 2層 黒褐色土 黒色土に黄色土を少量含む
- 3層 黒褐色土 黒色土に黄褐色土を少量含む

SH-011

- 1層 黒褐色土 黒色土に黄色土を含む
- 2層 黒褐色土 黒色土に黄褐色土を含む

SH-012

- 1層 褐灰色土 灰色土
- 2層 褐色土 黄色土に灰色土を含む

SH-013

- 1層 黒褐色土 黒色土に灰色土を含む
- 2層 黄褐色土 黄色土に黒色土を含む
- 3層 黄褐色土 黄色土に少量の黒色土を含む
- 4層 黒色土
- 5層 黒色土
- 6層 黒褐色土 黄色土に灰褐色土を含む

SH-016

- 1層 灰褐色土 黒色土に灰白色土を含む
- 2層 灰褐色土 黒色土に灰色土を含む

SH-017

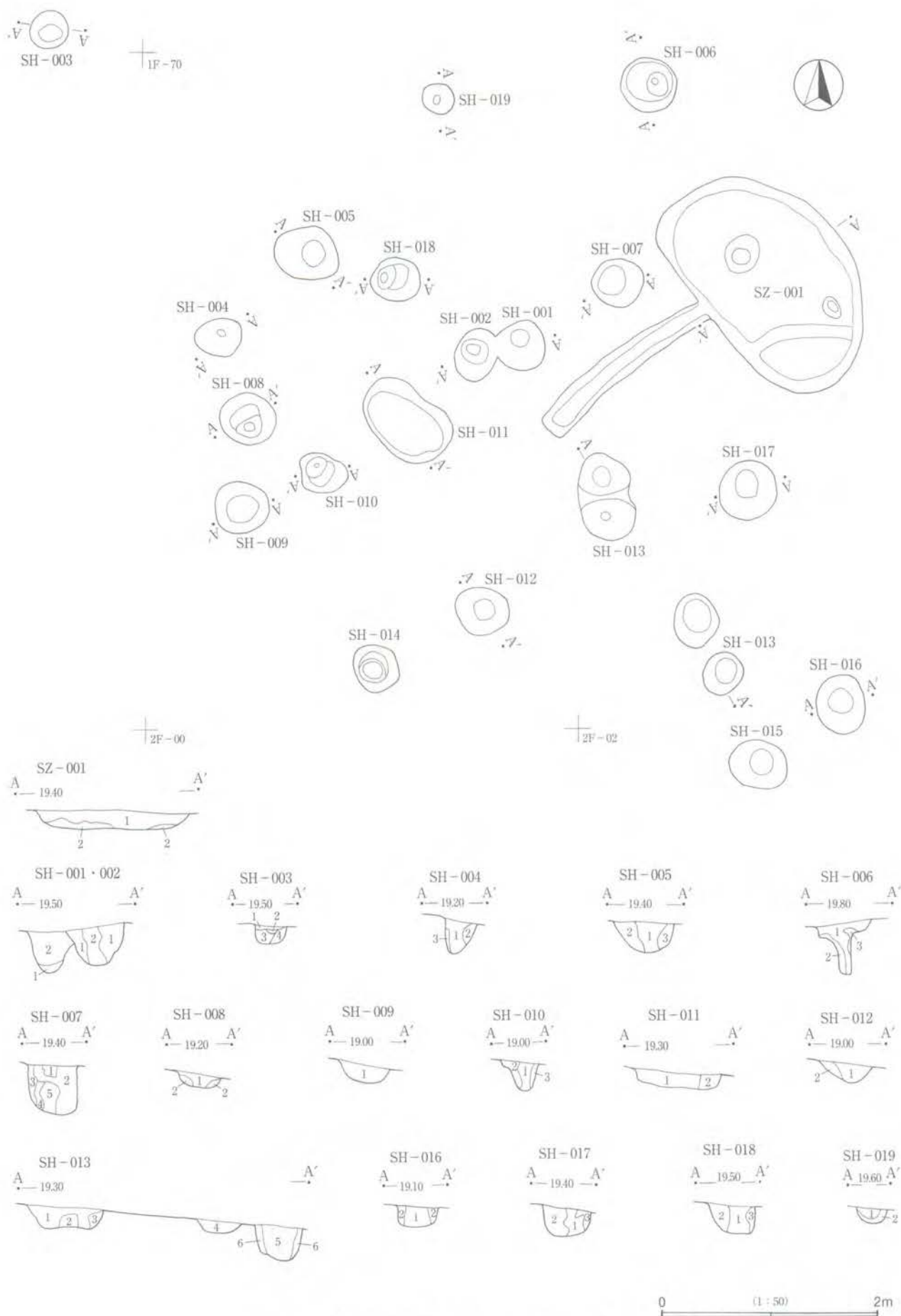
- 1層 灰褐色土 褐色土に白色土を含む
- 2層 暗褐色土 黒色土に黄褐色土を含む
- 3層 褐灰色土 灰色土

SH-018

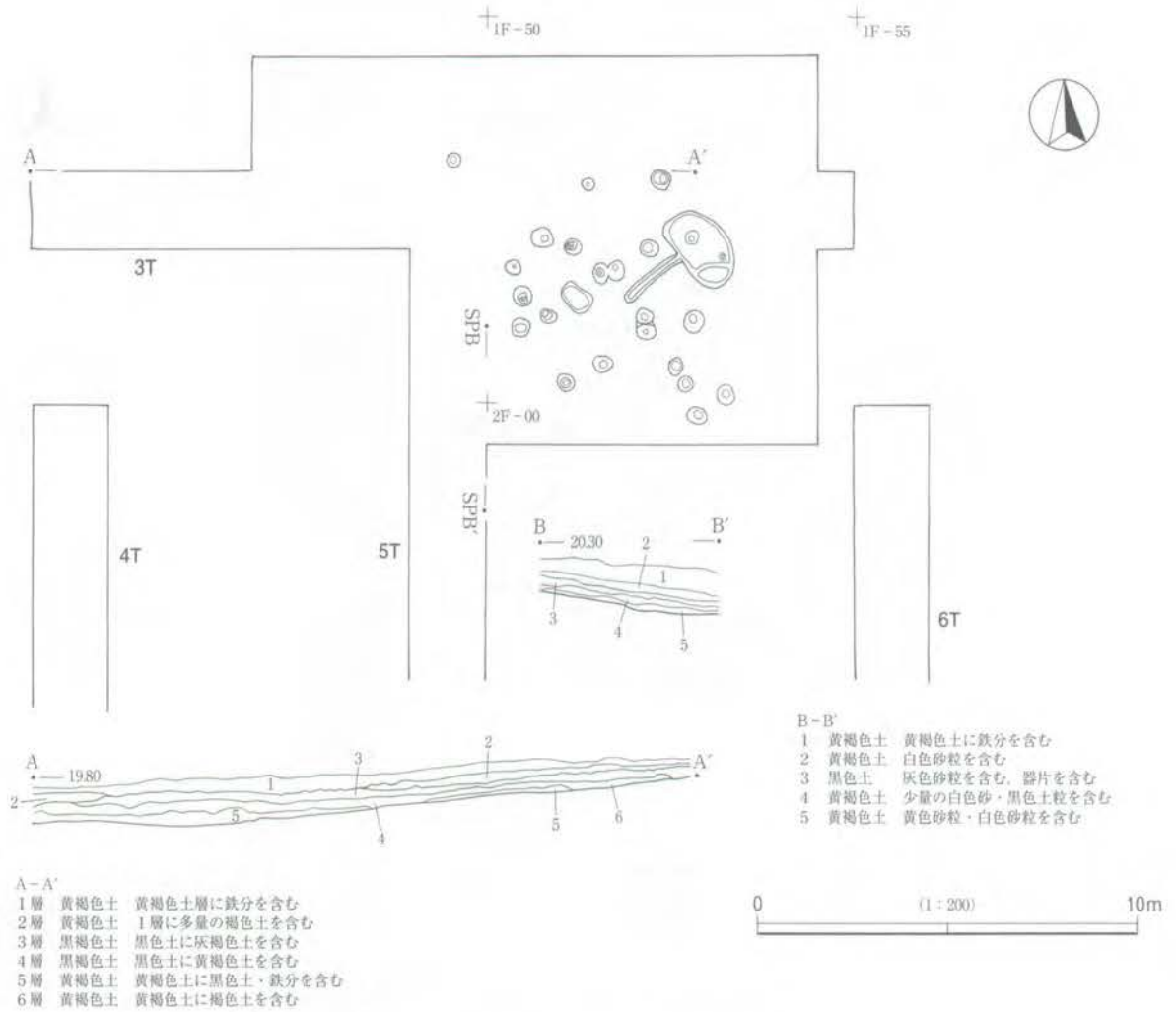
- 1層 黒褐色土 黒色土に灰色土を含む
- 2層 褐灰色土 灰色土に黄色土を少量含む
- 3層 黄褐色土 黄色土に黒色土を少量含む

SH-019

- 1層 黒色土 黒色土に少量の黄色土を含む
- 2層 黄褐色土 黄色土に灰色土を少量含む



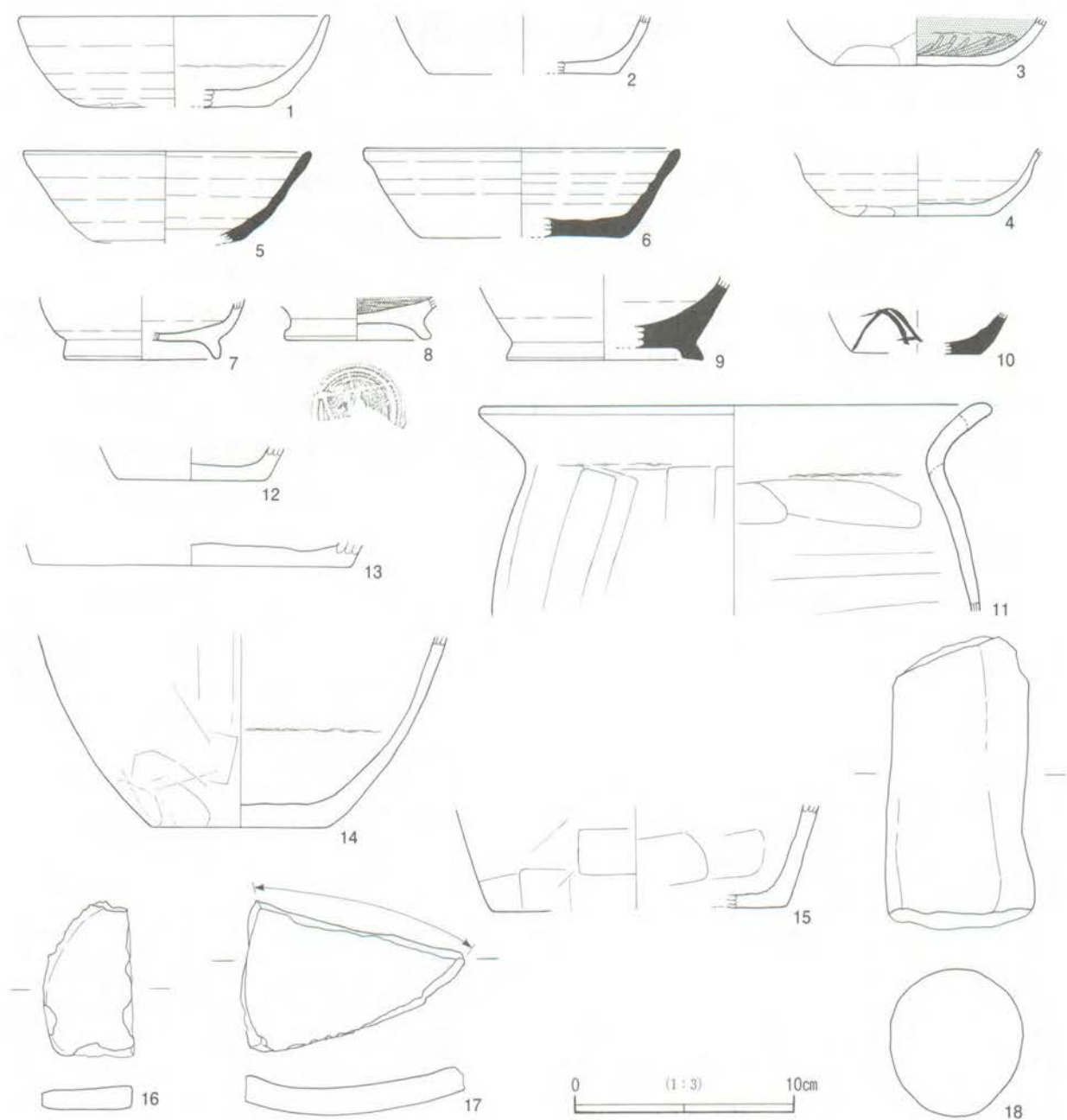
第15図 ピット群 平面図・土層断面図



第16図 拡張区 土層断面図・ピット群

第6表 小高前遺跡 出土遺物観察表

押図 番号	掲載 番号	実測 番号	遺構 番号	遺物 番号	種別	器種	遺存度 %	単位: cm			色調		胎土	焼成	整形・調整		備 考
								口径・ 長さ	底径・ 幅	器高・ 残存高	外面	内面			外面	内面	
17	1	7	3T	1	土師器	坏、底部欠	25	14.0	4.0	8.4	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ナデ	ナデ	ロクロ成形、輪積み痕が見られる
17	2	2	3T	1	土師器	坏、底部	20	8.6		2.6	明赤褐色	橙色	粗	良好	ナデ	ナデ	ロクロ成形
17	3	6	3T	1	土師器	坏、底部	30		7.6	2.2	黒色	にぶい褐色	密	良好	ミガキ	ミガキ	内面黒色処理
17	4	9	3T	1	土師器	坏、底部	30		6.5	2.9	明赤褐色	明赤褐色	密	良好	ナデ	ナデ	底部外周ヘラケズリ
17	5	5	3T	1	須恵器	坏、底部欠	20	13.1	7.0	3.9	灰色	灰色	密	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ロクロ成形
17	6	12	3T	1	須恵器	坏、底部欠	25	14.3	9.2	3.8	灰黄色	灰黄色	密	良好	ナデ	ナデ	ロクロ成形
17	7	10	3T	1	土師器	高台付杯	30		7.0	2.7	にぶい褐色	にぶい黄 橙色	密	良好	ナデ	ナデ	ロクロ成形
17	8	4	3T	1	土師器	高台付杯	50		6.6	1.9	黒色	にぶい黄 橙色	密	良好	ミガキ	ナデ	内面黒色処理、底部外面 焼成後の線刻「井」?
17	9	11	3T	1	須恵器	高台付壺	20		9.0	3.7	灰黄褐色	灰黄褐色	密	良好	ナデ	ナデ	
17	10	16	3T	1	須恵器	坏、底部	破片		5.8	1.8	黄灰色	灰黄色	密	良好	ナデ	ナデ	外面墨書文字不明
17	11	8	3T	1	土師器	甕、口縁部	25	23.0		9.0	暗褐色	黒褐色	密	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ	
17	12	18	4T	2	土製品	甕、底部	底部片		6.8	1.3	灰褐色	灰褐色	粗	良好	ナデ	ナデ	
17	13	17	3T	2	土師器	甕、底部	85		14.5	0.9	褐色	にぶい褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ	
17	14	1	3T	1	土師器	甕、底部	50	8.0		8.3	明赤褐色	にぶい赤 褐色	粗	不良	ヘラケズリ	ヘラナデ	
17	15	3	3T	1	土師器	甕、底部	10		13.4	4.5	褐色	黒褐色	粗	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ	
17	16	14	3T	1	須恵器	甕(転用砥石)	50				黒灰色	黒灰色	粗	良好			坏底部片の周囲を研磨
17	17	13	3T	1	須恵器	甕(転用砥石)	破片				黒灰色	黒灰色	粗	良好			内面、周囲を研磨
17	18	15	3T	1	土製品	支脚	体部片	12.7	6.7	6.3	暗黄褐色	暗黄褐色	密	良好			周囲は摩滅、先端部欠損



第17図 出土遺物

第5章 柿谷遺跡

柿谷遺跡は長生郡長柄町榎本に所在する。茂原市市街地の西側に位置する。柿谷遺跡の所在する小支谷は、一宮川の一支流に所在する。一宮川は、長生郡長南町深沢地区をその源とし、柿谷遺跡の位置する小支谷と岩川付近で合流し、さらに、上茂原の集落付近で南西方向から流下してきた三途川と合流する。その後、茂原市の市街地南側で北方面より流下する豊田川と合流し、長生村南中之瀬で太平洋に流入する。

柿谷遺跡は、この岩川の地から北方向へ入る小支谷を東に望む台地の暖斜面に位置する。調査区は南北約250mと長い。調査区は中央部に小尾根が張り出しており、この尾根を境として北側を柿谷遺跡（1）、南側を柿谷遺跡（2）とした。（1）（2）ともに隣接しており、同一遺跡であるが、遺構番号は（1）（2）の各地点ごとに付した。また遺物は両者ともにほぼ同時期であったため遺物番号は両者を分けずに通し番号を付し、まとめて報告する。

第7表 柿谷遺跡（1） 検出遺構一覧

遺構名	遺構種	位置	平面形	カマドの有無・位置	主軸方向	規模 (m)			主柱穴	補助柱穴	壁周溝	備考
						長軸	短軸	深さ				
SI-001	竪穴住居跡	2C-59	方形	有り	東	3.00+	× 3.00+	× 0.25	—	—	一部	
SI-002	竪穴住居跡	2C-39	方形	有り	北	3.00+	× 3.00+	× 0.12	1	—	一部	
SI-003	竪穴住居跡	2C-46	方形	?	—	2.80	× 2.60	× 0.16	—	—	なし	
SI-004	竪穴住居跡	3C-24	方形	有り?	東?	3.00+	× 2.00+	× 0.20	1?	—	なし	
SI-005	竪穴住居跡	3C-15	方形	?	—	3.20	× 2.50+	× 0.10	—	—	なし	
SI-006	竪穴住居跡	3C-14	方形	?	—	3.00+	× 2.50+	× 0.18	—	—	あり	
SI-007	竪穴住居跡	2C-47	方形	有り	北	4.00	× 3.00+	× 0.50	1	4	あり	SK-009
SI-008	竪穴住居跡	3D-12	?	有り?	?	1.00+	× 1.00+	× —	—	—	なし	SK-010
SB-001	掘立柱建物跡	2C-45	1間×1間				×	×				
SK-001	土坑	2D-60					3.00+	× 1.20+	× 0.36			
SK-002	土坑	2C-54	円形				0.80	× 0.80	× 0.22			
SK-003	土坑	3C-13	円形				0.70	× 0.70	× 0.30			
SK-004	土坑	3C-16	正方形				0.80	× 0.80	× 0.22			
SK-005	土坑	3C-05	方形?				0.90	× 0.70+	× 0.20			
SK-006	欠番						1.00	× 1.00	×			SB-001 P1
SK-007	土坑	3C-04	方形				0.90	× 0.70	× 0.12			
SK-008	土坑	3C-05	楕円形				1.35	× 0.85	× 0.16			
SK-009	欠番							×	×			SI-007
SK-010	欠番							×	×			SI-008
SK-011	欠番							×	×			SB-001 P4
SK-012	土坑	2C-26	円形				0.83	× 0.80	× 0.35			
SK-013	欠番							×	×			SB-001 P3
SK-014	欠番							×	×			SB-001 P2
SK-015	土坑		不明					×	×			断面図のみ

第8表 柿谷遺跡（2） 検出遺構一覧

遺構名	遺構種	位置	規模 (m)			備考
			長軸	短軸	深さ	
SK-001	土坑	8H-47	2.50	× 1.25	× 0.36	
SK-002	土坑	8H-57	1.63	× 0.50	× 0.17	
SK-003	土坑（1）	8H-47	0.60	× 0.50	× 0.33	2基の土坑が連結
SK-003	土坑（2）	8H-47	0.40	× 0.40	× 0.44	
SK-004	土坑	8H-36	2.08	× 1.00	× 0.10	
SK-005	土坑	8G-35	2.58	× 0.70	× 0.60	
SK-006	土坑	8G-35	1.61	× 0.70	× 0.50	
SK-007	土坑	8G-25	1.50	× 1.10	× 0.70	
SK-008	土坑	8G-35	0.85	× 0.50	× 0.48	
SK-009	土坑	8F-48				近・現代
SK-010	土坑	8F-37				近・現代
SK-011	土坑	7G-30	1.23	× 1.15	× 0.24	遺物多量



第18図 調査区・トレンチ配置図・グリッド名称

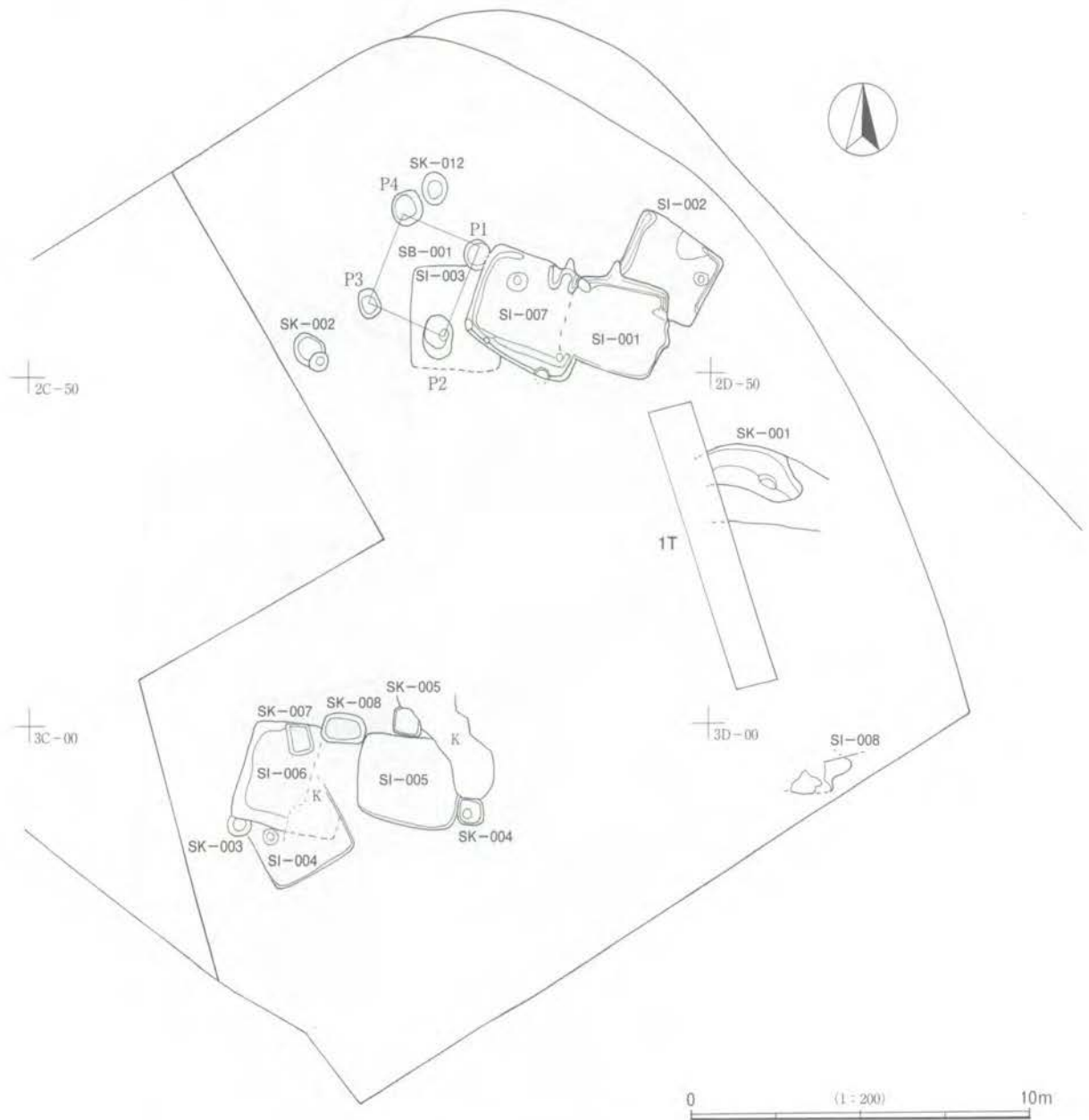
1 柿谷遺跡 (1) (第18・19~25・29・32・34・35図, 第7・9・11表, 図版12~21・25~27)

第1節 概要

上層の調査は、本調査まで実施し、下層は立川ローム層が残存しないために調査対象外となった。

調査対象地は標高25mの台地側縁部から、標高16mの沖積地に至る暖斜面に位置しており、耕作地化するために暖傾斜は柵状の畑地に改変されている。その結果、各調査地点となった畑地の各々は大変狭い。

調査区の北端部分には小さな谷津の谷頭部が埋没しており、現状では南向きの暖斜面を呈するその埋没土中に、奈良・平安時代の竪穴住居・掘立柱建物跡、土坑が集中して検出された。その北側にも小尾根があり、小尾根の南側斜面は緩斜面を呈しており、上層の確認トレンチはこの斜面に直交する形で設定し、その場所から竪穴住居等が検出された。表土の下は岩盤が露呈し、立川ローム層の堆積は認められなかった。そのため、下層の調査は対象外とされた。



第19図 柿谷遺跡 (1) 遺構配置図

第2節 検出した遺構と遺物

(第19～25・29～32・34・35図, 第7・9・11表, 図版14・15～21・25～27)

奈良・平安時代の竪穴住居8軒と掘立柱建物跡1棟, 土坑9基を調査した。

SI-001 (第19・20・29図, 第7・9表, 図版14・15・25)

2C-49から検出された。北側でSI-002と重複し, 西側でSI-007と重複する。一辺が約3m, 深さ約0.25mほどの方形の竪穴住居である。竪穴住居の掘り込みは極めて浅い。北側壁際(斜面上位)に壁溝が見られる。柱穴は検出されなかった。カマドは東辺のほぼ中央から検出された。北側に古いカマドの痕跡があり, 新しい竪穴住居の周溝によって壊されている。SI-002より新しい。竪穴住居の西側は当初はSK-009として調査を実施した。SI-007より新しいがSI-007覆土中に構築された床面の位置は不明である。竪穴住居の西壁は土層断面図からかろうじて確認されたほど浅い。

土器は1～7までの7点が図示できた。1は坏で, 約50%が残存する。2～6は土師器の甕である。7は須恵器の破片であるが外面にタタキ目が見られる。

SI-002 (第19・20図, 第7表, 図版15)

2C-49から検出された。SI-001の北側で重複しSI-001より古い。一辺約3m, 深さ0.12mほどの方形を呈する竪穴住居である。北側壁ほぼ中央にカマドを持つ。周溝は西壁と東壁, 及びカマドの東側からのみ検出された。柱穴は東壁際から1本検出された。床面は堅緻でほぼ平坦である。

カマドは北側壁のほぼ中央から検出された。カマドの基礎部の構築材は黄褐色土を使っており, 山砂の使用は全く認められない。図示できる遺物はなかった。

SI-003 (第19・21・29図, 第7・9表, 図版16・25)

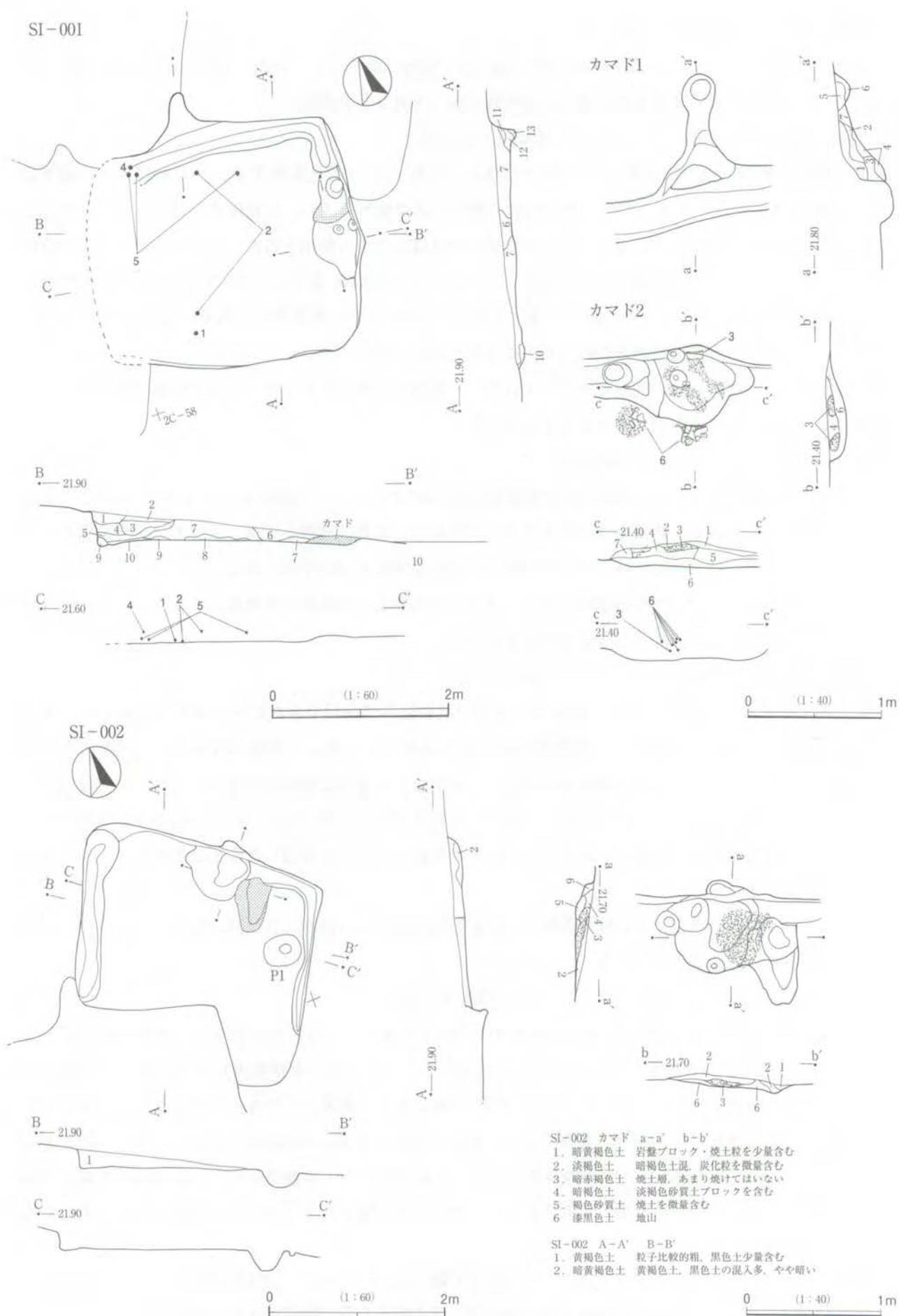
2C-46を中心として検出された。斜面部に方形の落ち込みが確認できたので, 調査を実施した。東西2.8m, 南北2.6m, 深さ約0.16mで, 北側壁の掘り込みは約20cmを測る。南側の斜面下位では壁の立ち上がりは確認できない。竪穴住居を構成する柱穴, カマドなどの施設は確認できなかったが, 竪穴住居として報告する。床面とした面も水平ではなく, 地山の土質や色調は一様でなく, いろいろな土が確認できた。土色の異なる場所は遺構の可能性があるのでそれぞれ半截して調査を実施したが形は不整形で, 柱穴又は土坑とは認定できなかった。

遺物は4点が図示できた。8は坏で底部には回転糸切り痕が見られる。9は高台付坏で, 10は甕, 11は須恵器甕で外面に波状文が見られる。

SI-004 (第19・21・30・35図, 第7・9・11表, 図版16・25)

3C-14を中心として検出された。SI-001～003, 007とは離れている。竪穴住居の平面形は約3m×約2m, 深さ0.2mほどの方形をしている。カマドは残存していないが, 東南壁際に焼土が散布する範囲があり, この場所がSI-004のカマドで, カマドがSI-006によって破壊されたものと推定される。竪穴住居自体は地山である黒色土中に掘り込まれており, 褐色土系の土を盛って床面としている。SK-003と重複しており, SK-003の方が古い。やや西南寄りにピット状の柱穴が1本検出された。炭化粒が床面から検出されており, 床面に敷いた敷物の可能性もある。竪穴住居の構造としては, 床下の掘方に褐色土を充填した様子が観察できた。

遺物はもっとも多く10点が図示できた。12は鉢形土器, 13は坏である。14は須恵器で, 壺の口縁部である。15～18は蓋で, 15は土師器である。19・20は甕, 21は甔形土器で底部は5孔と推定される。



第20図 SI-001・SI-002 平面図・土層断面図

SI-005 (第19・21・30図, 第7・9表, 図版17・25)

3C-06を中心として検出された。北側でSK-005と重複し、南東でSK-004と接している。北東は攪乱によって壊されている。SI-004と同規模の方形をしている。東西約3.2m, 南北長は残存している長さは2.5mである。深さは0.1mほどである。柱穴, 周溝は検出されなかった。床面下の掘方はSI-004と同様に褐色土を充填して突き固めている。

遺物は2点が図示できた。22は土師器の坏底部片で, 23は須恵器の高台付坏である。

SI-006 (第19・21・30図, 第7・9表, 図版17・25)

3C-14を中心として検出された。南側をSI-004と, 東側はSK-008, SI-005と重複している。カマドは検出されなかった。残存している長さは, 南北約3m, 東西2.5m, 深さは0.2~0.3mである。西壁と北壁からは周溝が検出された。柱穴は検出されなかった。竪穴住居の南半分はSI-004の床下から検出された。床面は多少凸凹するが比較的平坦である。調査時点ではSI-004よりも古い住居跡として調査をしたが, SI-004のカマドと思われる部分を破壊していることから, SI-004よりも新しいものと推定される。床面はあまり突き固めていない。褐色土系の土が床面となっている。

遺物は2点が図示できた。24・25は土師器の坏底部である。

SI-007 (第19・22・30・31図, 第7・9表, 図版18・25・26)

2C-47を中心として検出された。一辺が4m×3m, 深さ0.5mほどである。カマドは北壁中央からやや東に寄ったところに構築されている。煙出しが長く住居外に延びる。カマドの内側は一部レンガ状に良く焼けている。カマド構築材は黄褐色土を使用している。主柱穴は中央よりやや西と南東隅で各1本, 南西隅から小柱穴が1本検出された。南壁に外側から掘り込まれた柱穴が2本検出された。周溝は北壁で一部欠けるがほぼ全周し, 南側では壁よりもやや内側を巡る。遺構検出面からは平面プランが確認できず, SI-001の床面の観察から当初は溝状の土坑(SK-009)であると判断して調査を実施したが, 最終的にはSI-007として調査を行った。覆土中に焼土, 炭化物の層がある。

遺物は7点が図示できた。26~32は土師器である。26は坏で完形品である。27は鉢形土器で, 口縁部を一部欠損するが割れ口は鋭利でなく, 磨かれている。28・29は椀形土器, 30~31は甕, 32は甑形土器の底部である。

SI-001 A-A' B-B'

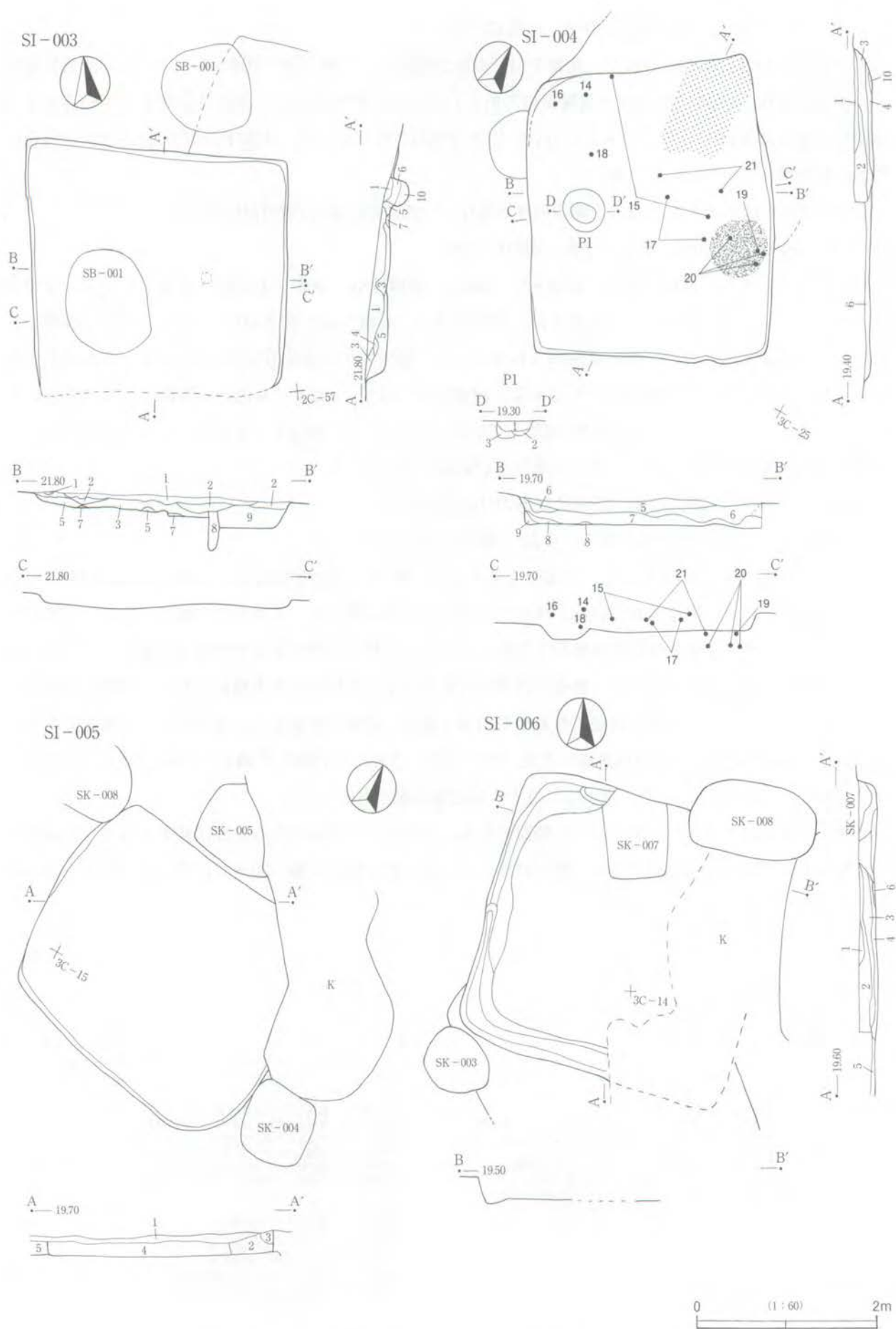
1. 黒褐色土 焼土・岩盤ブロックを含む
2. 暗黄褐色土 ロームブロック・黒色土・焼土ブロックを含む
3. 暗褐色土 岩盤ブロック・黒色土ブロックを多く含む
4. 暗褐色土 岩盤・黒色土ブロック・焼土を含む
5. 暗灰褐色土 岩盤微粒, ローム・焼土・黒色土を微粒含む
6. 褐色土 黒色土・岩盤ブロックを多量に含む
7. 暗褐色土 岩盤・焼土・黒色土ブロックを全体に含む
8. 灰黒色土 粘質, 全体に灰色, 焼土粒少量混
9. 褐色土 黒色土, 焼土ブロックを少量含む
10. 黒褐色土 黒色土ブロック, 焼土粒を多量に含む
11. 黄褐色土 黒色土の混入少量
12. 黄褐色土 黒色土の混入多, 岩盤ブロック含む
13. 黄褐色土 黒色土の混入多

SI-001 カマド1 a-a'

1. 暗黄褐色土 岩盤ブロックを多く含む
2. 暗赤褐色土 焼土多く含む, 岩盤ブロックを少量含む
3. 暗褐色土 黒褐色土・焼土粒・岩盤ブロックを少量含む
4. 黒褐色土 暗褐色土・焼土粒・焼土ブロックを少量含む
5. 暗黄褐色土 暗黄褐色土に岩盤ブロックを含む
6. 暗黄褐色土 暗褐色土・黒褐色土・岩盤ブロック粒を含む

SI-001 カマド2 b-b' c-c'

1. 暗褐色土 焼土ブロックを微量含む
2. 暗赤褐色土 焼土粒多, 黄褐色土を斑状に含む
3. 朱褐色土 レンガ状に焼けた焼土主体, 炭化材を含む
4. 暗黄褐色土 焼土ブロックを多く含む
5. 暗褐色土 堅緻なローム粒, 焼土粒を微量含む
6. 漆黒色土 黒色土・暗褐色土を斑状に含む
7. 暗褐色土 1に類似, 焼土ブロックを少量含む



第21図 SI-003・SI-004・SI-005・SI-006 平面図・土層断面図

SI-008 (第19・22図, 第7表, 図版19・26)

3D-11から検出された。3Tの調査中にトレンチ内で確認された。遺構の広がり狭く、トレンチ内で収束したために周囲の拡張はせず、本調査範囲にも加えなかった。確認の段階では、径1mmほどの焼土を含む遺構と確認されたが、カマドの残欠と思われる。レンガ状に焼けた岩盤と同じ素材のブロックと、焼土の間に土師器坏が出土した。焼土を取り除くと地山は黒く、浅い丸底の土坑状を呈していた。拡張したところ地山と異なる土色の広がりが見えたので、それを床面と仮定し、東側にカマドを持つ堅穴住居の可能性が考えられた。調査時は土坑SK-010として調査を実施したが、SI-008として報告する。遺構の周囲は、深さの違う多くの攪乱によって壊されている。

遺物は4点が図示できた。33~36は土師器である。33~35は坏、36は高台付坏である。

SB-001 (第19・23・35図, 第7・11表, 図版19・27)

2C-48を中心として検出された。1×1間の掘立柱建物跡である。P1は当初は土坑SK-006として調査。また、P2はSK-014として、P3はSK-013として、P4はSK-011として調査され、最後に掘立柱建物と確認された。各ピットの断面には柱痕跡が確認できる。P1の土層の観察によると柱の痕跡の上に水平の土層が堆積しており、柱穴を再度他の遺構に転用した様子がうかがわれる。また、この遺構が検出された場所は水平でなく、斜面から検出されている。遺構検出面からの柱穴の深さはほぼ同じで、柱穴の遺構断面を観察すると、水平の床、屋根の確保は難しく思われる。さらに、1×1間の建物跡としては柱穴の掘り方が大きい。

遺物は1点が図示できた。石製の支脚と思われるものである。全体に摩滅している。

SI-003 A-A' B-B'

1. 黒褐色土 焼土粒やや多
2. 灰褐色土 炭化粒・焼土粒・岩盤ブロックを微量含む
3. 灰黄褐色土 2層に黄褐色土を含む
4. 黄褐色土 淡褐色砂質土をブロック状に多く含む
5. 暗黄褐色土 焼土粒・炭化粒は含まない
6. 灰褐色土 淡褐色砂ブロック多く、焼土・炭化粒微量含む
7. 黄褐色土 暗褐色土含む
8. 灰褐色土 2層より暗褐色が強い、焼土粒・炭化粒を含む
9. 灰褐色土 岩盤・黒色土・焼土を多く含む
10. 黄褐色土

SI-005 A-A'

1. 青灰褐色土 黒褐色土・暗褐色土・茶褐色土を含む
2. 暗褐色土 黒褐色土を少量含む
3. 黒褐色土 青灰色粘質土に褐鉄鉱を少量含む
4. 暗黄褐色土 青灰褐色土に炭化物を少量含む
5. 暗褐色土 青灰褐色土粒を含む

SI-004 A-A' B-B'

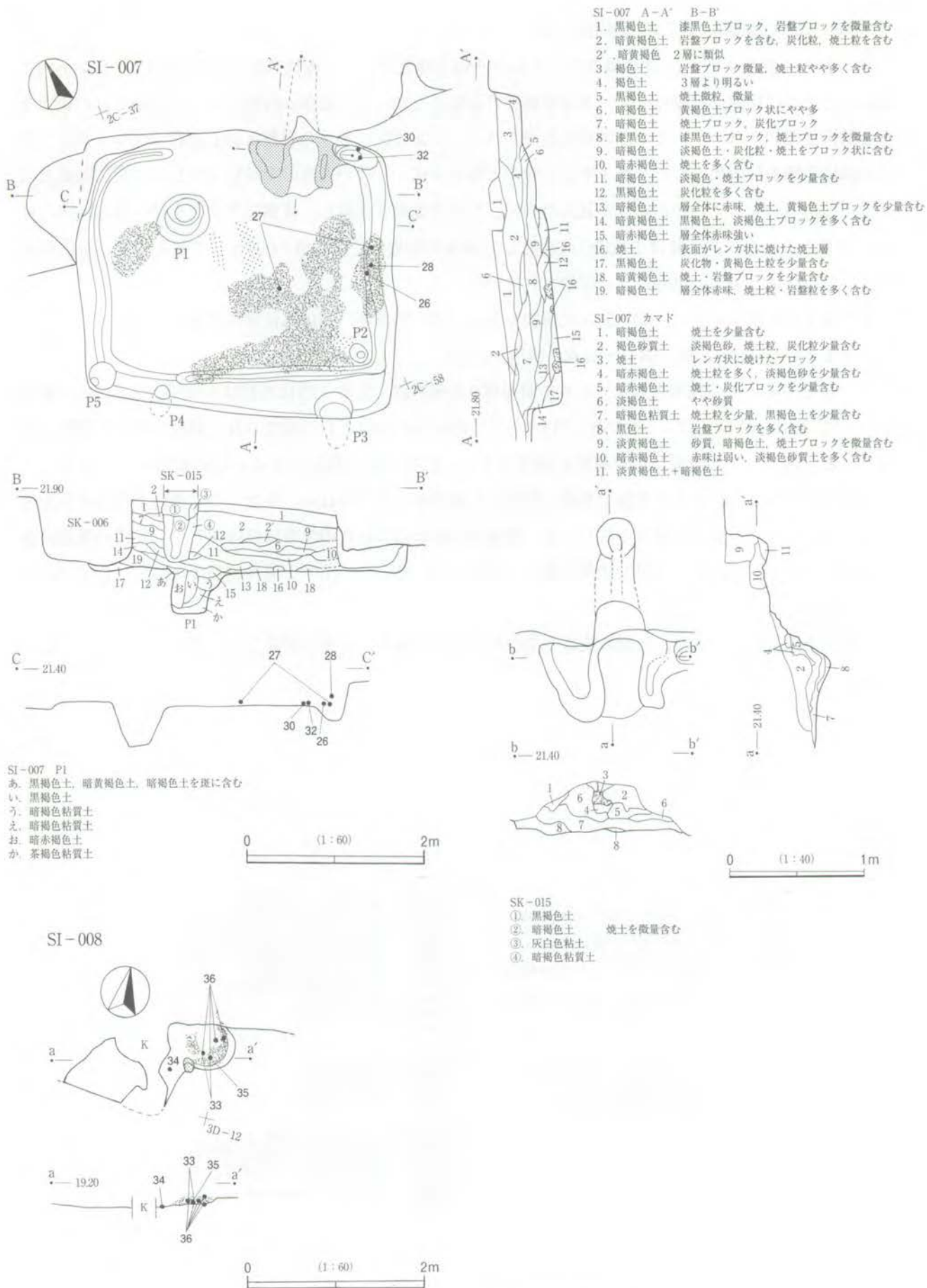
1. 暗黄褐色土 焼土・岩盤ブロックを微量含む
2. 暗褐色土 黒褐色土・黄褐色土を焼土粒を含む
3. 暗褐色土 焼土粒、岩盤ブロック、炭化粒を少量含む
4. 黒色土 床の敷物が炭化したものか? 厚さ10~15mm
5. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒・岩盤ブロック少量含む
6. 暗褐色土 焼土・ローム微粒、微量含む
7. 褐色土 6層に類似、部分的に黄褐色を呈する
8. 黒褐色土 褐色土、粘性強い
9. 暗黄褐色土 やや砂質、地山か?
10. 黄褐色土

SI-004 PI D-D'

1. 暗褐色土 焼土粒少量含む
2. 暗褐色土 黒褐色土をふくむ
3. 黒褐色土 暗褐色土を含む

SI-006 A-A'

1. 暗黄褐色土 焼土・岩盤ブロック微量、焼土粒を含む
2. 暗褐色土 黒褐色土・焼土粒・黄褐色土を斑状に含む
3. 暗褐色土 焼土粒・岩盤ブロック・炭化粒を少量含む
4. 黒色土 炭化物の層
5. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒を微量含む、床面か?
6. 黄褐色土



第22図 SI-007・SI-008 平面図・土層断面図

SK-001 (第19・24・31図, 第7・9表, 図版20・26)

2D-70から検出された。本調査区内で、上段と下段の間の斜面に遺物が出土していたために調査を実施した。長軸3m、短軸約1.2m、深さ0.36mが検出された。覆土は焼土ブロック混じりの土で、その中に土師器小片が混じていた。斜面下側については立ち上がりが検出できなかった。

遺物は3点が図示できた。37～39は土師器で、37は底部がほぼ平らで盤状坏に近い形をしている。38は坏、39は甕である。

SK-002 (第19・24図, 第7表, 図版20)

2C-45から検出された。地山層である漆黒色土中に掘り込まれている。径0.8mほどの円形をしている。深さは約0.22mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。図示できる遺物はなかった。

SK-003 (第19・24図, 第7表, 図版20)

3C-13から検出された。径0.7mほどの円形をしている。深さは約0.3mを測る。壁面、床面ともに凹凸は少なく、寸胴に近い形状をしている。図示できる遺物はなかった。

SK-004 (第19・24図, 第7表, 図版17・20)

3C-26から検出された。一辺約0.8mで、深さは約0.22mの正方形に近い形状をしている。底面は東西の壁際とほぼ中央に小ピット状の凹みが各1か所ある。図示できる遺物はなかった。

SK-005 (第19・24図, 第7表, 図版20)

2C-05から検出された。検出された形は長軸0.9m、短軸0.7mの方形か胴の張る長方形をしている。深さは約0.2mを測る。攪乱によって東北部を欠く。床面には多少の凹凸がある。

図示できる遺物はなかった。

SK-006

当初は土坑として調査を開始したが、SB-001 P1へ変更し、番号は欠番とした。

SK-007 (第19・25図, 第7表, 図版20)

3C-05から検出された。1辺0.9m×0.7mの方形をしている。深さは約0.12mである。床面は平らである。図示できる遺物はなかった。

SK-008 (第19・25・31図, 第7・9表, 図版20・26)

3C-04から検出された。長軸が約1.35m～0.85mで、深さは約0.16mである。底面は平坦である。

遺物は1点が図示できた。40は須恵器の坏である。

SK-009 (SI-007)

当初は土坑として調査を開始したが、SI-007へ変更し、番号は欠番とした。

SK-010 (SI-008)

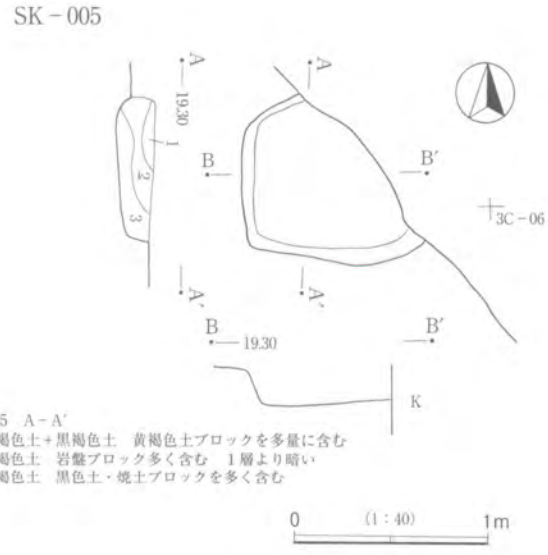
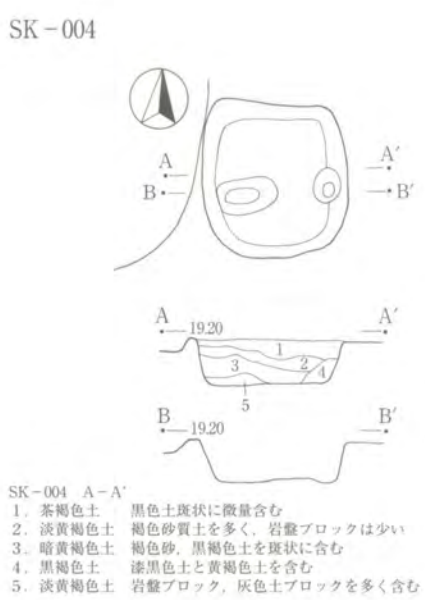
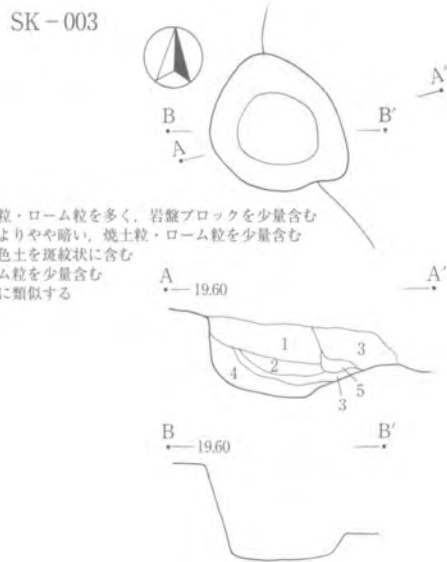
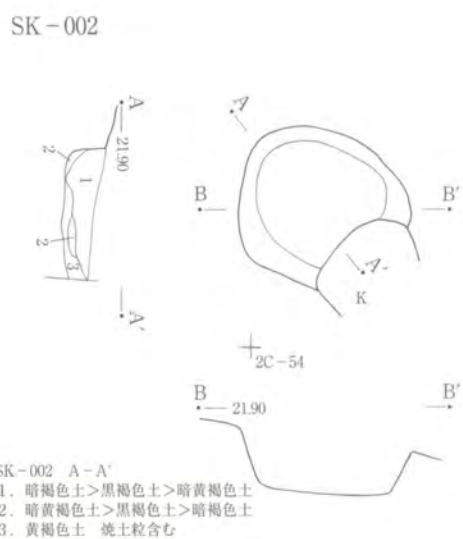
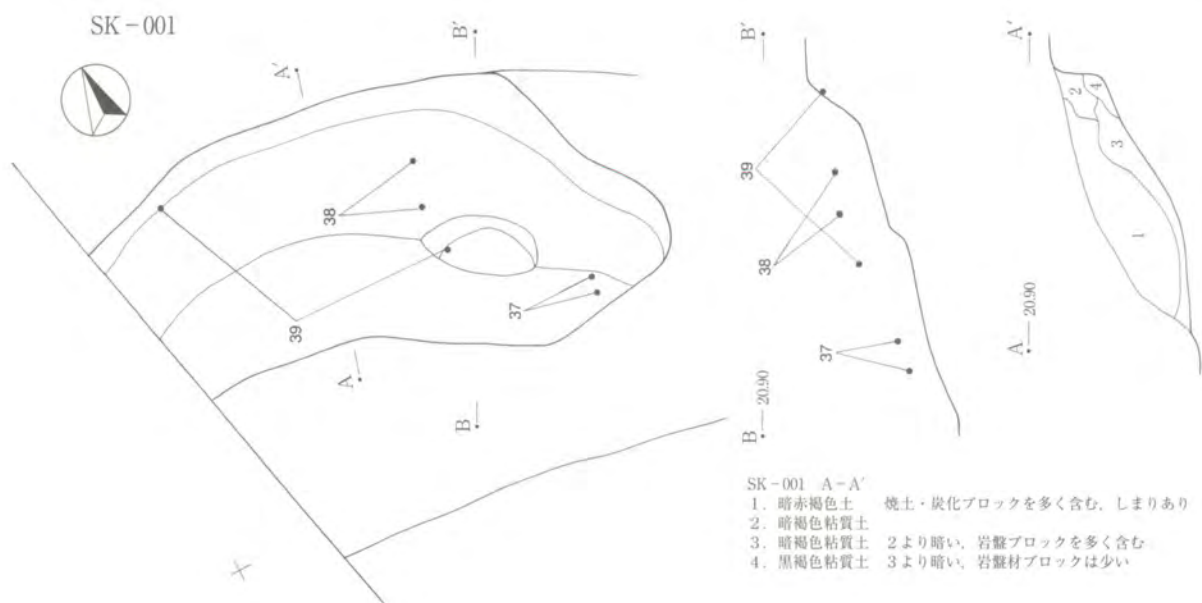
当初は土坑として調査を開始したが、SI-008へ変更し、番号は欠番とした。

SK-011 (SB-001 P4)

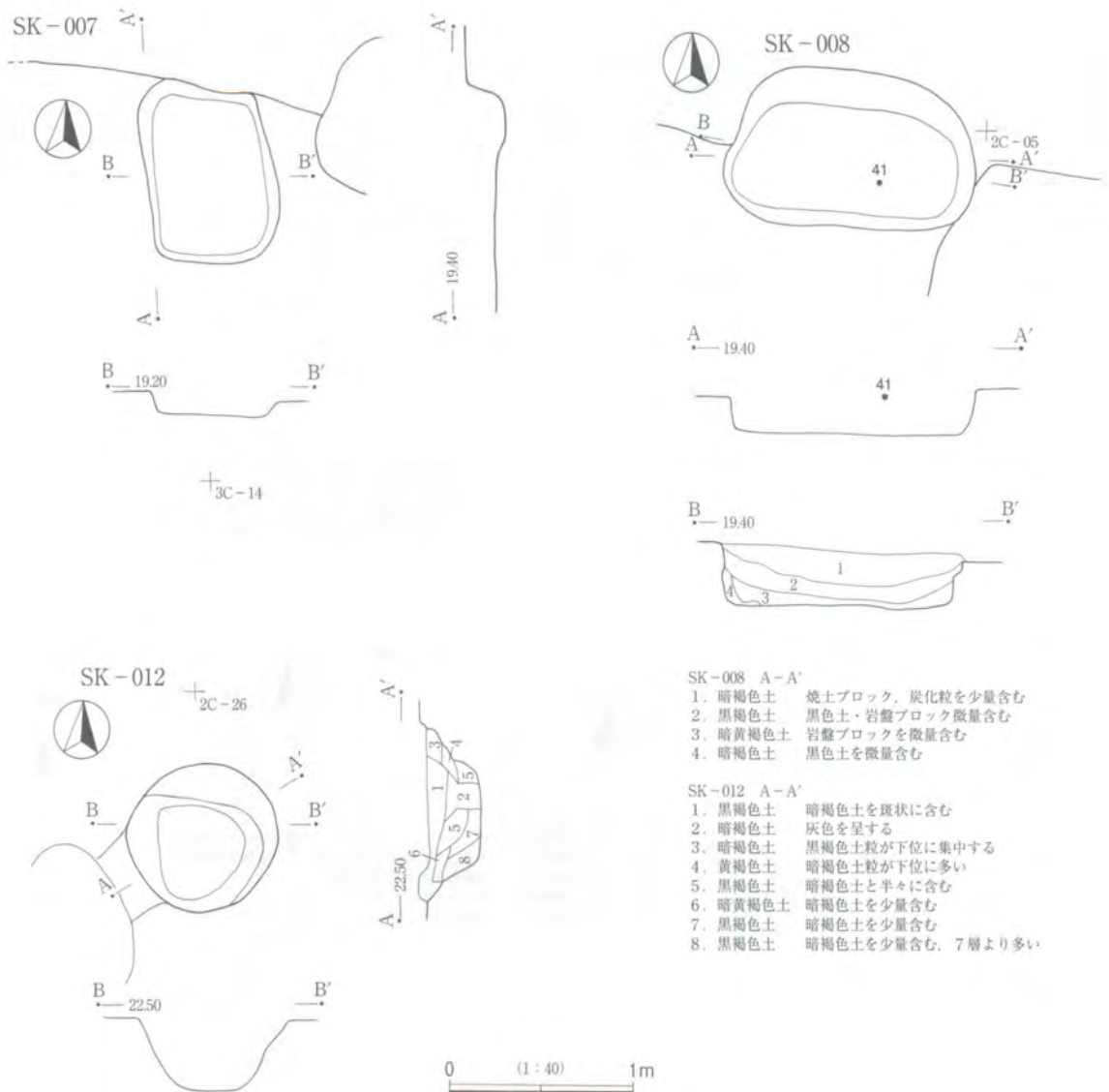
当初は土坑として調査を開始したが、SB-001 P4へ変更し、番号は欠番とした。

SK-012 (第19・25図, 第7表, 図版19)

2C-26から検出された。ほぼ円形に近い形状をしている。径0.83m×0.8m、深さ0.35mを測る。図示できる遺物はなかった。



第24図 SK-001～SK-005 平面図・土層断面図



第25図 SK-007・SK-008・SK-012 平面図・土層断面図

SK-013 (SB-001 P3)

当初は土坑として調査を開始したが、SB-001 P3へ変更し、番号は欠番とした。

SK-014 (SB-001 P3)

当初は土坑として調査を開始したが、SB-001 P2へ変更し、番号は欠番とした。

SK-015 (第19・22図, 第7表, 図版18)

SI-007の土層断面で確認したが、床面までは達していないため、平面形は不明である。図示できる遺物はなかった。

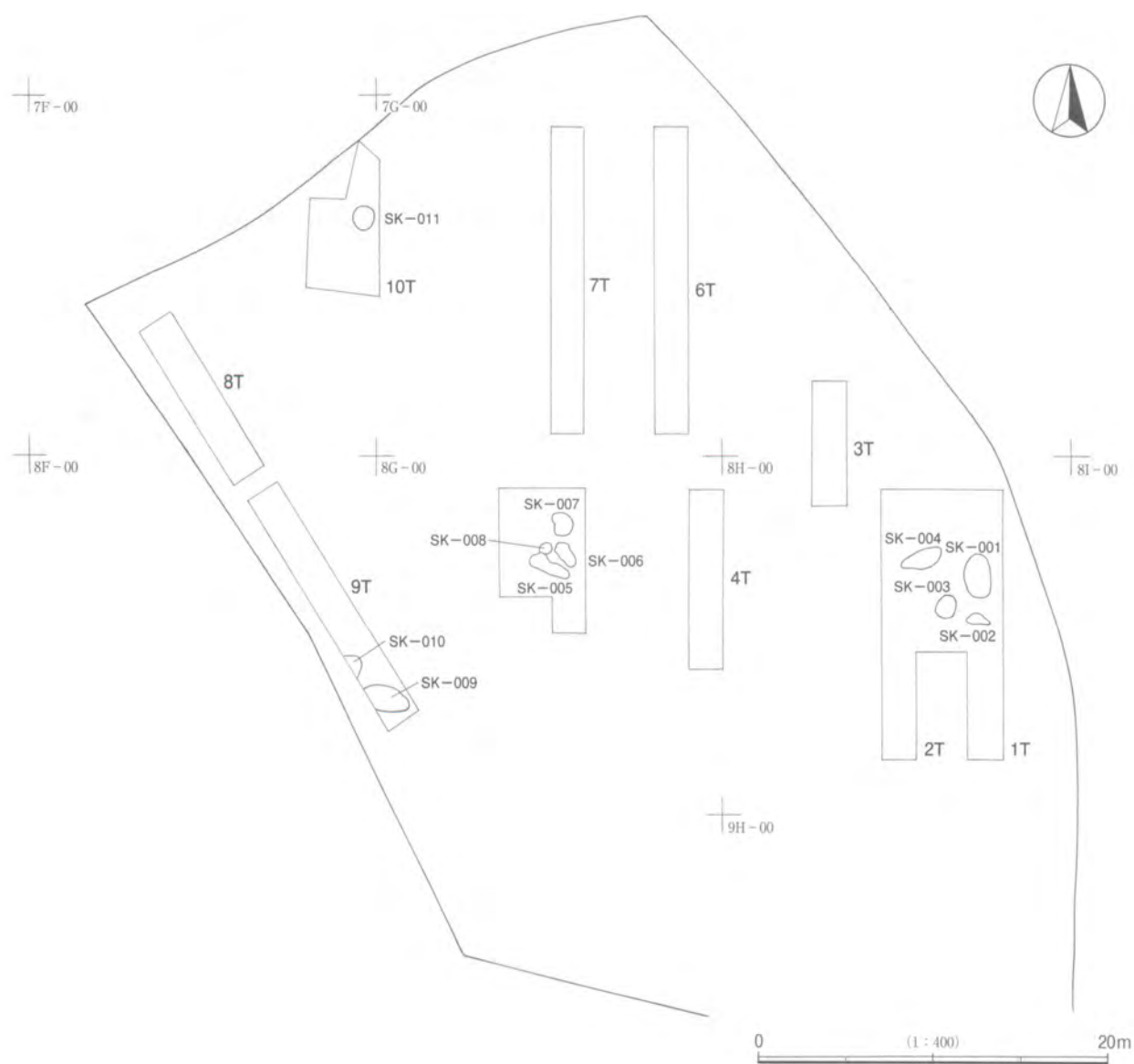
トレンチ・グリッドから出土した遺物 (第18・31・32図, 第9・11表, 図版26)

トレンチ、グリッドから出土した遺物で13点が図示できた。41~50は土師器である。41~46は坏で、41・42は体部がほぼ垂直に立ち上がる。43・44は体部が湾曲して立ち上がる。46は体部に稜をもつ。47は蓋形土器で外面はヘラケズリを施す。48~50は甕で全形のはななかった。51・52は須恵器の長頸壺と思われる。51の底部中央は打ち欠いた様にも観察できる。53は土錘で一部欠損している。

2 柿谷遺跡（2）（第18・26～28・32・33図，第8・11表，図版22・26・27）

第1節 概要

調査地点は，標高25mの台地側縁部から標高16mの沖積地に至る暖斜面低地部で，確認トレンチによって現水田下から埋没微高地が検出された。この微高地から奈良・平安時代の土坑9基が検出された。上層の調査はトレンチ内からこれらの土坑が検出されただけで，トレンチを拡張しただけで調査を終了した。下層の調査は立川ローム層が存在していないため調査対象外となった。



第26図 柿谷遺跡（2）遺構配置図

第2節 検出した遺構と遺物

10基の奈良・平安時代と思われる土坑を検出した。

SK-001 (第26・27図, 第8表, 図版22)

1Tから検出された。長楕円形を呈する。性格不明。長軸2.5m, 短軸1.25m, 深さ0.36mを測る。図示できる遺物はなかった。

SK-002 (第26・27図, 第8表, 図版22)

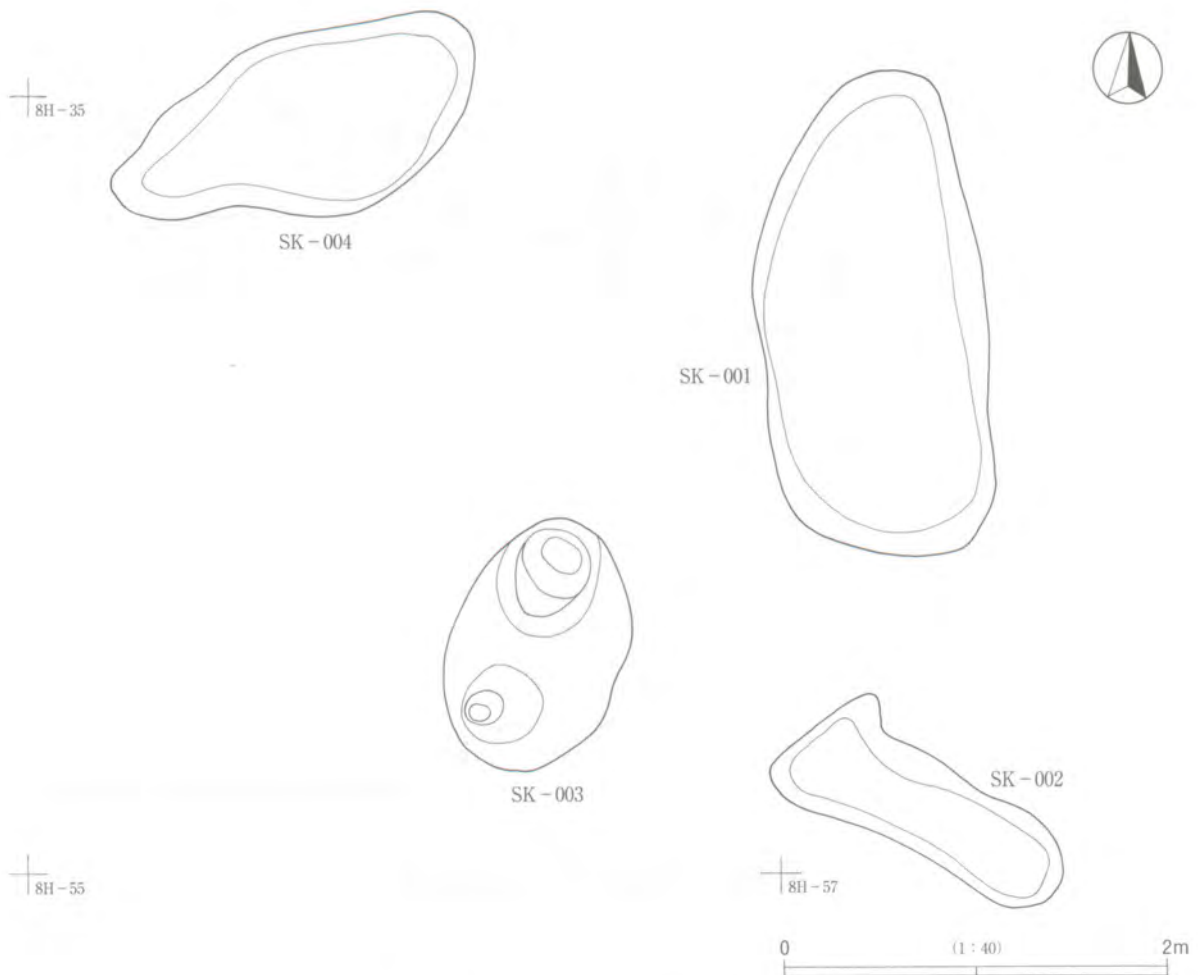
1Tから検出された。細長い形状を呈する。性格不明。長軸1.63m, 短軸0.5m, 深さ0.17mを測る。図示できる遺物はなかった。

SK-003 (第26・27図, 第8表, 図版22)

1Tと2Tの間から検出された。2本のピットが連結している。楕円形を呈する。性格は不明である。ピットの長軸は1.3m, 短軸は0.85mを測る。北側のピットは長軸0.6m, 短軸0.5m, 深さ0.33m, 南側のピットは長軸0.4m, 短軸0.4m, 深さ0.44mを測る。図示できる遺物はなかった。

SK-004 (第26・27図, 第8表, 図版22)

2Tから検出された。長楕円形を呈する。性格不明。長軸2.08m, 短軸1.0m, 深さ0.1mを測る。図示できる遺物はなかった。



第27図 SK-001~004 平面図・土層断面図

SK-005 (第26・28図, 第8表, 図版22)

5Tから検出された。形状はSK-004に類似する。性格は不明で、周囲にも性格不明な土抗が集中する。長軸2.58m, 短軸0.7m, 深さ0.6mを測る。図示できる遺物はなかった。

SK-006 (第26・28図, 第8表, 図版22)

5Tから検出された。形状はSK-006に類似し、性格は不明である。長軸1.61m, 短軸0.7m, 深さ0.5mを測る。図示できる遺物はなかった。

SK-007 (第26・28・32図, 第8表, 図版22・26)

5Tから検出された。円形を呈する。性格は不明。長軸1.5m, 短軸1.1m, 深さ0.7mを測る。

遺物は1点が図示できた。54は土師器の高坏脚部片である。

SK-008 (第26・28図, 第8表, 図版22)

5Tから検出された。楕円形を呈する。底面には2か所の落ち込みがある。長軸0.85m, 短軸0.5m, 深さ0.48mを測る。図示できる遺物はなかった。

SK-009・SK-010 (第26図, 図版22)

両者とも9Tから検出された。伴出遺物はなく、覆土などの状況から後世の遺構と思われるが、遺構配置図には掲載する。SK-009の西側は調査区外に続き、長軸2.0m, 短軸1.1m, 深さ0.44mを測る。SK-010も西側はトレンチ外に続く。南北に主軸をとり、長軸1.08m, 短軸0.63m, 深さ0.38mを測る。

SK-011 (第26・28・32図, 第8表, 図版22・26・27)

10Tから検出された。周辺から遺物が出土している。性格は不明である。ほぼ円形を呈し、長軸1.23m, 短軸1.15m, 深さ0.24mを測る。

遺物は4点が図示できた。55~56は坏の底部片, 57~58は甕である。

トレンチから出土した遺物 (第26・33・34図, 第10表, 図版22・27)

トレンチから出土した遺物は3点の土器と10点の石器・土製品が図示できた。59~61は甕で全形の分かるものはなかった。

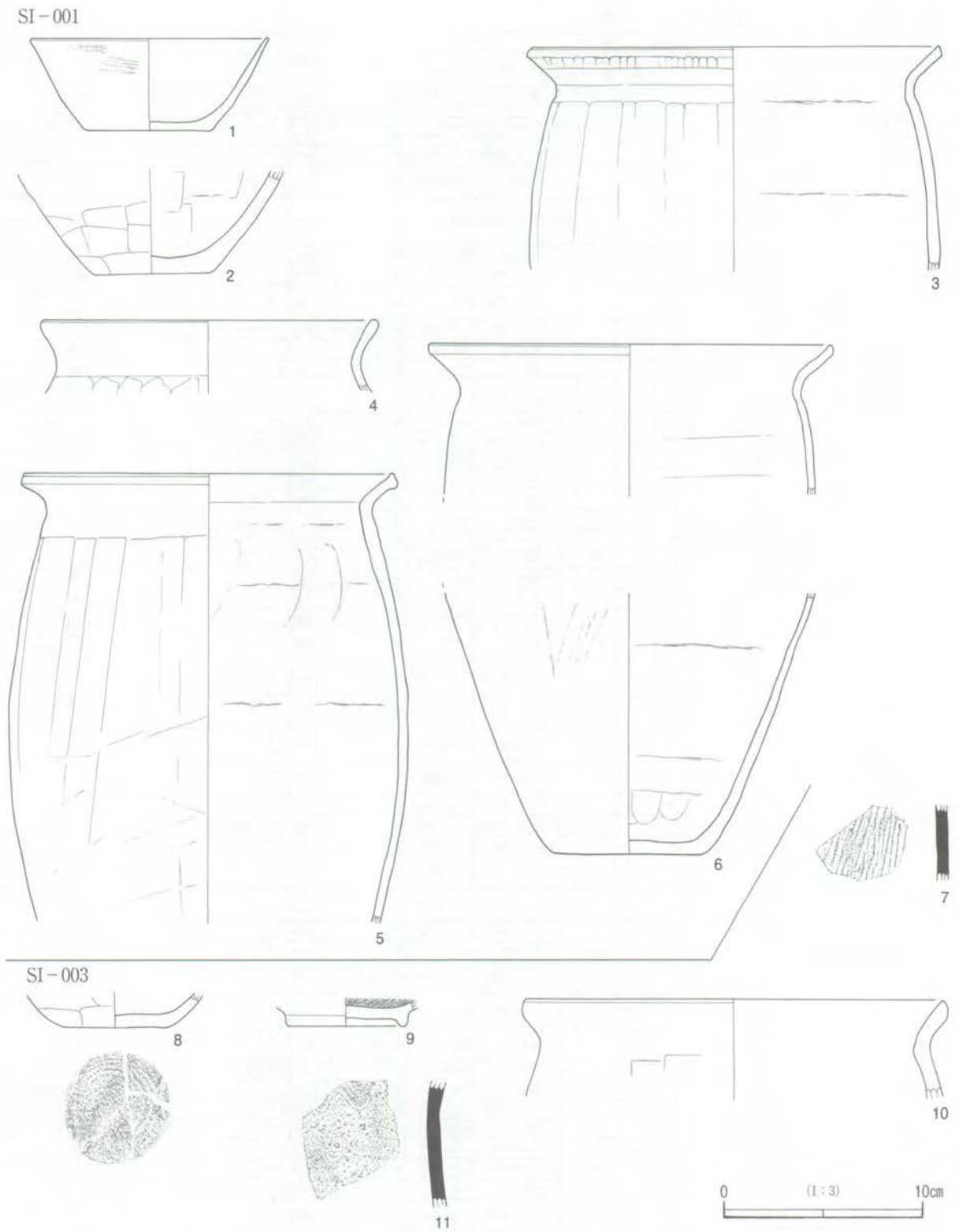
その他の出土遺物 (第35図, 第9~11表, 図版27)

62~65は須恵器片を再利用した砥石である。周囲がすべて研磨されているわけではなく、→でしめした部分に研磨・使用痕が見られる。64は甕内面も硯の様に研磨されている。

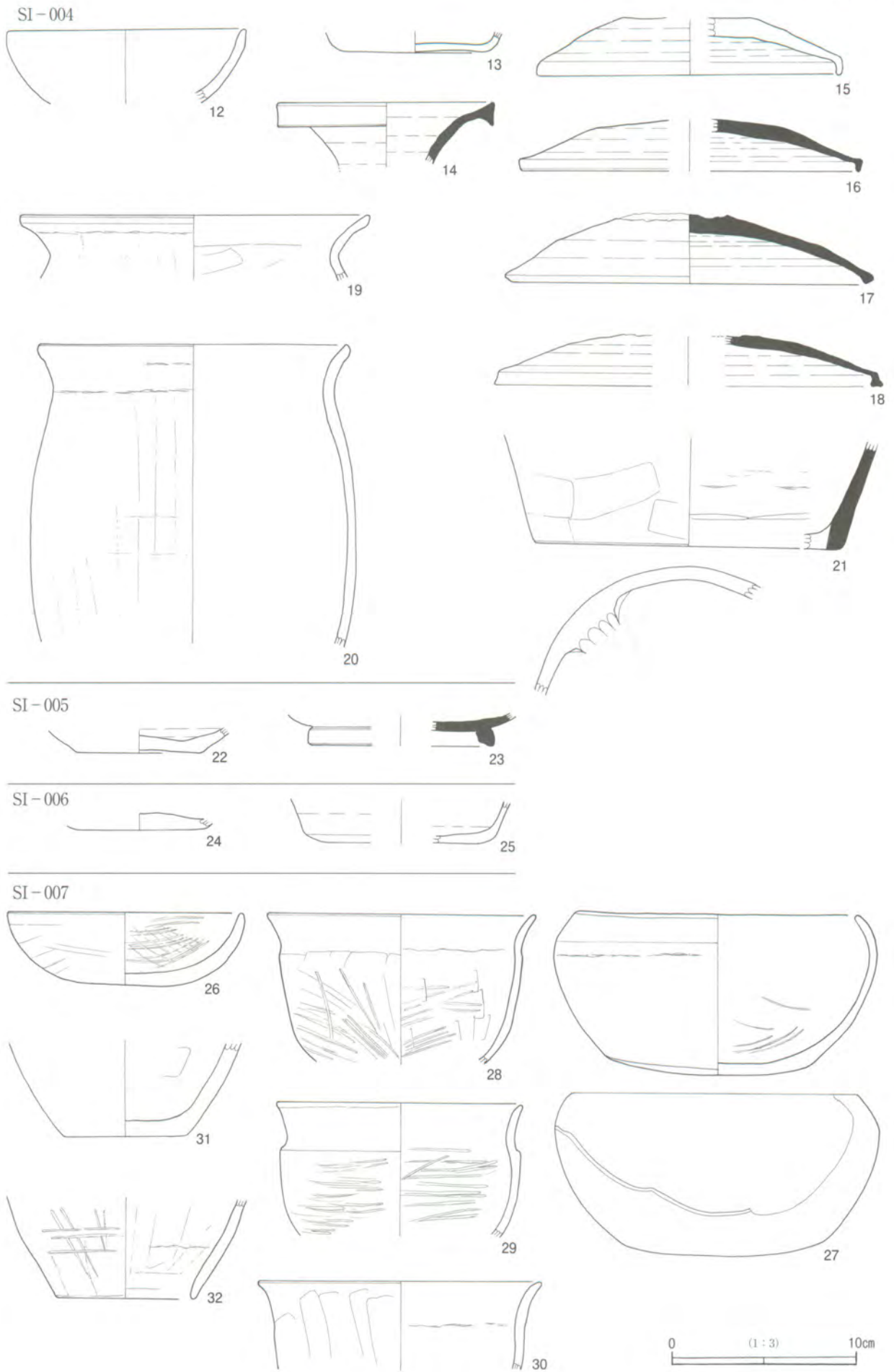
石製品は6点が図示できた。1~5は一般的に見られる砥石であるが、5は自然石をそのまま使用した様に観察でき、刃部を研いだと思われる擦痕が周囲に見られる。6は支脚と思われる製品で、円錐状を呈しており下部を欠損している。石製の支脚の可能性はある。

第9表 柿谷遺跡(1) 出土遺物観察表(土器)

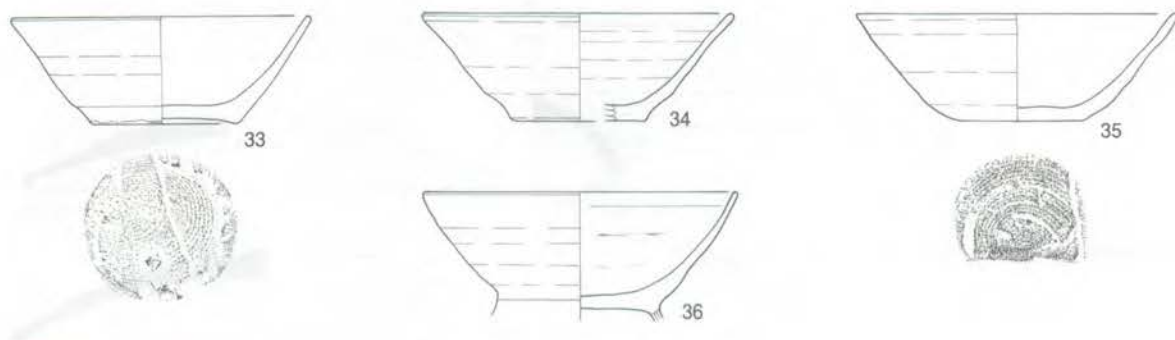
押込 番号	掲載 番号	実測 番号	遺構番号	遺物番号	種別	器種	遺存度 %	単位: cm			色調		胎土	焼成	整形・調整		備 考
								口径・ 長さ	底径・ 幅	器高・ 残存高	外面	内面			外面	内面	
29	1	1	SI-001	8	土師器	坏	50	(11.8)	6.3	4.4	橙色	にぶい橙色	密	良好	ハケ目	マメツ	摩滅
29	2	6	SI-001	6, 7	土師器	甕, 底部	20		5.8	4.9	赤褐色	赤褐色	密(赤茶粒含む)	普通	ハラケズリ・ナデ	ハラナデ	2次焼成
29	3	3	SI-001	21	土師器	甕, 口縁	25	20.2		10.9	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密	不良	ハラケズリ・ナデ	ヨコナデ・ハラナデ	
29	4	5	SI-001	10	土師器	甕, 口縁	10	16.5		3.6	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ハラケズリ・ナデ	ナデ	
29	5	4	SI-001	5, 2, 3, 1, 9, 11	土師器	甕, 口縁	50	18.4		21.4	黒褐色	にぶい赤褐色	密	良好	ハラケズリ・ナデ	ナデ	
29	6	2	SI-001	4, 16, 13, 17, 1, 14, 15, 18, 19, SI-007, 1	土師器	甕	60	(17.0)	7.6	19.7	にぶい赤褐色	褐色	密	不良	ハラケズリ・ナデ	ハラナデ	摩滅, 上・下部は接合しない
29	7	7	SI-001	1	須恵器	甕, 胴部	破片				暗灰白色	暗灰白色	密	良好	タタキ	ナデ	外面タタキ
29	8	8	SI-003	1	土師器	坏, 底部	25		5.2	1.7	にぶい褐色	にぶい褐色	密	普通	ナデ	ナデ	底部拓本
29	9	9	SI-003	1	土師器	高台付坏	60				にぶい褐色	黒色	密	良好	ナデ	ミガキ, 黒色処理	底外(回転ハラ切り), 内面摩滅
29	10	10	SI-003	1	土師器	甕, 口縁	20	(20.8)		4.8	にぶい褐色	にぶい褐色	粗(赤茶粒含む)	普通	ハラケズリ・ナデ	ナデ	摩滅
29	11	12	SI-003	1	須恵器	甕, 頸部	破片	—	—	—	暗灰白色	暗灰白色	密	良好		ナデ	波状文
30	12	15	SI-004	3	土師器	鉢, 口縁	20	13.0		3.7	褐色	褐色	密(赤茶粒含む)	良好	ナデ	ナデ・ミガキ	摩滅
30	13	14	SI-004	3	土師器	坏, 底部	20		7.8	1.0	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ハラケズリ	ナデ	底部外周(回転ハラ切り), 写真なし
30	14	18	SI-004	15	須恵器	甕, 口縁部	20	11.9		3.4	暗灰白色	暗灰白色	密	良好	ナデ	ナデ	ロクロ成形
30	15	22	SI-004	1, 2, 4, 17	土師器	蓋	70	16.3		2.9	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ハラケズリ・ナデ	ナデ	ロクロ成形
30	16	19	SI-004	14	須恵器	蓋	20	18.3		2.7	暗灰白色	暗灰白色	密	良好	ナデ	ナデ	ロクロ成形
30	17	21	SI-004	2, 8, 21	須恵器	蓋	25	19.2		3.6	褐灰色	褐灰色	密	良好	ナデ	ナデ	断面暗黒赤色, ロクロ成形
30	18	20	SI-004	3, 11	須恵器	蓋	25	(12.0)		(2.7)	灰白色	灰白色	密	良好	ハラナデ	ナデ	
30	19	13	SI-004	25	土師器	甕, 口縁部	20	18.9		3.3	赤褐色	褐色	密	良	ハラケズリ・ナデ	ナデ	
30	20	16	SI-004	32, 33, 31, 30	土師器	甕, 底部欠	20	16.7		15.7	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	密	良好	ハラケズリ・ナデ	ハラナデ	
30	21	17	SI-004	5, 9	須恵器	甕, 底部	20	16.5	5.6		褐灰色	にぶい黄褐色	密	良好	ハラケズリ	ハラナデ・ケズリ	
30	22	23	SI-005	1	土師器	坏, 底部	70	6.8	1.4		褐色	褐色	粗(赤茶粒含む)	良好			底部外周(回転系切り)
30	23	24	SI-005	1	須恵器	高台付坏	25	(10.1)	1.6		灰色	灰黄色	密	良好			摩滅
30	24	25	SI-006	1	土師器	坏, 底部	90	7.0	0.9		明赤褐色	暗褐色	粗	良好			底部外周(手持ちハラケズリ)
30	25	26	SI-006	1	土師器	坏, 底部	20	(10.5)	2.3		灰褐色	灰褐色	密	良好	ハラナデ	ナデ	底外(回転ハラ切り)(ハラケズリ外周), 意あり
30	26	28	SI-007	5	土師器	坏, 口縁	20	12.8		3.8	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密(赤茶)	良好	ハラケズリ・ナデ	ミガキ	底外(静止ハラ切り)(手持ちハラケズリ)
30	27	27	SI-007	1, 4, 7	土師器	鉢, 底部	20	15.2	11.0	8.5	にぶい褐色	にぶい褐色	粗(赤茶)	普通	ナデ	ナデ	底部外周(手持ちハラケズリ), 意あり
30	28	30	SI-007	3	土師器	椀	20	(14.5)		7.9	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ハラケズリ・ミガキ・ナデ	ナデ・ミガキ	
30	29	31	SI-007		土師器	椀	20	13.4		7.0	にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ハラケズリ・ミガキ・ナデ	ナデ・ミガキ	
30	30	32	SI-007	6, 8	土師器	甕	25	(15.4)		4.8	にぶい褐色	にぶい赤褐色	密	良好	ハラケズリ・ナデ	ナデ	
30	31	29	SI-007	10	土師器	甕, 底部	70		6.6	4.8	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	粗	普通	ハラケズリ・ナデ	ナデ	
30	32	34	SI-007	2	土師器	甕, 底部	破片	(7.5)	5.4		にぶい褐色	にぶい褐色	密	良好	ハラケズリ・ナデ	ハラナデ	
31	33	36	SI-008	1, 2, 5	土師器	坏	20	(11.7)	5.7	4.1	褐色	にぶい褐色	密	良好	ナデ	ナデ	底部外周(回転系切り), ゆがみあり
31	34	35	SI-008	7	土師器	坏	25	(12.3)	(5.3)	4.1	にぶい褐色	にぶい黄褐色	密	良好	ナデ	ナデ	底外(回転系切り), ロクロ成形
31	35	37	SI-008	5, 9	土師器	坏	60	(12.5)	4.7	4.1	にぶい褐色	にぶい赤褐色	粗	普通	ナデ	ナデ	底部拓本, ロクロ成形
31	36	38	SI-008	1, 2, 3, 4, 5, 6	土師器	高台付坏	80	12.4	(6.9)	4.6	明赤褐色	褐色	密	良好	ナデ	ハラナデ	高台の一部を欠く, 摩滅
31	37	40	SK-001	2, 15, 16	土師器	坏	50	14.4	10.9	3.4	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	密(赤茶)	良好	ハラケズリ・ナデ	ナデ	底外(静止ハラ切り)(ハラケズリ手持ち)
31	38	39	SK-001	2, 9, 10	土師器	椀	80	(14.3)	8.5	4.4	にぶい褐色	褐色	密	普通	ハラケズリ・ナデ	ナデ・ミガキ	底外(静止ハラ切り)(ハラケズリ手持ち)
31	39	41	SK-001	3, 11	土師器	甕, 口縁	30	(21.7)		6.2	赤褐色	褐色	粗(砂粒)	良好	ハラケズリ・ナデナデ	ヨコナデ・ハラナデ	器面不良
31	40	42	SK-008	1	須恵器	坏, 口縁部片	20	(11.9)		4.2	褐灰色	褐灰色	密	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ロクロ成形
31	41	43	2C-27	1	土師器	坏	50	(14.8)	7.2	5.2	褐色	褐色	密	良好	ナデ	ナデ	ロクロ成形, 底部拓本
31	42	47	2C-17	1	土師器	坏, 口縁	25	12.9		3.9	にぶい赤褐色	にぶい褐色	密	良好	ナデ	ナデ	ロクロ成形
31	43	81	表土	1	土師器	坏, 底部片	20		(9.3)	2.0	明褐色	明褐色	密	良好	ナデ	ナデ	漆付着, ロクロ成形
31	44	49	2T	3	土師器	坏	25	15.0	丸底	3.5	にぶい褐色	にぶい褐色	密	普通	ナデ	ナデ	摩滅
31	45	50	2T	3	土師器	坏	25	15.3	丸底	3.3	にぶい褐色	にぶい褐色	密	普通	ナデ	ナデ	摩滅
31	46	51	表土	8	土師器	坏, 口縁	50	14.9	丸底	3.7	褐色	褐色	密	良好	ナデ・ハラケズリ	ヨコナデ	
31	47	44	2C-27	1	土師器	蓋?	80	(12.2)	5.0	2.5	にぶい褐色	にぶい赤褐色	密	良好	ヨコナデ	ナデ	静止ハラ切り, 手持ハラケズリ
31	48	48	2C-28	1	土師器	甕, 底部	20		5.7	5.8	明赤褐色	にぶい褐色	粗	不良	ハラケズリ・ナデ	ハラナデ	底部外周(手持ちハラケズリ)
31	49	46	2C-16	1, 2C-17-1	土師器	甕, 底部片	30	(8.9)	6.5		褐色	にぶい褐色	粗(赤茶粒)	不良	タテナデ	ナデ	器面不良
31	50	45	2C-27	1	土師器	甕, 底部片	20		4.6	1.4	にぶい赤褐色	にぶい褐色	粗	良好	ハラナデ	ナデ	内面摩滅
32	51	52	2C-16	2, 2C-6-1, 2C-5-1	須恵器	壺	50		14.0	18.1	灰色	灰色	粗	普通	ナデ	ナデ	外面に軸付着, ロクロ成形
32	52	53	2C-17	2	須恵器	壺, 底部片	20		(9.8)	5.0	灰色	黄灰色	密	良好	ナデ	ナデ	ロクロ成形
32	53	61	表土	6	土製品	土鉢			6.2	2.6					ナデ	ナデ	内外面摩滅
34	62	54	2C-16	2	須恵器	甕(転用砥石)		10.4	4.9	1.2	灰色	灰色	密	良好	ハラ状工具による列点	ナデ・ミガキ	周囲を磨いている
34	63	55	2C-15	2	須恵器	甕(転用砥石)		9.3	7.7	1.2	灰色	灰色	密	良好	タタキ	ナデ	残存する一辺は磨いている
34	64	56	表土	3	須恵器	甕(転用砥石)		16.8	10.6	1.2	灰褐色	灰褐色	密	良好			表面に擦痕あり, 周囲には使用痕
34	65	58	3T	1	須恵器	甕(転用砥石)		3.5	2.7	1.5	灰褐色	灰褐色					



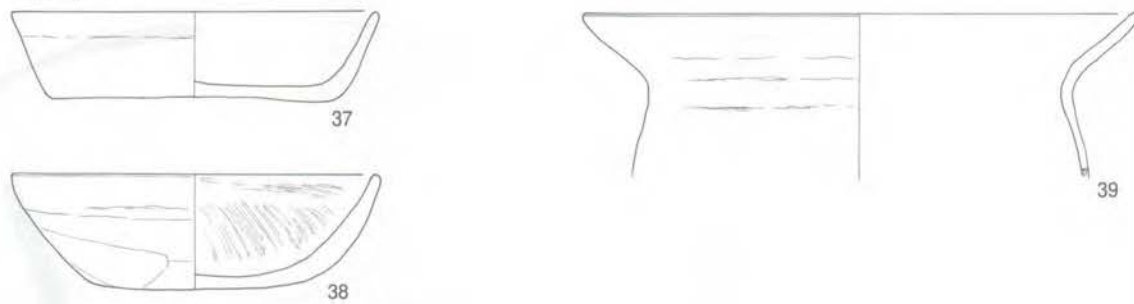
第29図 出土遺物 (1) 土器 (1)



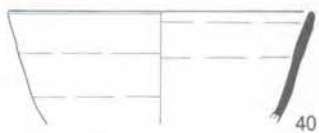
第30図 出土遺物(2) 土器(2)



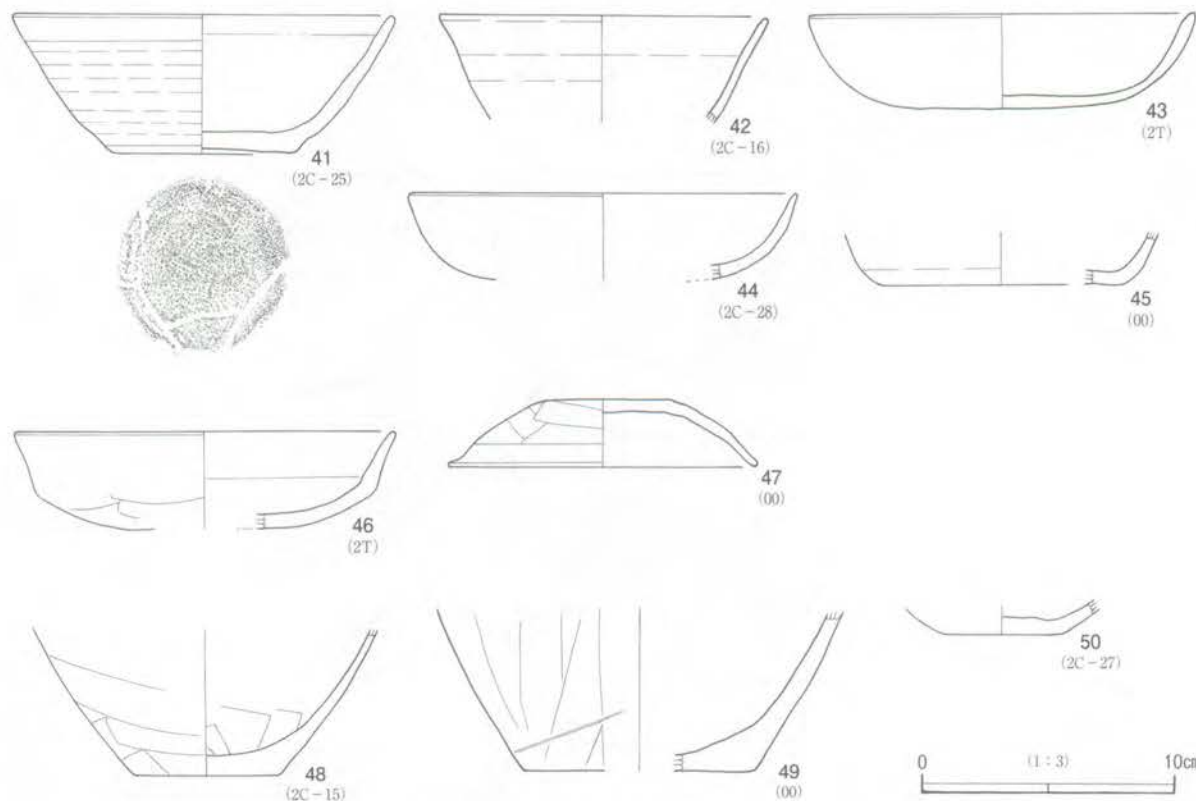
SK-001



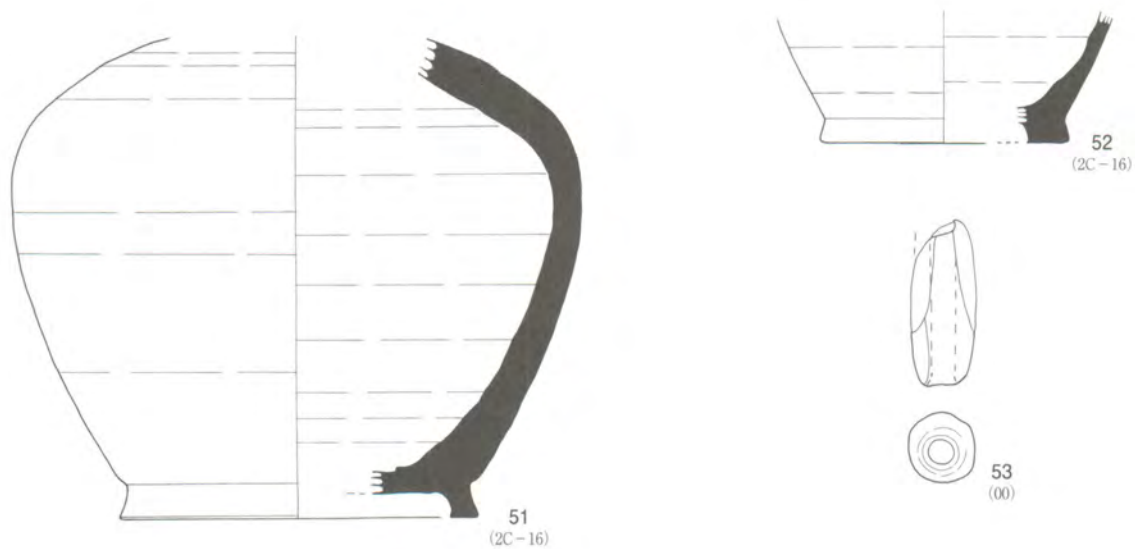
SK-008



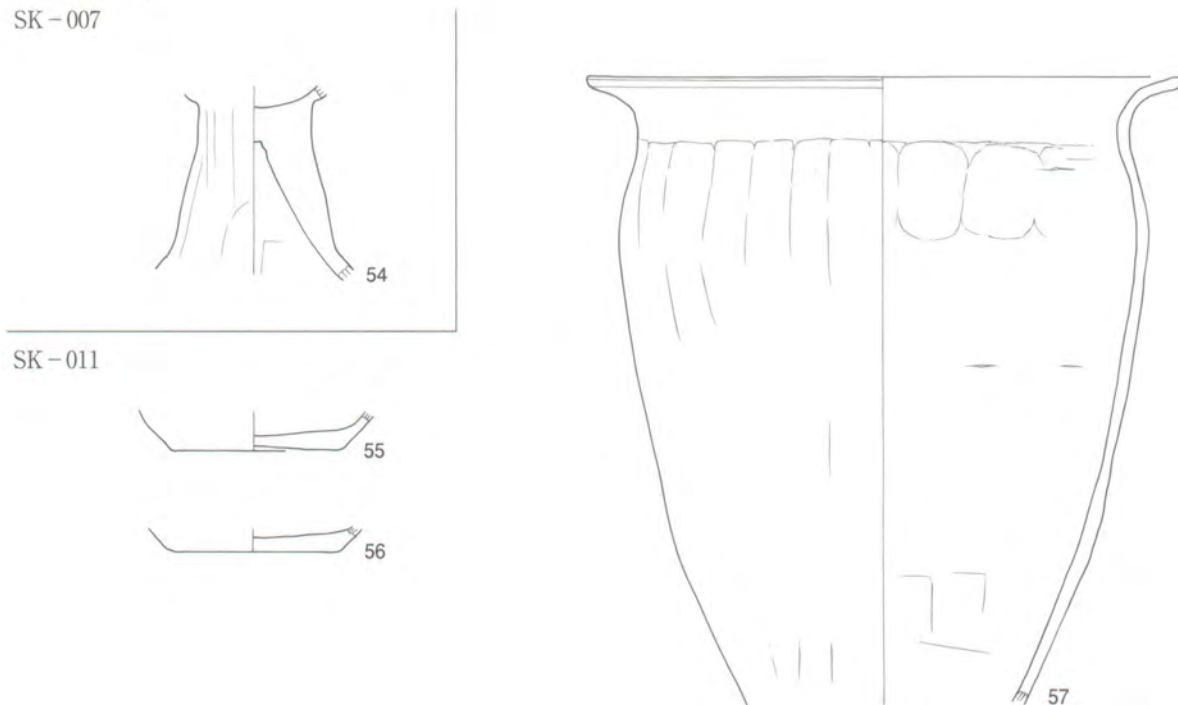
トレンチ・グリッド出土遺物 (00: 表土出土)



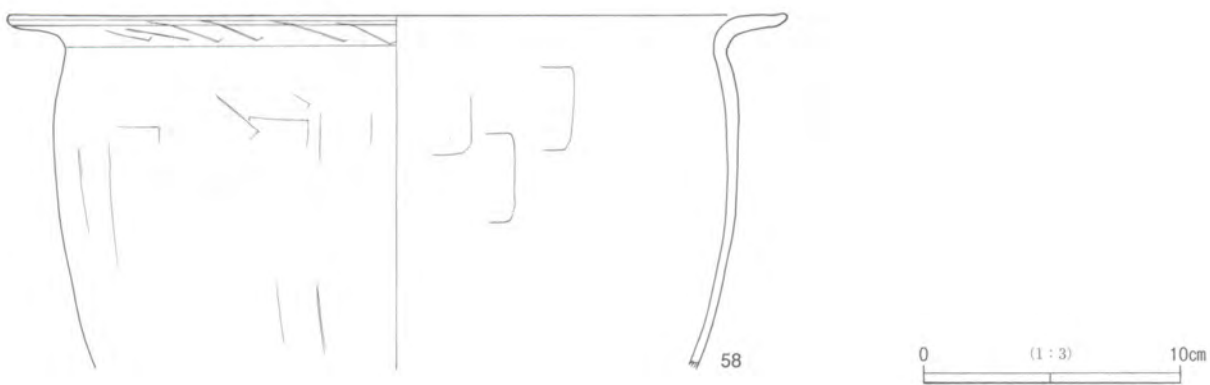
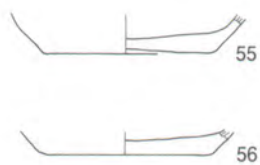
第31図 出土遺物 (3) 土器 (3)



柿谷遺跡 (2)
SK-007

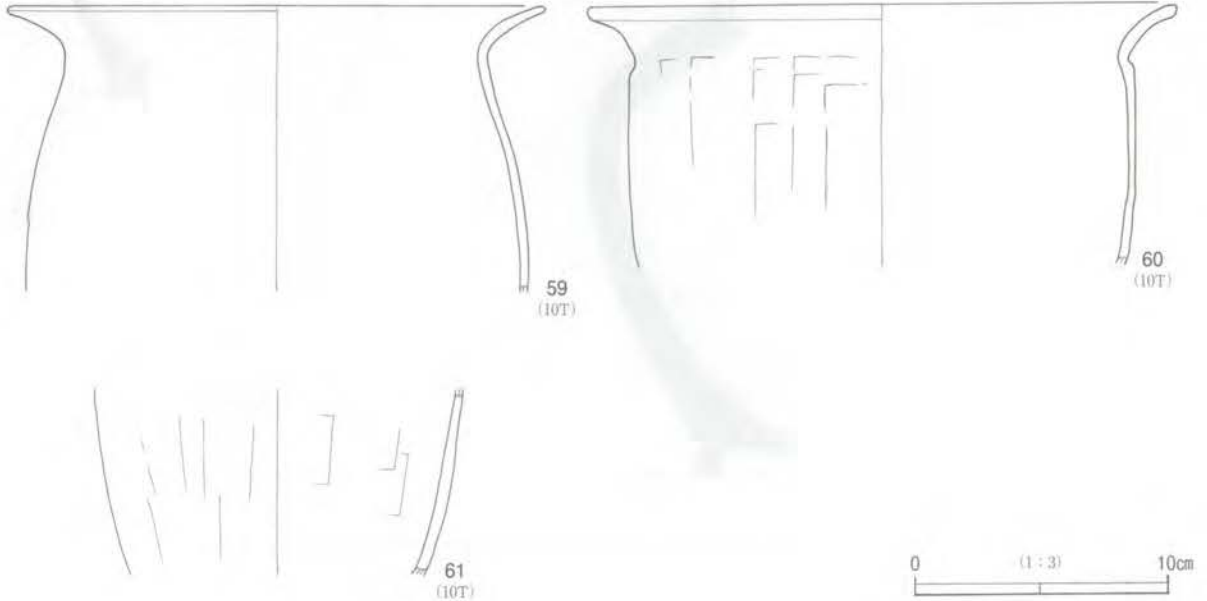


SK-011



第32図 出土遺物 (4) 土器 (4)

トレンチ出土遺物



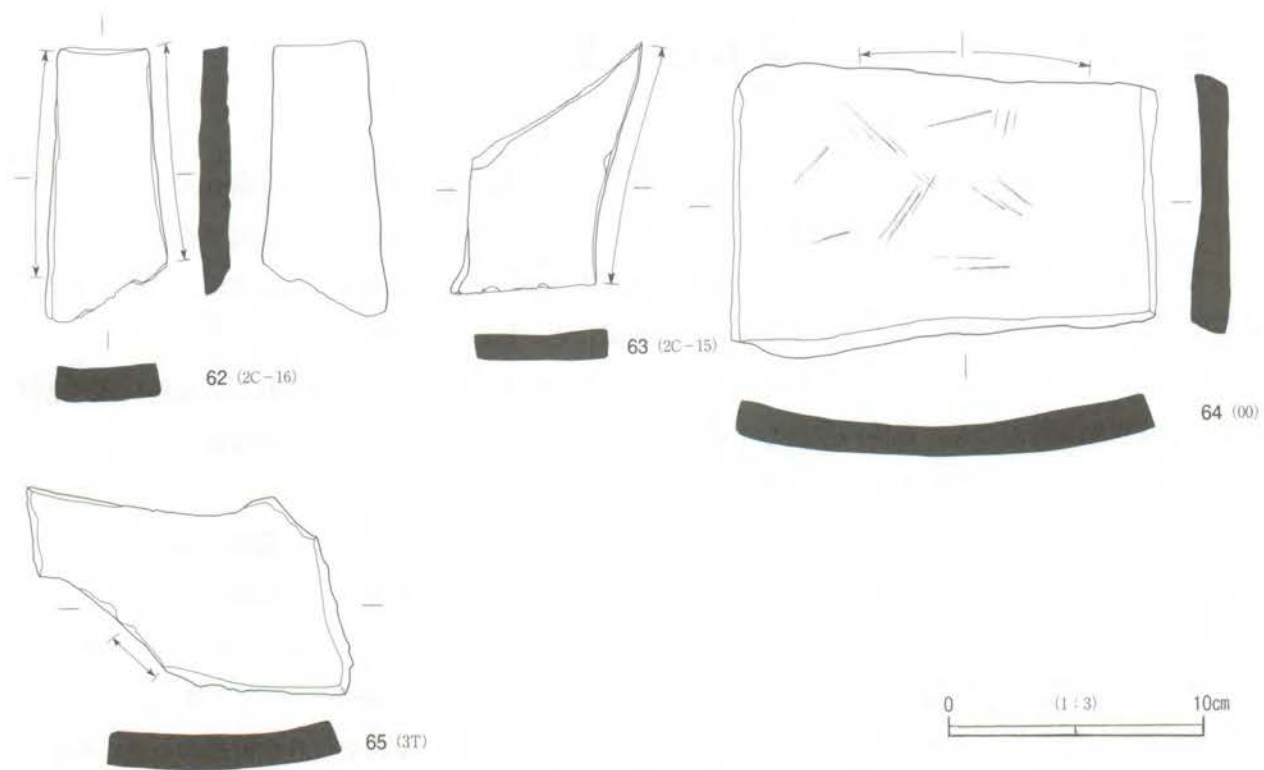
第33図 出土遺物 (5) トレンチ出土土器

第10表 柿谷遺跡 (2) 出土遺物観察表

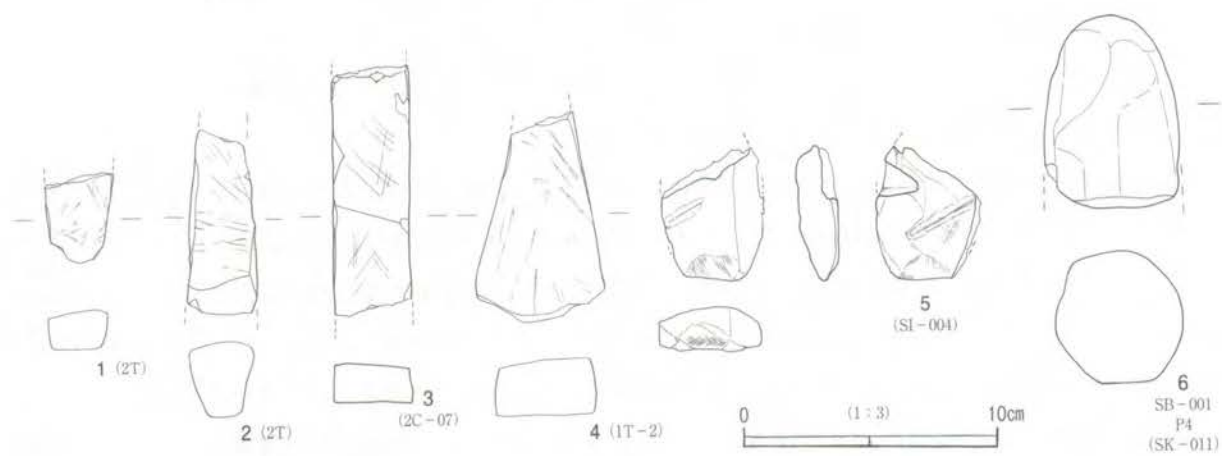
挿図 番号	掲載 番号	実測 番号	遺構 番号	遺物 番号	種別	器種	遺存度 %	単位: cm			色調		胎土	焼成	整形・調整		備 考
								口径・ 長さ	底径・ 幅	器高・ 残存高	外面	内面			外面	内面	
32	54	69	SK-007	1	土師器	高杯、脚部	60			7.0	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	密	良好	ヘラナデ	ナデ	
32	55	71	SK-011	5	土師器	坏、底部片	25		6.6	1.5	橙色	橙色	密	良好	ナデ	ナデ	底部回転糸切り、 全体摩滅
32	56	72	SK-011	4, 5	土師器	坏、底部片	25		6.7	0.9	橙色	橙色	密	良好	ナデ	ナデ	底部回転糸切り、 全体摩滅
32	57	73	SK-011	3, 7	土師器	甕、底部欠	80	23.0		23.6	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	密	良好	ヘラケズリ・ ナデ	ヨコナデ・ ヘラナデ	
32	58	70・ 74	SK-011	1	土師器	甕、口縁	20	(30.6)		13.5	明赤褐色	明赤褐色	粗	普通	ヘラケズリ・ ナデ	ヨコナデ・ ヘラナデ	摩滅
33	59	76	10T	4	土師器	甕、口縁部	20	20.7		10.6	にぶい褐色	にぶい褐色	粗	普通	クテヘラケ ズリ	ナデ	内外面摩滅
33	60	77	10T	4	土師器	甕、底部欠	50	23.0		9.8	橙色	明赤褐色	粗	良好	ヘラケズリ・ ナデ	ナデ	摩滅
33	61	75	10T	4	土師器	甕、胴部				7.0	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	粗	普通	ヘラケズリ・ ナデ	ヘラナデ	76と同一個体か?

第11表 柿谷遺跡 (1) 出土遺物観察表 (石製品)

挿図 番号	掲載 番号	実測 番号	遺構 番号	遺物 番号	単位: cm, 現存値			色 調		備 考
					長さ	幅	厚さ	外面	内面	
35	1	57	2T	5	3.2	2.5	1.4	暗灰褐色	暗灰褐色	
35	2	59	2T	2	7	2.8	2.6	灰褐色	灰褐色	各面共に擦痕
35	3	60	2C-07	2	9.4	3.1	1.4	黄褐色	黄褐色	各面ともに使用痕、擦痕あり
35	4	78	1T-2	1	7.9	5	20	灰黒色	灰黒色	使用痕あり
35	5	68	SI-004	1, 2, 4, 17	4.1	5.1	1.7	黒褐色	黒褐色	金属と思われる刃の擦痕
35	6	62	SB-001, P4	62	7.25	5.1	5.3	黄褐色	黄褐色	支脚か?



第34図 出土遺物(6) 転用砥石



第35図 出土遺物(7) 石製品

第6章 まとめ

今回報告する4遺跡のうち2遺跡が山武郡大網白里町に、1遺跡が茂原市に、1遺跡が長生郡長柄町に所在している。これらのうちで大網白里町と茂原市に位置する遺跡は九十九里海岸の低地部から土気地域の台地部に移行する場所に立地している。従来の本地域の発掘調査は東金市・大網白里町から隣接する千葉市土気地域の台地部や東京湾と九十九里平野の分水嶺に近い位置に集中していた。これに対して、今回報告する各遺跡はより海岸に近い場所に位置している。その結果、台地上で検出された大規模集落群とは別に、小規模集落跡が多く、遺構の検出も4遺跡5地点のうちで最も南の長柄町柿谷遺跡を別にすると、住居の検出例はなく、遺物も少なかった。

大網白里町では従来低地部や低地水田部の調査例は少なかったが、今回上七反目遺跡が調査された。遺構や遺物量は少なかったが、古墳時代の土師器～古代の土師器と中世と推定される木製品が出土し、本地域の新資料を提供することができた。遺構は溝状遺構1条が検出されたが、調査地点は微高地ではあるがここが集落跡とは考えられず、近くに集落の存在が推定される。出土した遺物のすべてが摩滅しており、原位置を保って出土したものはない。出土遺物は高坏が多くこれは5世紀代から6世紀代の土器である。木製品は田下駄とともに板材と思われる部材が出土している。

また、神房館跡の調査では、「館」「城跡」の遺構・遺物の検出が期待されたが、調査範囲内からは検出されなかった。今回の調査で館に関する遺構が検出されなかったことは、調査を実施した「神房館跡」が「館」「城跡」ではなかったということではなく、このような「居館」「館」等の調査は、もっと広範な現在の集落域を含めて考える必要があることを示している。

小高前遺跡は、小支谷の最奥部から土坑等が検出された。土坑・柱穴以外の遺構は検出されなかった。柱穴には底部にアタリ（柱受け）と思われる変色した痕跡がみられ、掘立柱建物の柱穴と推定されたが柱列としては並ばない。出土した遺物は古墳時代中期～奈良・平安時代の土師器と須恵器長頸壺が出土している。これら図化できた遺物はトレンチ内(3T)からの出土で、他のトレンチから遺物の出土はなかった。後世の耕作によって遺構の遺存状態が悪かったが、このような小支谷の最奥部からも生活の痕跡を検出できたことは注目値する。

柿谷遺跡は中央部に小尾根が入り2地点として調査を実施したが、本来は同一遺跡である。柿谷遺跡(1)の調査区は斜面部で、竪穴住居は複雑に重複していた。竪穴住居が8軒、掘立柱建物跡1棟、ほかに土坑が検出された。竪穴住居と掘立柱建物は重複しており、掘立柱建物が最も新しい。検出したSB-001以外にもSK-015も掘立柱建物の柱穴と思われ、この調査区に複数の掘立柱建物が存在していたことがわかった。SI-007は6世紀後半から7世紀初頭、SI-001・003・004は8世紀末、SI-006は9世紀初頭の遺物が主に出土しており、SI-007出土の坏は9世紀末から10世紀初頭の遺物が混入している。覆土が浅く、遺物の帰属が不明な部分があったが、柿谷遺跡(1)は6世紀代から10世紀にかけての生活の痕跡がみられた。しかし、カマド内の焼土の堆積は少なく、各住居跡は短期間の使用であったと推定される。柿谷遺跡(2)は確認トレンチ内から土坑が検出された。形態が一定しておらず、遺物の出土は少なかった。その中でもSK-011は周辺からは遺物が出土し、周辺に遺構があったと推定されるが、遺構の検出はSK-011のみであった。出土遺物は8世紀末のもので、柿谷遺跡(1)と同一時代のものであった。このことから柿谷遺跡(1)と柿谷遺跡(2)は同一遺跡と思われる。

写 真 图 版



周辺航空写真







調査前遠景 A地点



調査前近景 F地点



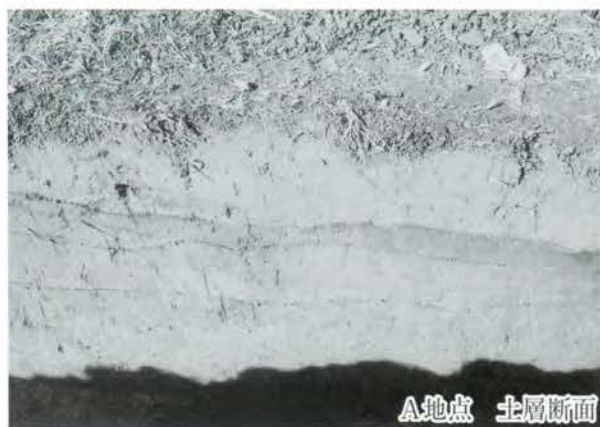
A地点 1T



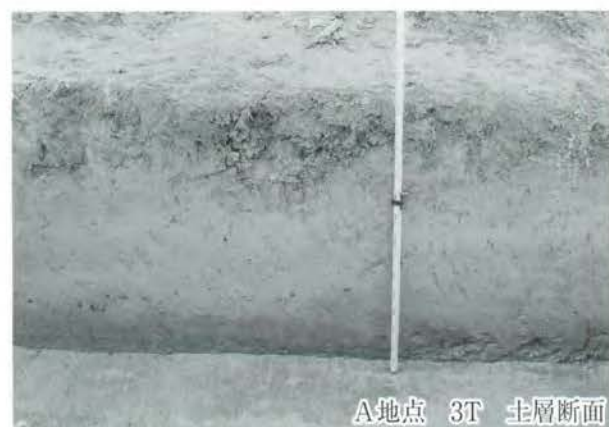
A地点 2T



A地点 3T



A地点 土層断面



A地点 3T 土層断面



B地点 1T



B地点 2T



C地点 トレンチ





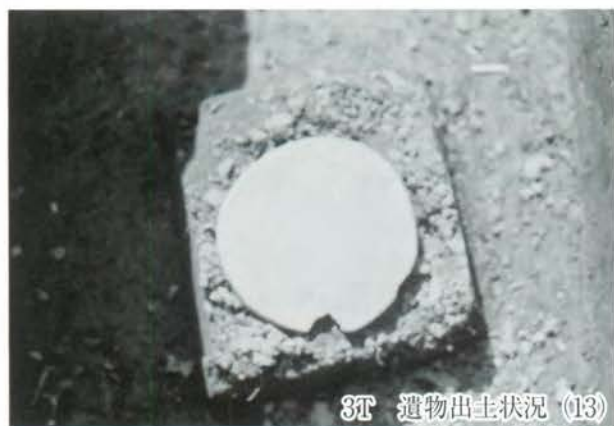




1T



2T



3T 遺物出土状況 (13)



4T 遺物出土状況 (12)



6T



8T

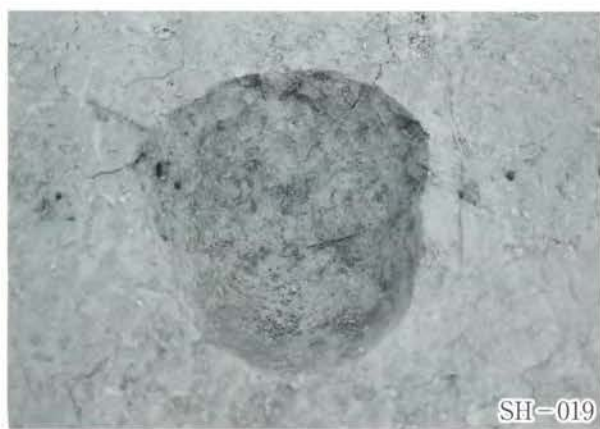


SH-001 (P1・P2)



SH-002 (P1・P2)















SI-003 全景



SI-004 全景











柿谷遺跡 (1) 航空写真 遠景



柿谷遺跡 (1) 航空写真 近景





1(上)



2(上)



4(上)



5(上)



3(上)



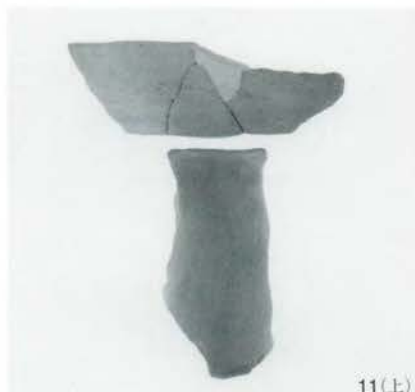
7(上)



8(上)



6(上)



11(上)



9(上)



10(上)



12(上)



13(上)



14(上)



15(上)



16(上)



17(上)



18(上)



19(上)



21(上)



22(上)



20(上)



23(上)



24(上)



25(上)



1(神)



2(神)



3(神)



5(小)



1(小)



4(小)



3(小)



6(小)



7(小)



8(小)



9(小)



10(小)



8(小)
底部



11(小)



12(小)



14(小)



15(小)



13(小)



16(小)



17(小)



18(小)



1(柿1)



2(柿1)



3(柿1)



4(柿1)



5(柿1)



6(柿1)



7(柿1)



11(柿1)



12(柿1)



8(柿1)



15(柿1)



16(柿1)



9(柿1)



19(柿1)



17(柿1)



10(柿1)



22(柿1)



14(柿1)



23(柿1)



20(柿1)



18(柿1)



25(柿1)



21(柿1)



27(柿1)



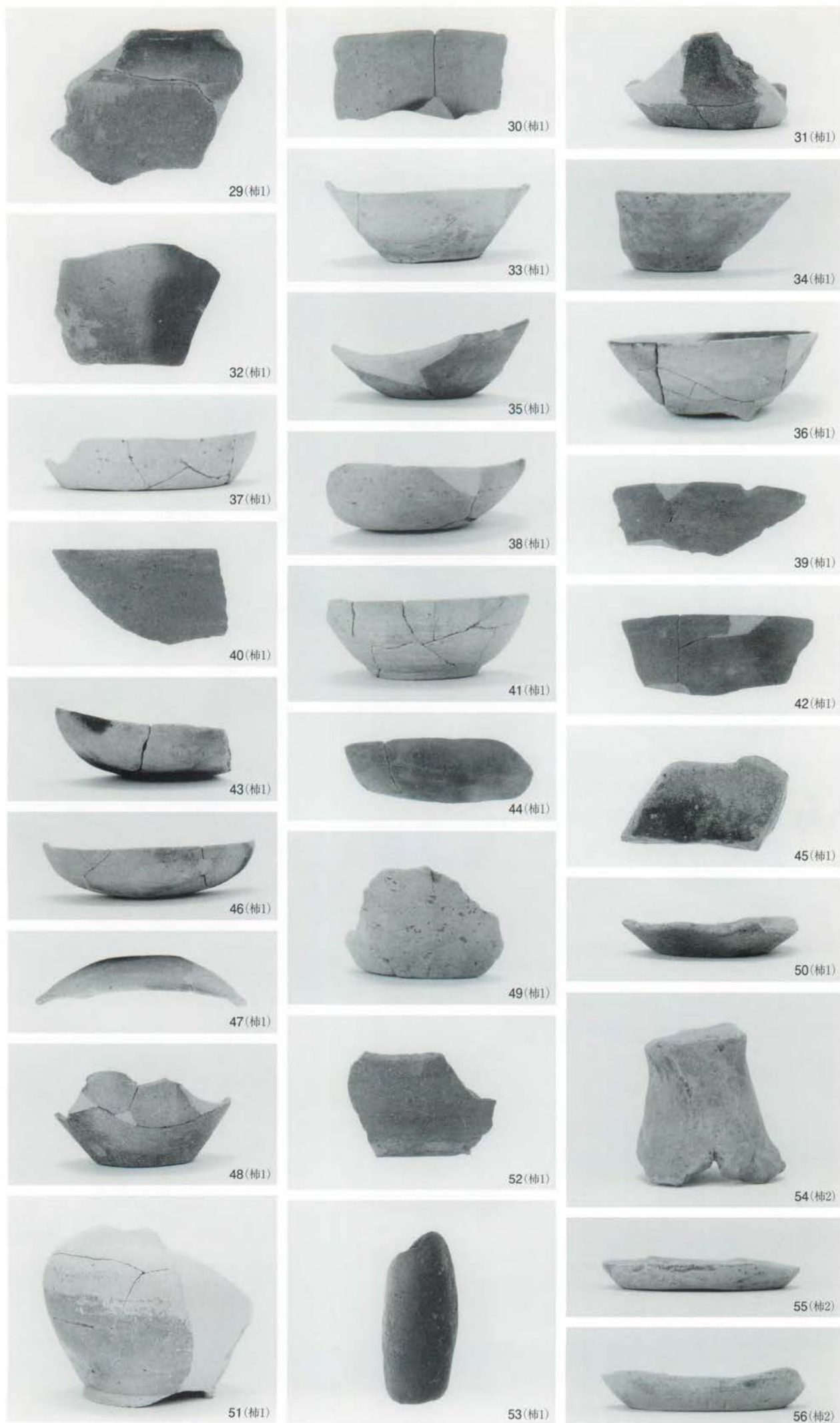
24(柿1)



28(柿1)



26(柿1)



出土遺物 (4) 土器 (4)



57(柿2)



58(柿2)



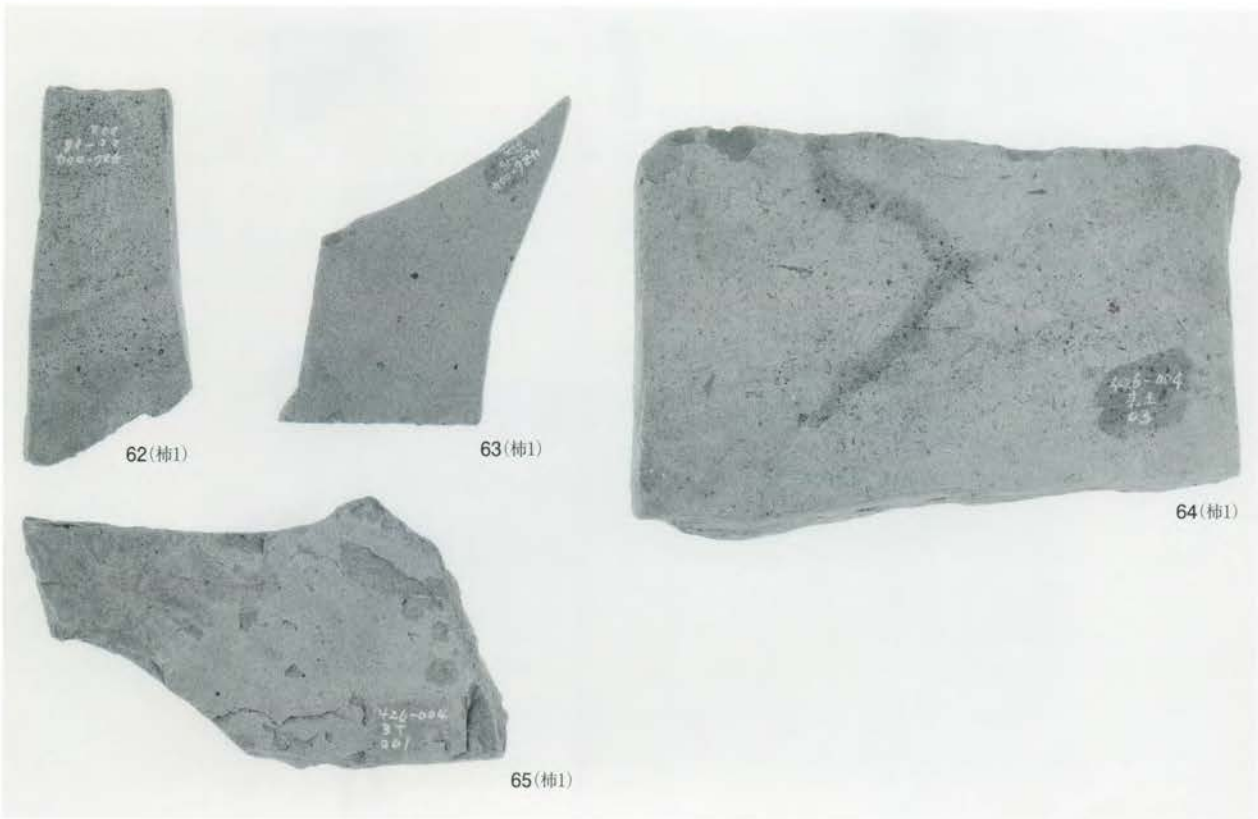
60(柿2)



59(柿2)



61(柿2)

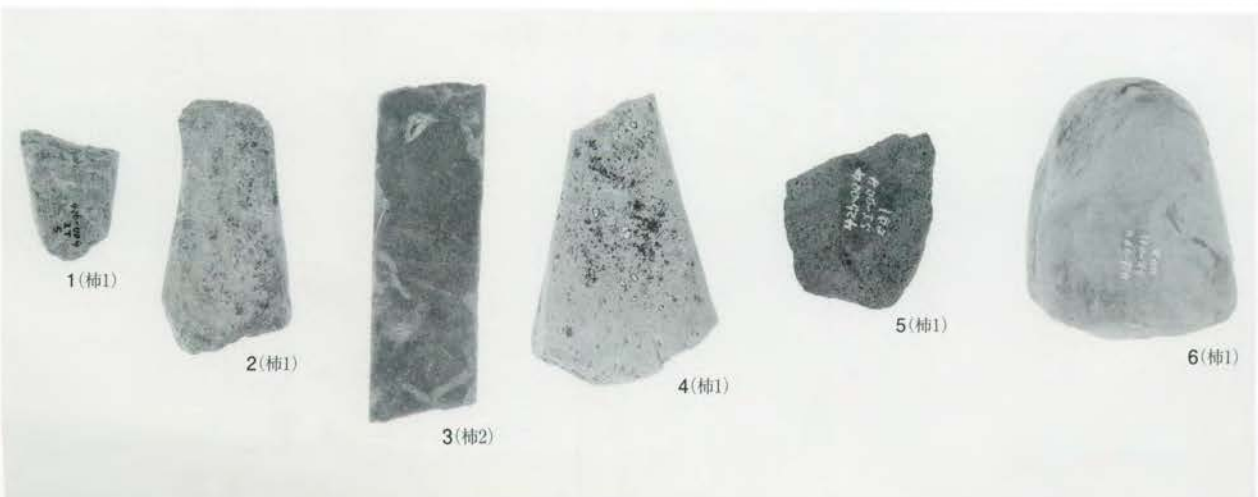


62(柿1)

63(柿1)

64(柿1)

65(柿1)



1(柿1)

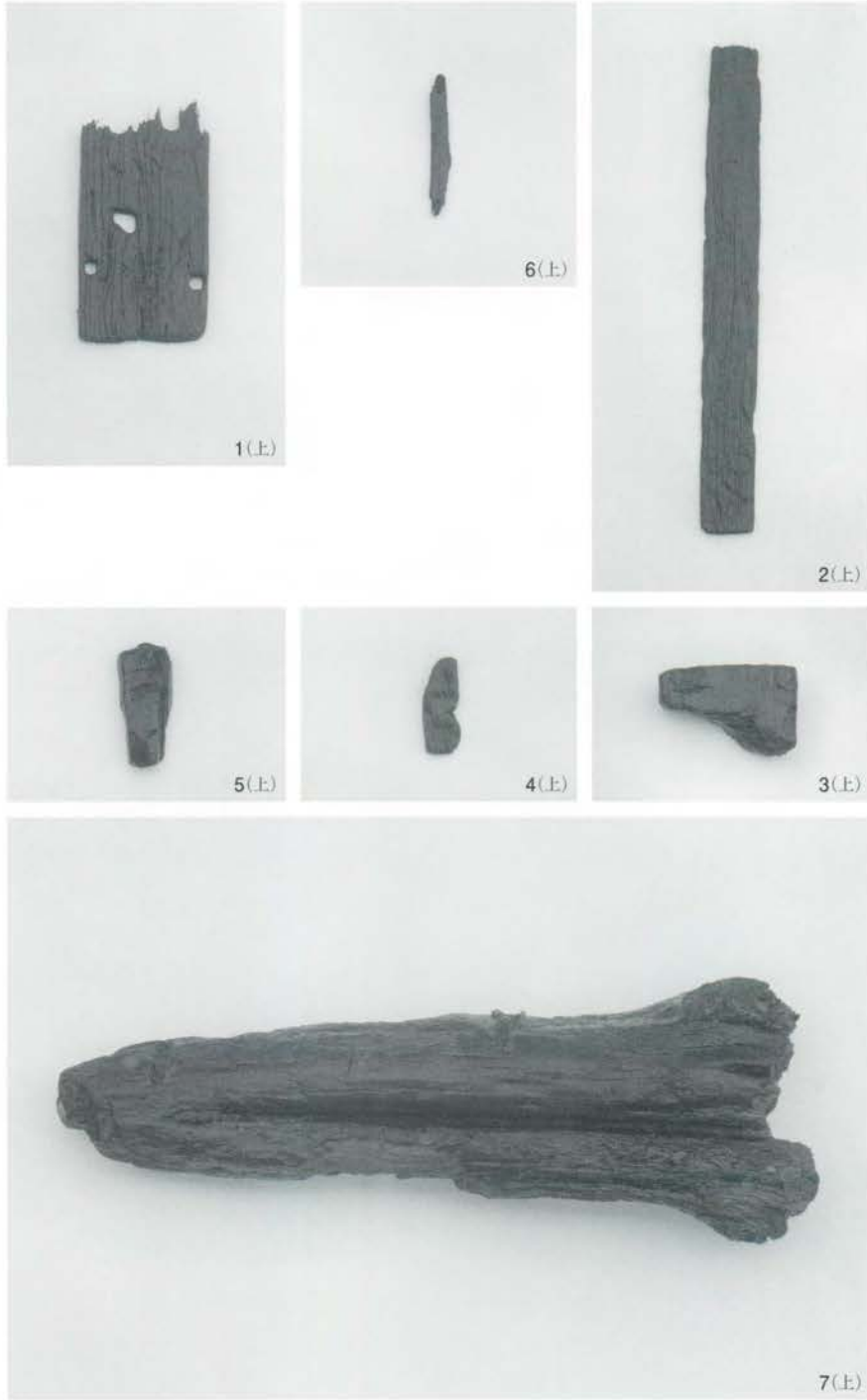
2(柿1)

3(柿2)

4(柿1)

5(柿1)

6(柿1)



出土遺物（6）木製品

報告書抄録

ふりがな	しゅとけんちゅうおうれんらくじどうしゃどうろまいぞうぶんかざいちようさほうこくしよ
書名	首都圏中央連絡自動車道路埋蔵文化財調査報告書
副書名	上七反目遺跡・神房館跡・小高前遺跡・柿谷遺跡(1)・(2)
巻次	11
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第654集
編著者名	相京邦彦
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-424-4848
発行年月日	西暦2011年2月21日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上七反目遺跡	大網白里町小中七反目450-1	402	012	35度31分01秒	140度17分48秒	20091009～20091106	1,809㎡	道路建設に伴う埋蔵文化財調査
神房館跡	大網白里町大字神房字打越521-1	402	007	35度30分07秒	140度17分38秒	20061201～20061225	24,997㎡	
小高前遺跡	茂原市桂字小高前542-1	210	010	35度29分45秒	140度17分17秒	20090401～20090420	5,676㎡	
柿谷遺跡(1)	長柄町榎本字イハギシ964-1	426	004(1)	35度25分57秒	140度15分13秒	20060816～20061025	3,900㎡	
柿谷遺跡(2)	長柄町榎本字イハギシ978-2	426	004(2)	35度25分54秒	140度15分13秒	20090403～20060430	2,892㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上七反目遺跡	包蔵地	古墳時代 奈良・平安時代 中世	古代 溝 1条	古墳時代 土師器・須恵器 奈良・平安時代 土師器	田下駄など、木製品が出土
神房館跡	館跡	中世	なし	古墳時代 土師器	
小高前遺跡	集落	奈良・平安時代	奈良・平安時代 ビット多数	奈良・平安時代 土師器・須恵器・砥石	
柿谷遺跡(1)	集落	奈良・平安時代	奈良・平安時代 竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡1棟、土坑9基	古墳時代 土師器 奈良・平安時代 土師器・須恵器	谷奥部に重複して竪穴住居跡が検出された
柿谷遺跡(2)	集落	奈良・平安時代	土坑9基	奈良・平安時代 土師器・須恵器	

要約	路線の調査のためと谷部の調査が多く、遺跡毎の面積は狭い。そのために遺構の検出も少ない。それらの中で、上七反目遺跡からは田下駄などの木製品が出土した。明確な時期は不明であるが、周辺から出土した土器片が奈良・平安時代を中心としていること、田下駄などの形から古代近くまでさかのぼるものと思われる。
----	---

千葉県教育振興財団調査報告第654集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書11

— 大網白里町上七反目遺跡・大網白里町神房館跡・茂原市小高前遺跡・長柄町柿谷遺跡 (1)・(2) —

平成23年 2月21日発行

編 集	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
発 行	東日本高速道路株式会社 関東支社 東京都台東区北上野1-10-14
印 刷	財団法人 千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の2 株式会社 正文社 千葉市中央区都町1-10-6